女鑑



明治三十五年十[illegible]發兌

（毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）

第貳百六拾四號


東京日本橋駿河町
大阪高麗橋三丁目
三井呉服店
東京電話本局 特五二五、一一一七
一八六〇、二二二二
大阪電話東 特四七三
一六五〇
三四八六
新柄流行の反物品々階上階下にの
こらず陳列し尚休息室をも取設け
候間ゆる〳〵御遊覧奉願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御
申越被下候はゞ小包郵便にて發送
可仕候尚注文案内書も有之候

女鑑第貳百六十四號目次

口繪

社説……一

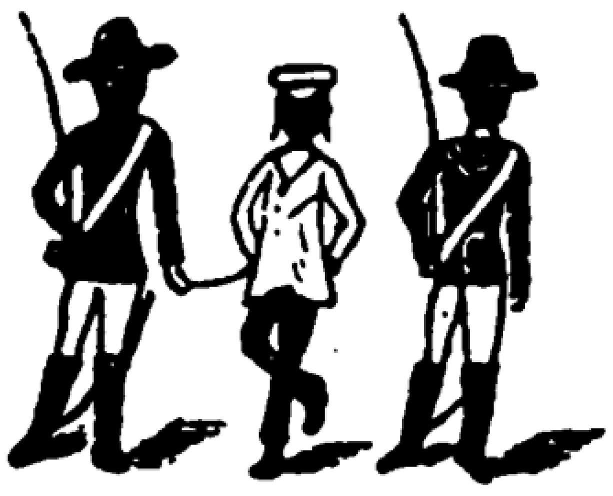
論説……四

史談……一一

學藝……二二

家庭……三三





●秋期附錄

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

西川製風琴



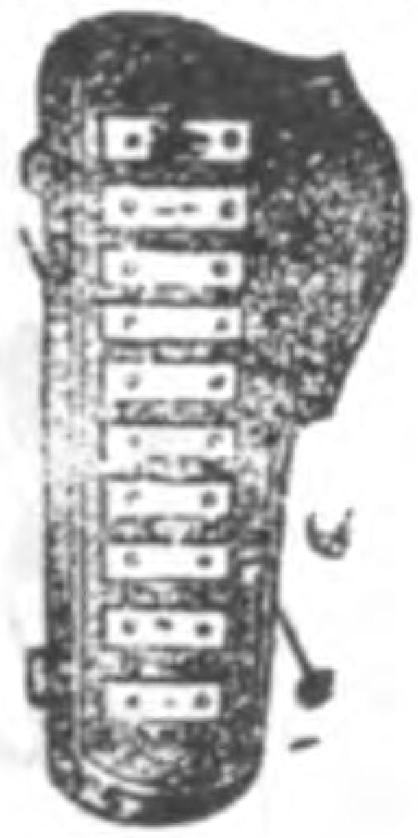
音律正確
保險防…

正價
十八圓廿圓廿七圓三十三圓
三十七圓四十三圓四十八圓
五十五圓六十五圓七十五圓
八十五圓百圓百廿圓百五十
圓貳百圓以上

●手風琴●



●新式●

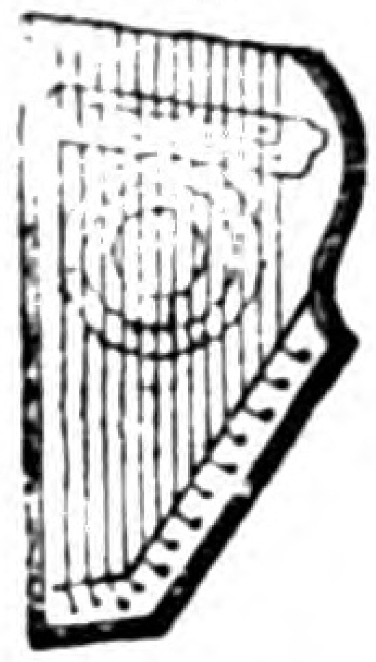


定價
三圓廿錢三圓五十錢四圓五十錢
五圓五圓五十錢六圓七圓七圓五
十錢八圓九圓十圓十二圓十五圓
十六圓十八圓以上各種
●手風琴獨まなび全一冊金五十錢

鐵心琴

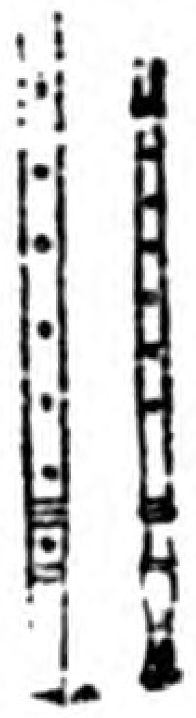
並製十音五十五錢
中製十音七十五錢
中製十三音壹圓
●右案內書附●

陽琴



定價
普通線並製金一圓七十錢
同　線上製金二圓七十錢
二重線上製金四圓五十錢
黑塗外箱一圓五十錢二圓

●舶來銀笛



三十五錢七十
錢八十錢一圓

●教科適用 幼年唱歌　全十冊　正價一冊拾錢　郵稅一冊貳錢

●新編 中學唱歌集　上中卷　正價一冊三十錢　郵稅一冊六錢

●日本遊戲唱歌　自初編至六編　正價一冊十五錢　郵稅一冊貳錢

●明治音樂會編 學校唱歌　全二冊　正價金三十錢　郵稅金四錢

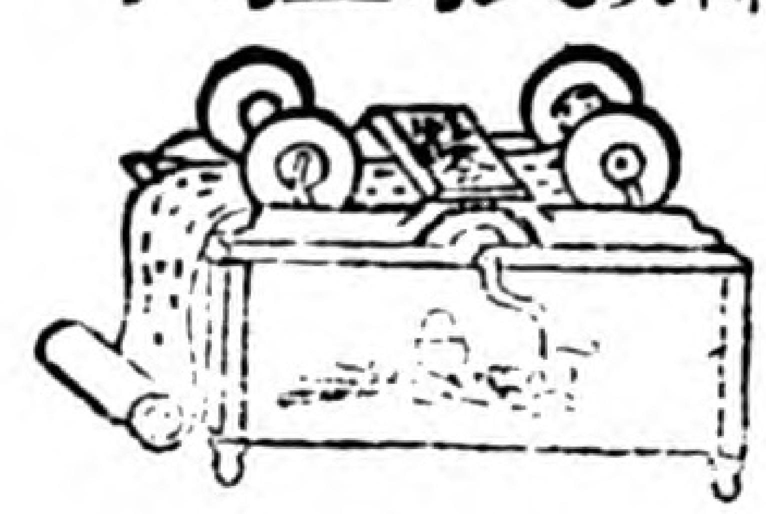
西洋樂器書籍販賣所

東京銀座三丁目二番地

十字屋

電話新橋千二百五十九

●無師獨奏 紙腔琴●



定價
小形上製五圓
大九圓七十五錢
大形上製十五圓

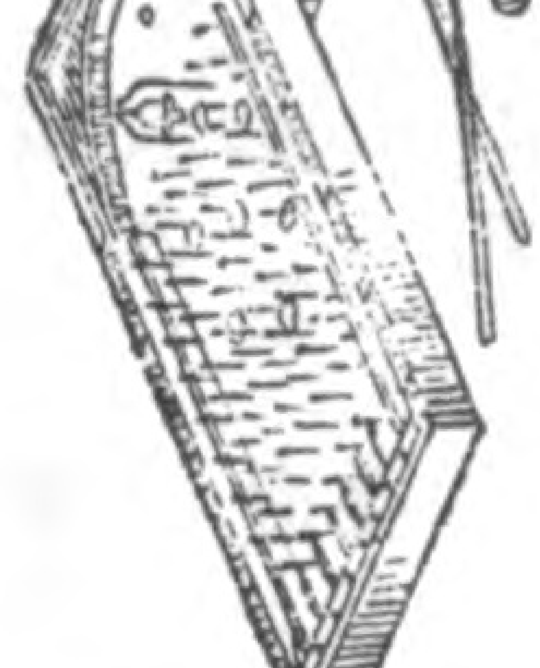


定價（參圓
六圓五十錢）



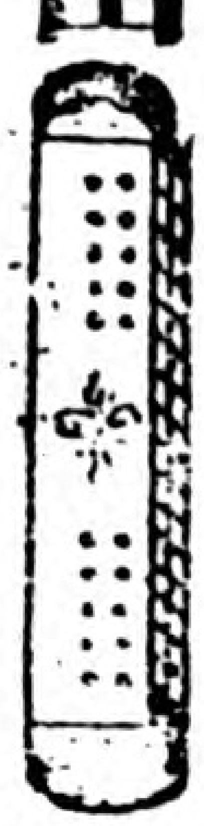
大小蠟管蓄音器
十八圓二十五圓四十五圓六十五圓八十
五圓百圓百廿圓二百五十圓各種
蠟管長唄端唄清元義太夫樂隊御好に應す

:座敷玉突:



定價
並製金五圓
同　金五圓廿五錢
特別製金十圓

●西洋横笛



四十錢五十錢八十錢一圓（各種）

●中學單音唱歌　全一冊　正價金四十錢　郵稅金四錢

●修身教典唱歌　上下卷　正價金十六錢　郵稅金貳錢

●文部省檢定濟 大捷軍歌　全七冊　正價金廿八錢　郵稅金四錢

●瓜生繁編 進行曲　全一冊　正價金四十錢　郵稅金六錢

いかなとうて
こゝろのむすかはて
君か代を
ちよよりやちよに
祝ひまいしれ

坂正臣氏書



小川一眞謹製

御注文の節は女鑑廣告に披りたる旨御附記被下度候

醫學士櫻井氏序　婦人科小兒科女醫吉田けん氏著

妊婦必讀 安産の心得

附 育兒法

育兒法合本定價全一冊送料共　金四十四錢　郵券一割增

本書は妊娠中の攝生◉分娩の心得◉産後の注意◉育兒法◉人工營養法◉人造營養品等を詳述せり産婦の健康に注意し强健の子孫を得んと欲する人は男女を問はず必らず一讀せよ

●時事新報評本書は婦人科小兒科女醫吉田賢子の先年發行したる妊娠の徵候及び妊娠より分娩産蓐中の攝生並に保育法を記せしものに育兒法並に家庭の一般を增補したる者にして姙婦の一讀すべき書也

◉都新聞社員吉川生著

女子内職案内

附 女子職業各學校入學手續

◉全一冊送料共 金廿二錢　郵券代用一割增

此書は不景氣を忘れたい人金儲をしたい人、暮し向を裕にしたい人々のために親切に解りやすく誰れでも出來る内職の事をくはしく書いたもので奥さん方は勿論御孃さん御女中方は是非一冊を購つて家の寶としなければなりません

發行所　東京赤阪區田町三丁目　保成堂

賣捌　神田表神保町東京堂◉通一丁目大倉書店◉通三丁目丸善書店◉銀座二丁目服部◉大阪市博勞町四丁目丸善支店

當女子部第一回卒業生左ノ如シ

女子部教員ニ　山口縣士族　森田昌代子

東京市神田區裏猿樂町四番地

私立銀行事務員養成所女子部

●女生徒募集

女子ニ簿記法ヲ教授シ家計整理又計算事務員ニ養成ス卒業後紹介ヲナス卒業期四ケ月申込隨意

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

◎**寫眞製版**

寫眞版（コロタイプ）
寫眞銅版調製及印刷

◎**寫眞撮影**

普通寫眞不變色寫眞
風俗風景古畫寫眞狀

○自今一日十五日の休日を止め
日々撮影仕候

小川一眞

東京新橋日吉町

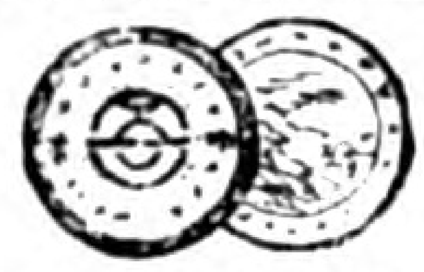
小川寫眞製版所

（電特新橋三九二）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

登録商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴヰオレツト製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい●



ねり製 定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢

水製 定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

ヴワイオレツト水製



錫栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成結晶體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せず御肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雑踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

●緑、藍、紅彩蝶番ひボックス入 三錢
罐詰 六錢五厘 袋入 壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に専ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髪洗ひに用ひ給へば毛の抜ろ病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髪のねばりを取り油あかふけ等を生せす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるも良とす

登録商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG POWDER

壽美禮あらい粉



製造本舗

東京東兩國
横網町一丁目

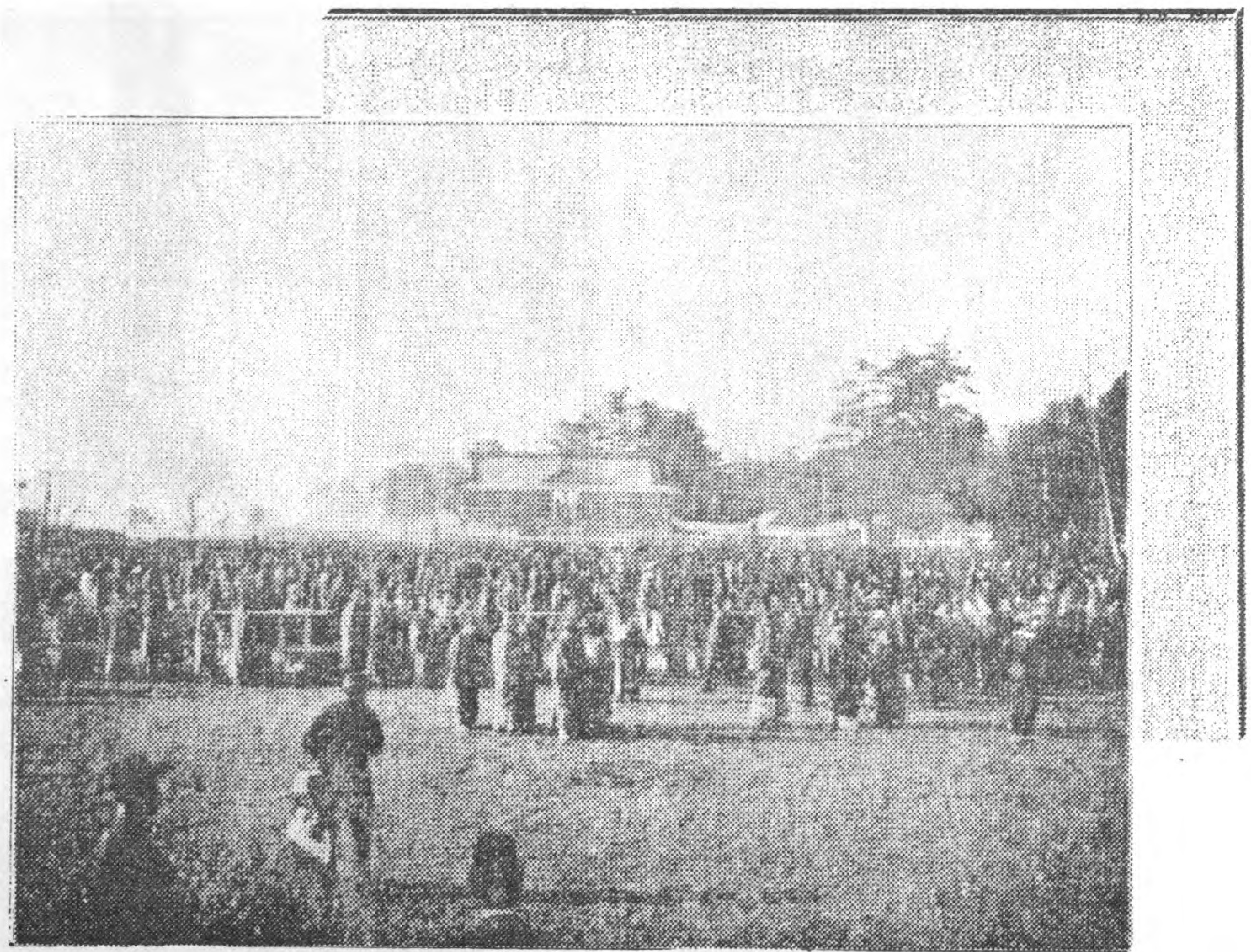
伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ

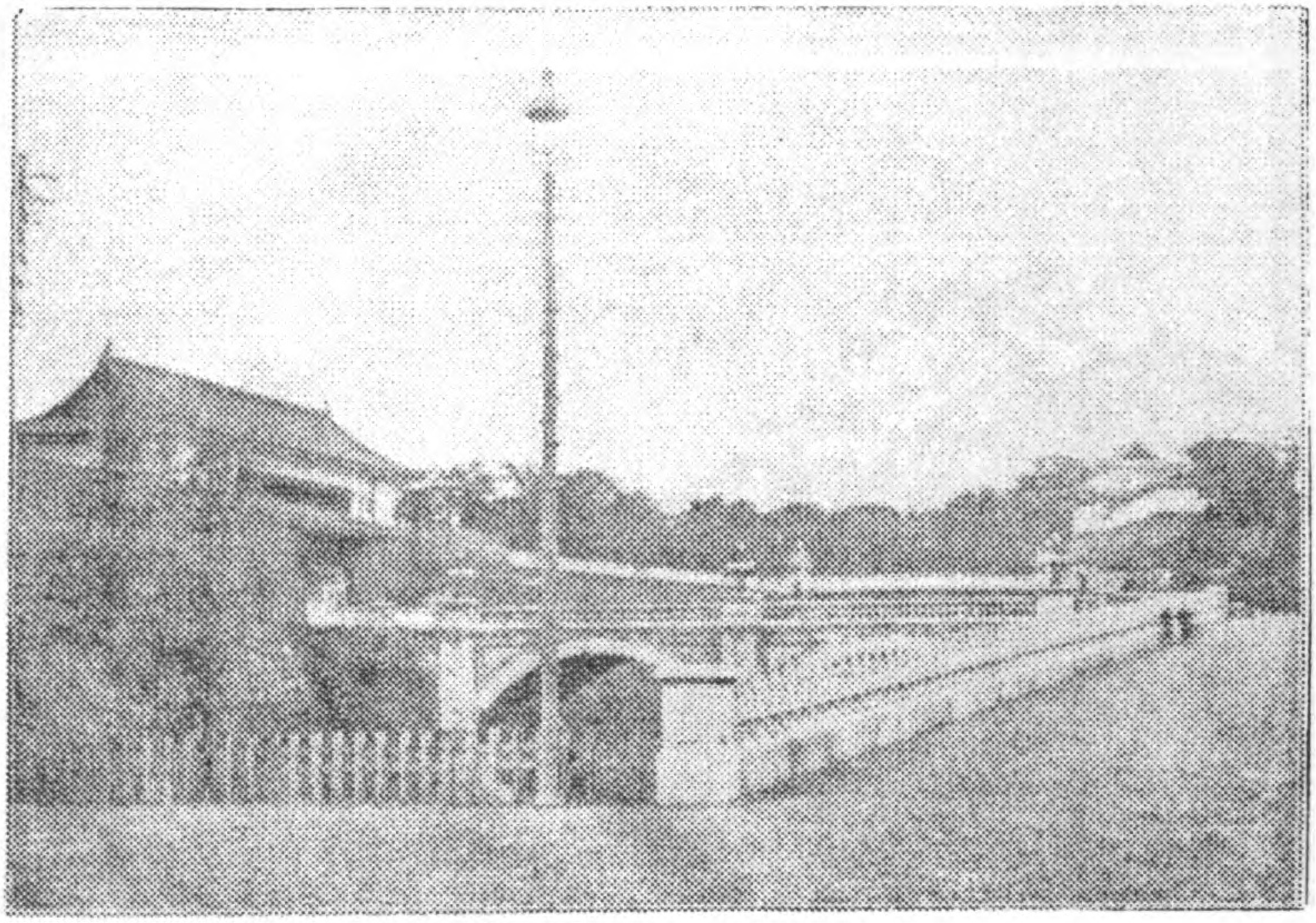




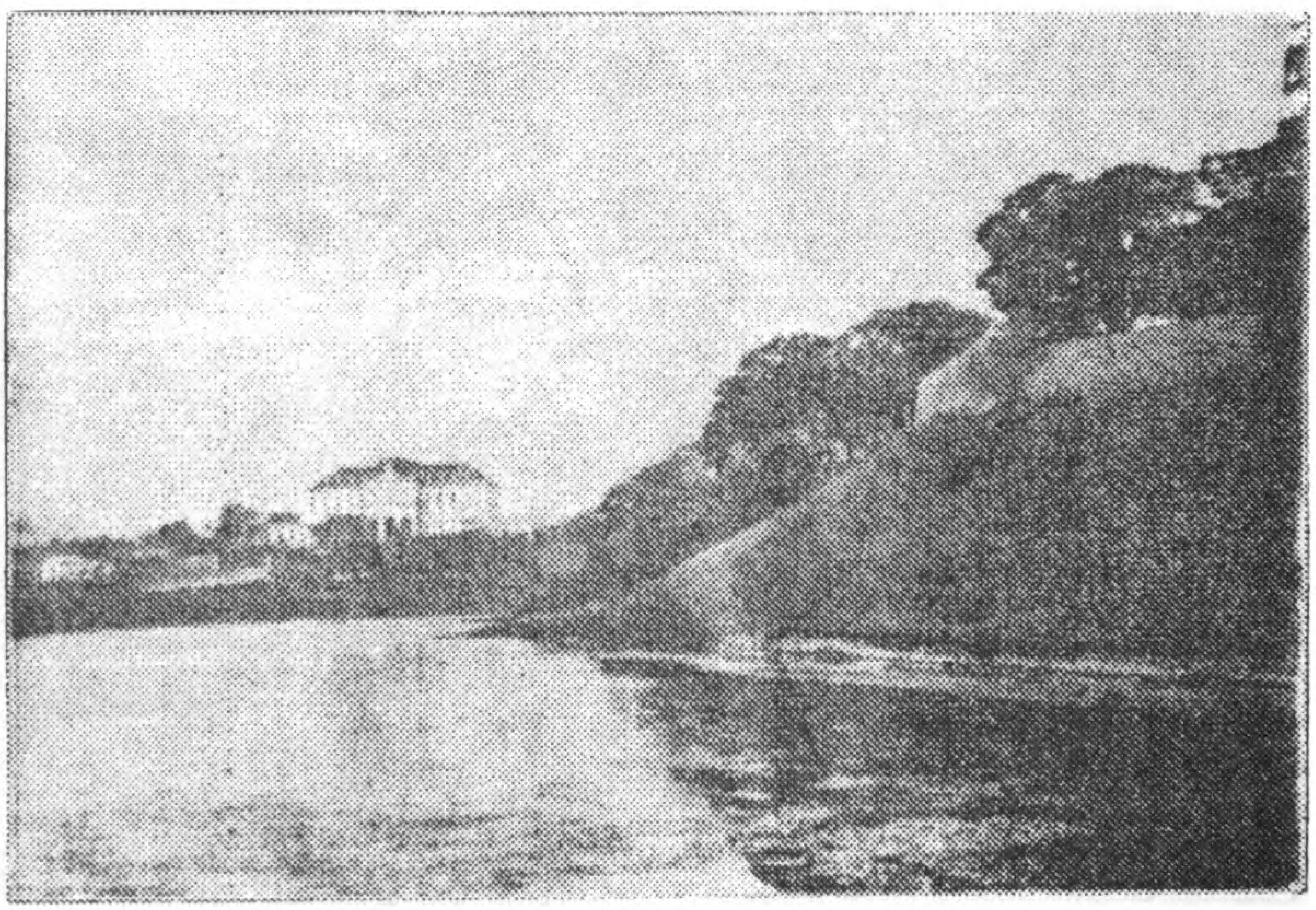
日本赤十字社總裁小松宮殿下及妃殿下



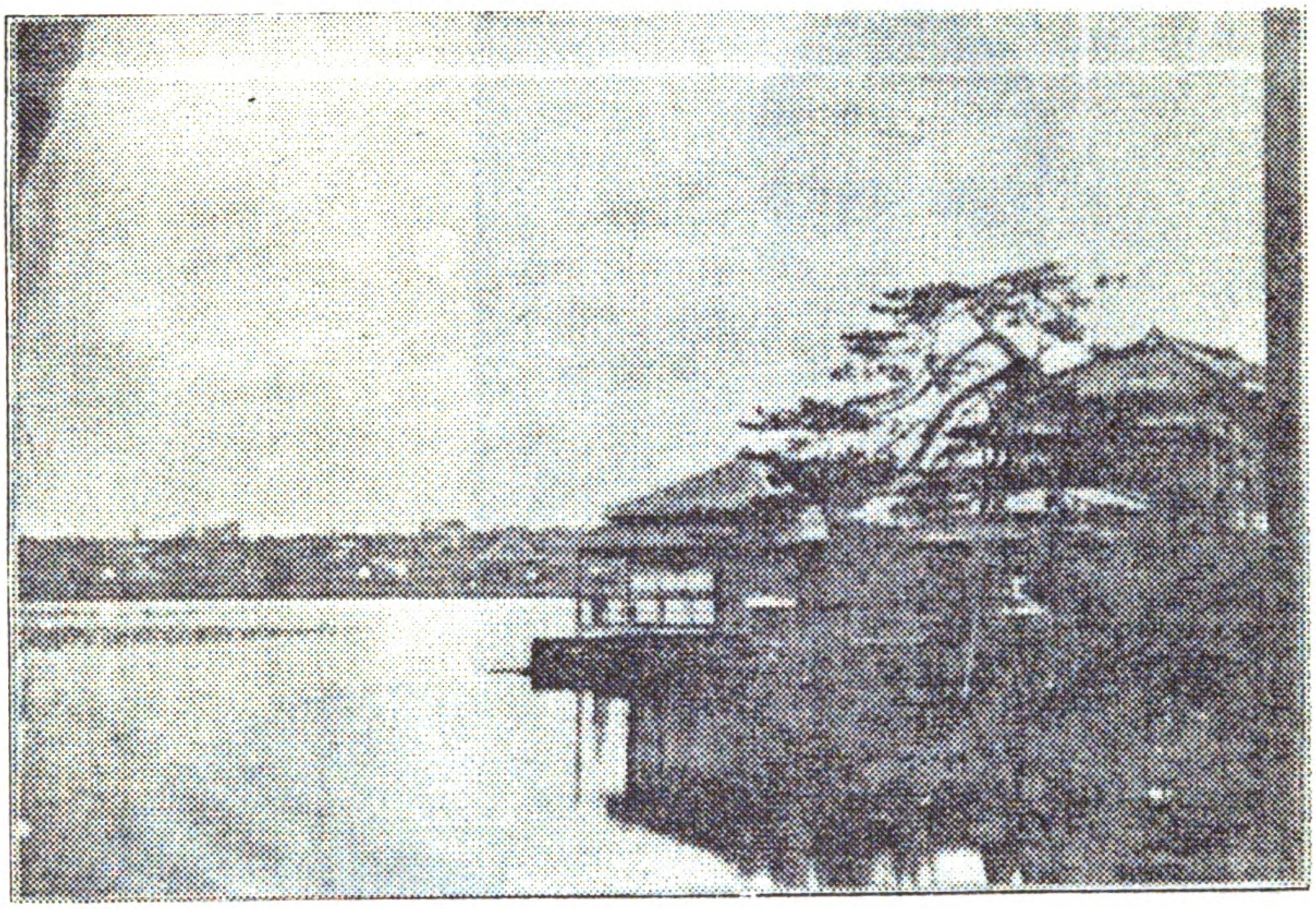
十月廿一日日本赤十字社總會々場の光景



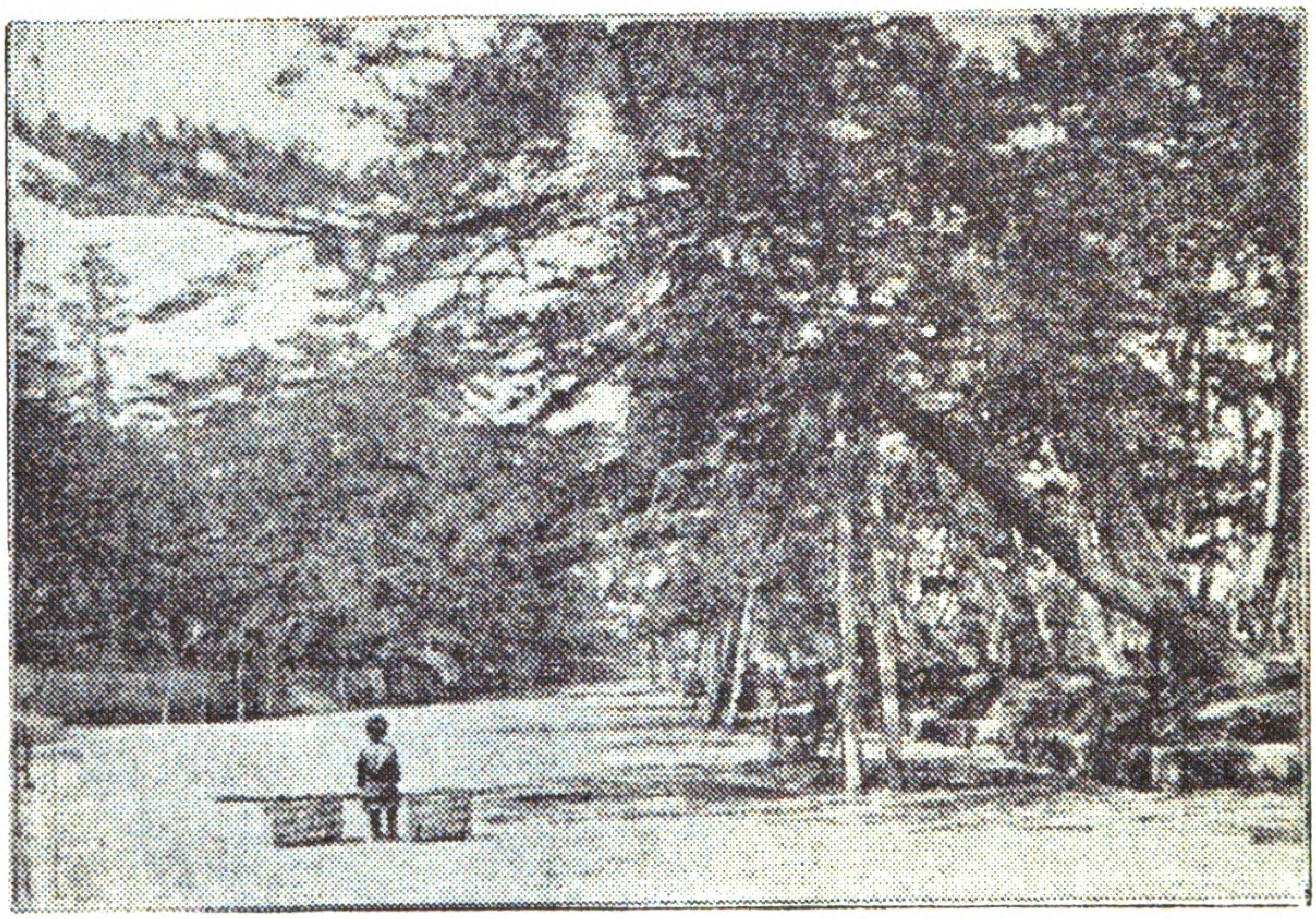
皇城二重橋



櫻田御門より參謀本部を望む



不忍の月夜



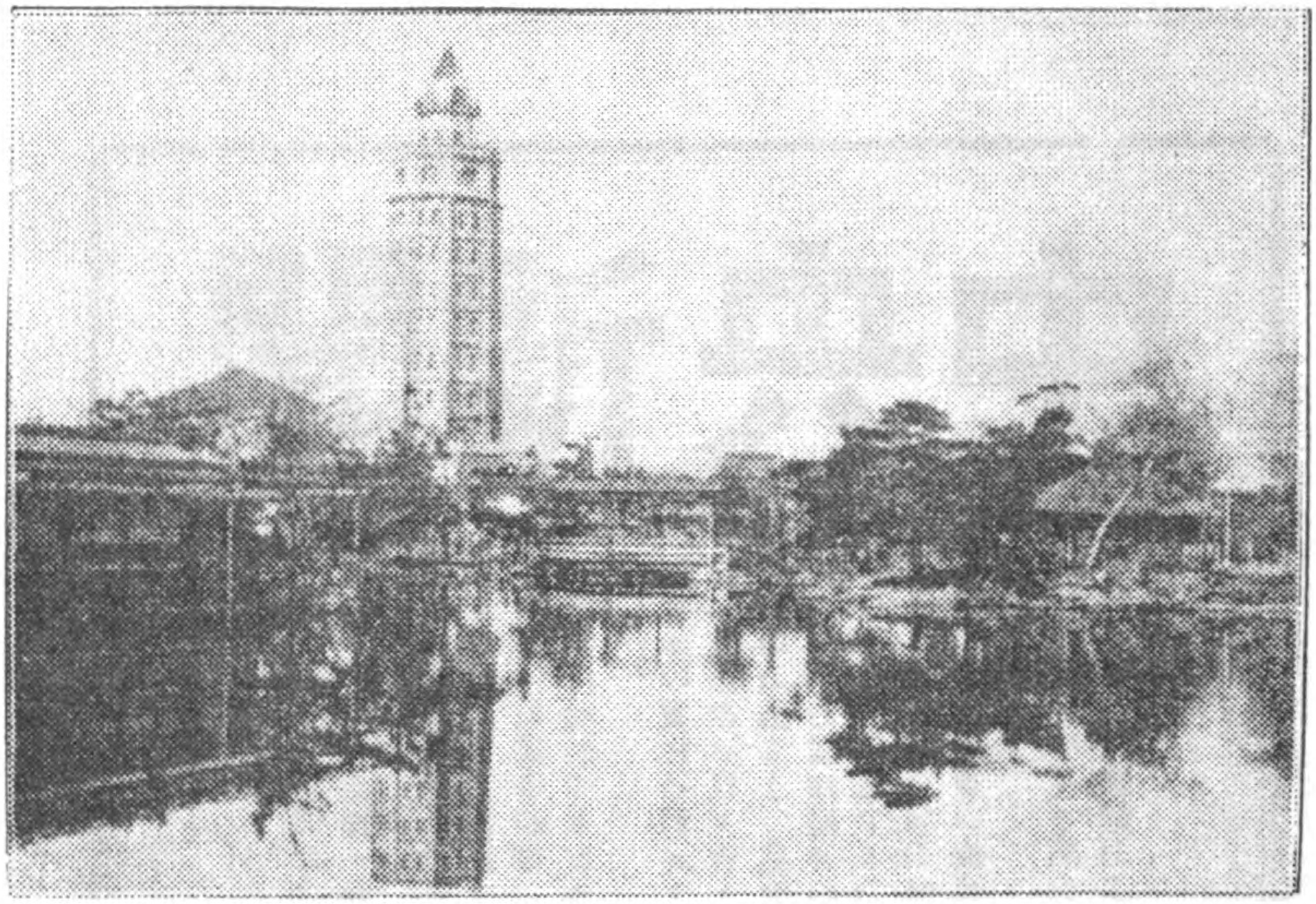
芝公園



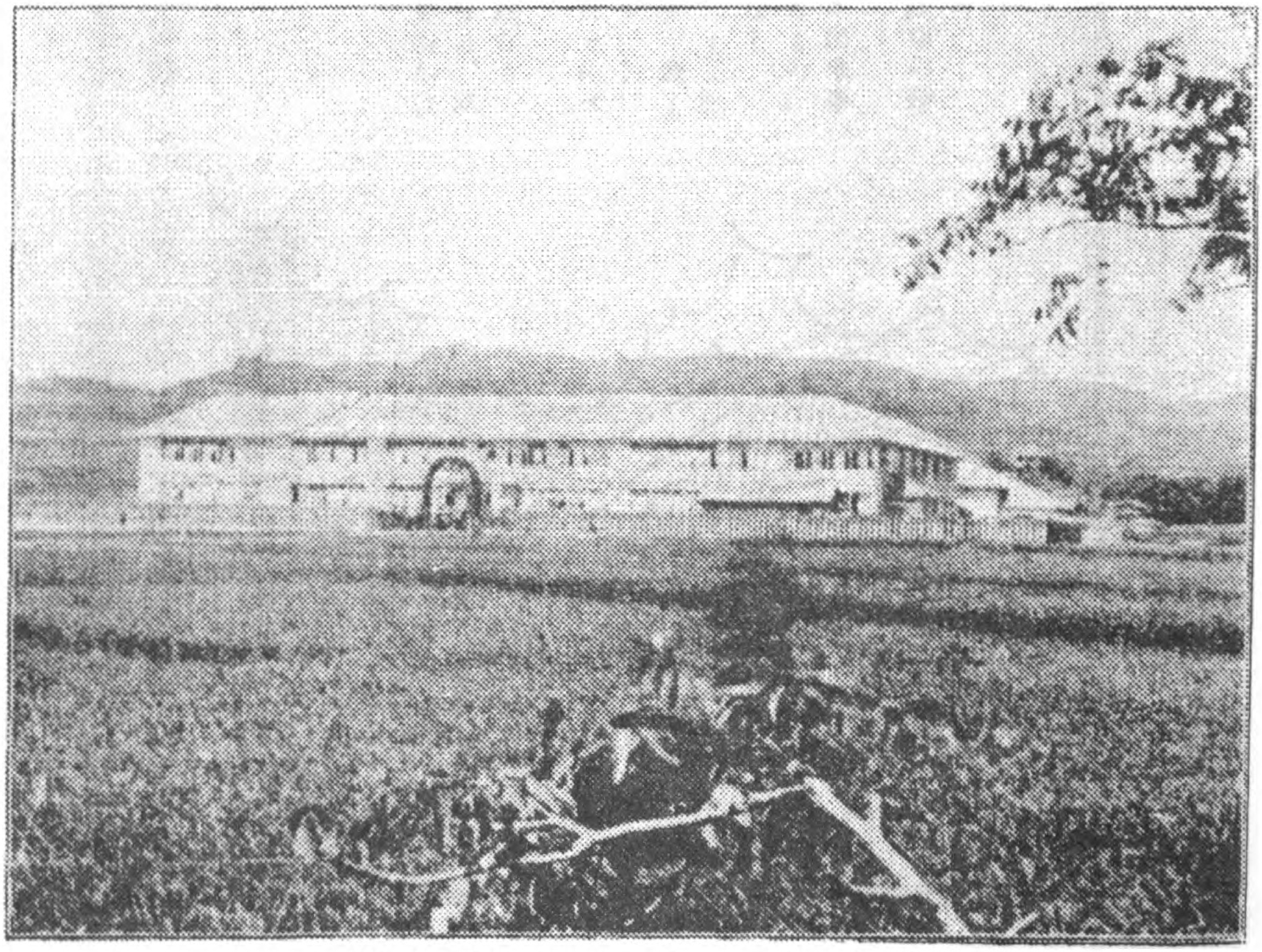
私立名古屋高等女學校
教諭佐藤雲韶氏



銀行事務員養成所
女子部教員 森田昌代子



東京淺草公園
凌雲閣眞景



（同校職員神谷氏撮影）

信州松本高等女學校全景

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

實業時論

▲大附錄 法農工理博士七十二名の肖像〔精巧美麗なる寫眞大版〕▼

十月五日發行　貳卷　第拾號　要目　一冊郵券共拾六錢五厘

◉（口繪）モルガン氏と其事務所

◉（統計彙報）我邦十ヶ年間の商船と軍艦との增加噸數比較

社說

◉地租復舊論……（雄篇）

◉財政及行政整理論

◉對岸事業經營の急……加藤高明

◉對人信用論……豊川良平

◉商業國民たる日本……益田孝

◉清國經濟組織と貨幣……松崎博士

◉農民の促一大奮興……横井博士

◉農事試驗場の現狀……澤野博士

◉經濟學と外交關係……金井博士

◉日本監の將來……吉武博士

資料

◉獨逸國の糖業調査

◉東西兩洋の交通

◉我財政と韓半島……阪谷博士

◉歐州各國の租稅……小林學士

◉耕地整理手續……月田學士

◉十九世紀の電氣……某工學士

經歷談

◉山林野の廢物利用　守屋學士

◉實驗◉農業叢談◉實業顧問（白面）

◉ベッセル

◉貝島太郎

〔ミス、ヒユースの日本家庭談　鹿島屋淺子夫人◉庖厨重寶　流行小紋揃等婦人の好讀物〕

人物

◉月旦　二大學總長（共に論錄犀利）

◉西村勝三

◉世界富豪傳　米國モルガン氏

◉北清雜話▲奇人板倉熊法氏

名流談

▲手島高等工業校長の職工の教育

◉世界百話▲流行▲清商素養

◉北清雜話▲外國人の日本觀

◉無題錄の奇癖▲風聞錄の快

◉田川、稻垣兩氏の特別寄書

◉圖案◉商標雜報等記事豐富

▲大賣捌

〔東京〕神田東京堂◉京橋東海堂◉京橋北隆館◉京橋良明堂

其他全國到處の書店にあり

東京市麹町區飯田町三丁目

發行　大日本實業學會

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候





社説

謹んで天長節を祝し奉る

堯の雨、舜の風、亟民雍穆の和樂を蒙りて、聖世の治を謳ふこと此に三十有五年。誰れか斯の佳節に當りて、我皇の萬々歳を祝し奉らざるべき。

雨露の恩、草木に霑被するや、萬物みな欣々として榮に向はざるはなし。今我皇の恩德の及ぶところ荒陬僻土の内に洽ねくして、古への謂ゆる九夷八蠻の外にまで至り、以て及び被らざるものあることなし。豈啻だ雨露の恩の草木

に於けるが如きのみならんや。嗚呼是れ天地覆載の大恩と謂はんのみ。

野末の果ての荒屋にも、君が代の頌歌起り、津々浦々に至るまで、日章の國旗の飜へらざるなきは、聖世治下の臣民が、如何に皷腹撃攘して、今日を祝し奉つれるを表證するものにあらずや。瑞氣の靉靆として、皇城の上に充つるもの夫れ豈偶然ならんや。

吾が女鑑が、明治廿四年八月を以て始て初號を發刊してより、年を重ぬる十二年、號を追ふこと貳百六拾四に及び、その間恒に婦道に於ける中正の主義を守りて、之を江湖に表白し、女子敎育の爲め聊か貢献するあることを得たる所以のもの亦全く我皇の厚澤に賴らずんばあらざるなり。女鑑や、眇たる一雜誌、固より言ふに足らずと雖も、今より益々淬勵して、婦道の唱導を以て自任し、滿天下の女性をして、

貞淑ならしめ、順良ならしめ。賢正ならしめむことを期す。庶幾くは依りて以て、聖代の萬一に答ふるの微意を寄することを得ん歟。

謹みて天下の女性に代り。皇德の無疆、聖壽の萬々歳を祝し奉る。

あまつ日影はかはらねど
世の浮雲のゆきかひに
晴れみ曇りみさだまらで
なゝ百年となりぬるを
いまはと起るときつかぜ
四方の村雲吹きはらひ
豊さかのぼるみひかりを
仰ぐ御代こそ樂しけれ
『君は千代ませ、八千代ませ』
『君は千代ませ、八千代ませ』





女子教育上の危機

三輪田女學校長　三輪田眞佐子

一般教育につきて、正確なる智識を有するもの少きが如し、勿論千差萬別の意見を立つるもの多きは事實ならんも、既に千差萬別なるは正確なるものにあらざる證ならんか。如何となれば、若し正確なる智識ならんには千人萬人其の意見に於て一致すべき理なるに、未だ一致せざるは、正確ならざる所以なりと言ふべし。蓋しおのれの意見に於ても亦誰か烏の雌雄を知らんやで、眞の識者の笑を免れざるも知るべからず、されど思ふこと言はねば腹ふくるゝ心地こそすれと、古人の言はれたる如く考ふれば、聊かものせん。

おのれ思ふに、千差萬別なる女子教育上の意見を大別せば、分れて二となるべし。

一は教育上の力を萬能と信ずるもの。

一は教育上の力を殆ど無視するもの。

凡そ過ぎたるは猶及ばざる理にて、教育上の力を無視するものは、放任主義に流れて、愛孃を教育するに、時を撰はず、亦所を問はず。況して敎ふる人の品性如何などは、更に撿べず。單に絲竹の道とか、針線の業とかの一部分のみの藝能を傳授して足れりとするが如し。これに反して、教育上の力を萬能と信ずるものは、被教者の身体及び精

神上の遺傳を問はず。亦天賦の才不才とか徳不徳とかをも撰はずして、一朝教育だに加へば、萬人は一様の程度に發達し、進歩するものと信ずるが如し。されど人の天性は全くの平等にあらず、勢ひ差別あるべし。これ古人の下愚は移らずと言はれし所以なり。

然らば教育上最も正確なりとすべき見解は、各人は皆不平等なりと雖も、教育上の力は不平等のままに比準して發達し亦進歩するものなり。例令ば十の分量を有するものが、十二となれば、五の分量を有するものが、六となるが如し。故に愛嬢を教育せずして、粗野に失するは、恰も玉を琢かざるため光なしとて、棄つるが如し惜むべし。これに反して劣等なる女子の將來をば優等なるものと豫期するは、迂なりと言ふべし。要するに、教育上の効は施せば施すだけ増加せんも、萬人同等の域に進歩せんことは難からん。併しつとめて止まざれば望なきにあらず。

是を以て近來女學生の墮落を責むる聲、盛なるは社會の制裁上やがて進歩開展する基なりとして大に好みすべしと雖も、これがため父母をして失望せしめ、女學の防害をなさゞるこそ願はしけれ。蓋し生徒の居所を吟味し、禍を未萌に除くは最も策の宜しきものならんか。されど翻りて思ふに、物に動搖あるは自然の數なれば、去明治二十年前後の反動にて、一時女學の衰退を來せしも、數年以來再び隆盛に趣きしため、亦一轉期を來せしと見るこそ相當なれ。實に女學の隆盛に伴ひ、之の數も增加せしため、善良なるものも多しと雖も、不善不良なるもの亦少からず。而して其の中には感化院に入るべき性格のものも混ずべし。然るにこれをば普通の學校に入れたるが、抑も誤

なり。現におのれはかゝる學生を見ば忽ち處分して憚らず。以て他に感染せざることを祈る。これと一方には境遇のため誘惑せらるゝを以て、これを改善し、以て死地より救ふも今日の急務なり。

なほおのれの經驗する處に由るに、年少の時代より、膝下に教育せられて、成人せしものは、保證するを得んも、既に不良なる性癖を作りて、晩年就學せしものは、特に善性のものは格別なれども多くは教育上の効果著しからず、由りて更に教育を大別して、

一は外部的感化せらるゝもの

一は内部的奮起するもの

の二となすを得べし前者は幼少より、知らず識らず感せらるゝもの後者は刺擊に逢ひて、自ら省み、自ら進步發展するものなり。されば年少者は感化せらるゝことと容易なりとせんも、中途より就學せしものは、自ら我を養ひ、我を修むること能はざるものならんには、殆ど濟度の望なし。あはれ學校は病院にあらず。故に既に病むものは、罪を學校に歸せんよりも、社會に歸するが至當なり。これ教育を萬能と信ずるものゝ誤解し易き點なり。

現今は女學教育上の危機なり。此の時に當りて父母は教育その物の力を知り、これに分外の重きを置かず以て父母の注意を要す、論客は學校のみを責めず、亦社會をも戒め、學校は亦生徒の多きを主とせず、一人たりとも善良なるものを作り、以て教育家の天職を忘るべからず。而して若し不善不良のものあらば一歩も假借せずして處分するのみならず。朝野擧つて善後策を講じ、以て女學の衰退を釀すことなくば幸なり。

一尺を說み得るは一寸を行ひ得るに如かず　程伊川

禁酒禁煙

女子學院長　矢島揖子

私は教育の眼目としては、常に最も衛生に注意して居ります、然るに今日の學生などには衛生上一も全き滿足することが出來ないのであります。扨てこの全きことを得ないと云ふのは、マア一ツ衛生に妨があるからなのです、其衛生の妨と云ふことは、酒と煙草を禁じられないことです、表面から摘んで申せば、立入つて充分な衛生を爲たいと云ふものは酒と煙草を禁じなければなりませぬ。私が曾て小學教員を致して居りました時、五十人預つて居りますと、其内には乾度、五人か六人は痴鈍な子供があります、ソコで私が如何なる譯であるかと思ひまして、其痴鈍な子供の家へ行きて考へて見ますと、皆家庭が亂れて居りますが、其原は必ず酒と煙草に基因致して居ります、又其兒童の中で、馬車に乘つて通學させるやうな向は、其處の主人は、素より財産家のことですから、自然飲食に驕る傾きがありますので、馬車で通學するやうな兒童は、又大抵成績は宜くありませぬ、既に未丁年者には禁煙規則が發せられて、未丁年者は喫煙することは出來ぬことゝなつて居りますけれども、實際は、どれ程この規則が勵行されて居りますか、疑はしいのであります、昨年は禁酒法案が出まして、若も通過したならば、私は有難いと思つて居りましたが、之は殘念ながら通過しませなんだ、何うしても此二ツのものが行はれなければ、トテも眞實の教育は出來ないと思ひます、此二ツのことは現在の害ばかりでなく、永遠に害を殘すもので御座います故、子供が生れてから、教育を受ける間でなく、生れない前から

永遠に續くものですから、一朝一夕では、話も出來ませぬけれども、眞實の教育は、私はドウしても此處にあると思ひます。

私が教育に從事する樣になりまして、非常に喫煙の害を感じたことが御座いますに依て、社會改良に關係し　婦人新報と云ふ機關雜誌を發行しました、之は禁酒會です、斯う申しますと、獨逸風の人は信じませぬ、何うしてかと云へば、世の中が進歩して來ると、會などを組織しませぬでも世の進歩に連れて、教育が盛になつて來れば、人人が、酒や烟草の害のあることを知り、自ら其害を受けないやうに成つて來ると云ひますが、まだまた、左樣な場合には、中々參りませぬ、故に或は法律を以て、或は社會の約束を以て、世の人に此害を受けないやうに、爲さしめんければなりませぬ、と云ふ覺悟を有つて居るので御座います。

婚姻哲學（承前）

前田長太

（三）妙齡女子の婚姻に對する謬想

人生は書物のやうなものであると云ふ、人は毎日其中に一頁づゝ書いて往くのである、斯くして人生の第三期に至るとき、妙齡の女子の爲に一種不可思議なる書物が開かれるのである、此時女子は清淨無垢なる心の鼓動によりて、輕妙なる筆を揮ひ、如何にも耻しさうに己れの志望を書き述べるのである、其の志望即是れ結婚の事である、此時には萬感胸に浮び、心緒亂れて絲の如しと云ふのは少し過言かも知れぬが、兎に角今迄の兒戲をサラリと打忘れ、幼時の考なども全く消へ去り是より一種の觀念が胸に浮び、將來の生活と共に意中の人を想像するのである、乃で意馬心猿の走

る處種々樣々の忘念誤想が湧き出で丶、滿堂の蒼蠅掃へども去り難しと云ふやうな心事になるのである、人生亦妙なものではあるまいか。

就中第三期の終局に近く頃　命運轉開の好時機である故、此時ホームの觀念は非常に熱くなつて來る者である、故に人が結婚の話を持出しても妙齡の女子は別に驚く樣子も見えない、蓋し待と久しと云ふやうな顏色が歷々として讀れるのである、人によつては何ぜ今少し早く話を持出して呉れなかつたかと云ふやうな顏附をする者もある、然し外部の容子は姑く措き此時の心事を描き出して見れば、先づ將來と云ふものが半ば雲霧に遮られて、渺茫たる青海原の如くに思はれて居る、希望半分想像半分と云ふやうな譯で、イツ迄もお孃樣では居られぬ、娘子では居られぬ、早晩奧樣にならなければならぬ、早く髮を島田に結つて見たいものである、然しどんな配偶がよからう、彼にせんか、此にせんか、兎やせん、角やせん、心事も亦中々忩しい哉である。然しながら此時の心事が中々大切である、一生の幸不幸の岐る丶所全く此の一期に在るのである、若し良配好偶に遇はんか、關々たる雎鳩は河の洲に在り、窈窕たる淑女は君子の好逑と歌はれて、一生琴瑟善く調ひ和親して相樂むことが出來るのである、若又之に反して不相應配偶に遇はんか、一生忍ぶの歷史を綴らなければならぬ、さもなければ破鏡談となる、何れにしても餘り面白くはない、破鏡の後は謂はゞ『きずもの』である故、他に持往いても餘り賣口がない、あつても高價には買はれない、人間も亦面白いものではあるまいか。

結婚の事と云へば、西洋では直ぐに彼の舞踏室の事に喩へて話をする、彼の舞踏室には青春妙齡

の淑女が大勢寄集まつて誰か優さ男が來て私と一所に踏つて呉れゝば宜いと人待顔をして居る、所が男子は自然其中の佳麗なる者を撰拔して踏る故撰に上つた淑女は得意然と踏廻つて居るけれども憫む可きは彼の誰の腕をも買ふこと出來ぬ女性である、空しく停立して才子佳人の舞踏を羨望して居らなければならぬ、世間も亦一種の舞踏室である、青春妙齡の女子は皆好男子の來つて己と共に踏らんと否暮さんことを希望して居る、然し其希望者の中にはどうしても美醜の別がある故、それで或者は直に玉の輿に乘り、或者はいつまでも裏棚社會にくすぶつて居ると云ふやうな事になるのである。中には多分旻天に號泣して、何せ天は私を美麗にしてくれなかつたらうなどゝ怨む者もあるかも知れぬ、天の成せる美質は自ら棄て難しと云へば、其怨も尤も至極ではあるけれども、然し捨てる神あれば拾ふ神もある、醜婦とてそんなに失望するには及ばない、隨分と顔に似合はぬ位置に立つて居る者もある、天の攝理は亦妙なものである、一方に缺所があれば、他の一方に得點があると云ふやうにし、甲に棄てられても乙の氣に入ると云ふやうにして置く、乃で人各其嗜好ありと云はるゝのである。

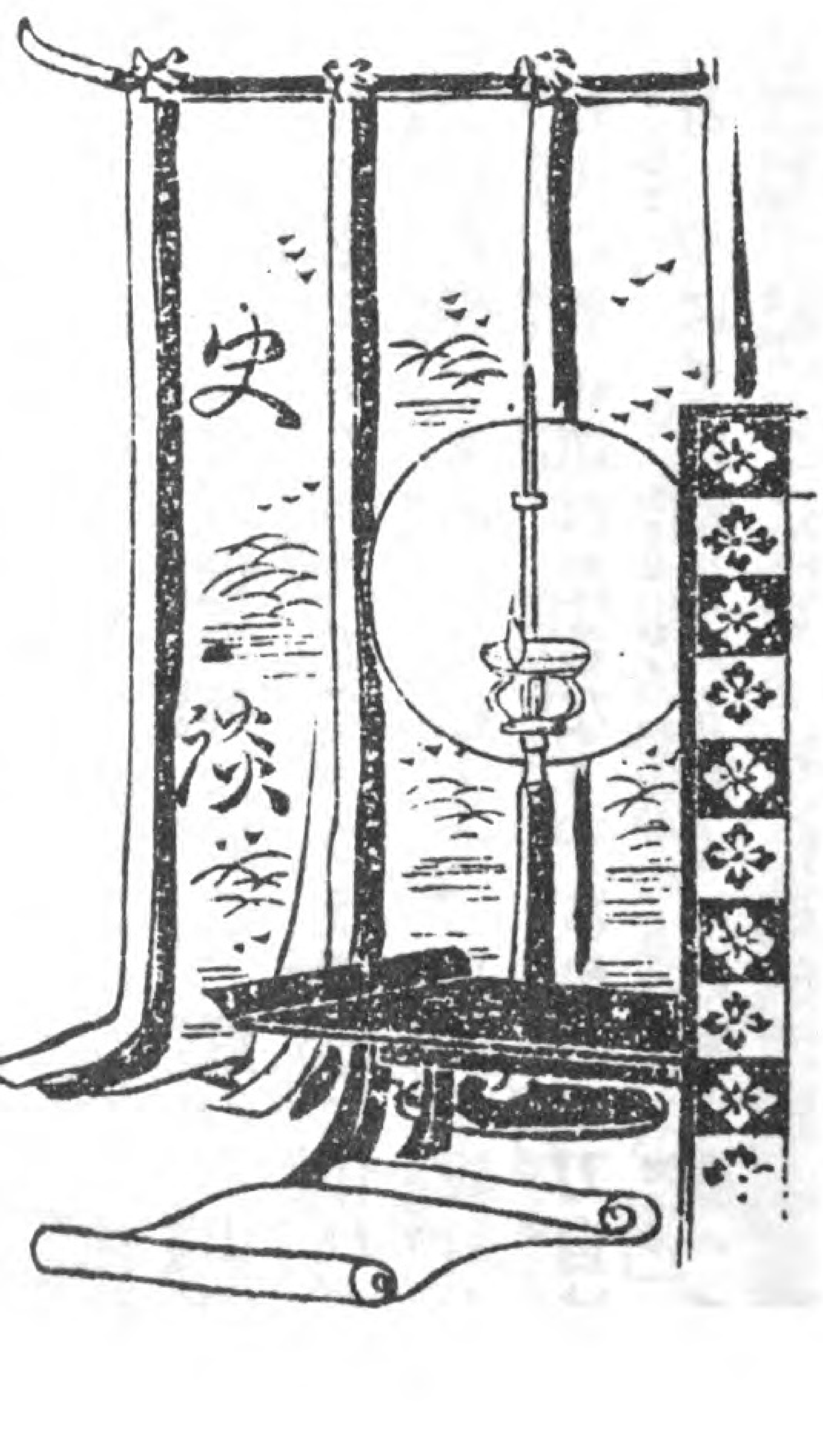
偖話が少し岐路に這入つたやうであるが、畢竟は結婚希望の女子は其の腦中に種々樣々の想像を畫くと云ふので、其の想像なるものは往々空漠にして捕雲捉煙の如き觀あるけれども、中には又頗る精確なる思想を起して、意中の人の何物たるやを能く辨へ、婚姻の性質、婚後の生活、夫婦の務義、家庭の和樂等に就き隨分と能く心得て居る、此は無論教育の結果と云はねばならぬ、故に教育が最も大切であると云ふのである、然し設令斯の

如き女子でも、其の意中の人に向つては、多少の想像と多少の感情を貢として献げて居る事は事實である、故に其中には妄念謬想の幾分かを必ず混じて居るに相違ない。

嗚呼是れ世の妙齢なる女子の結婚前に於ける心事であるが、愈結婚の時機に近き黄道吉日を撰んで、合卺の式を擧ぐる日になると、今迄の妄念謬想は一時にガラリと打摧けて、是より人生の實境眞相が顯はれるのである、其時世界は丸で打つて變る故、ア、左樣であつたかと初めて夢の醒めたやうな心地する女子が世間に必ず多からうと思ふ。

（未完）

雨霰れゆきやこほりとへたつれど
落れは同したにかはのみづ
（一休）



近藤裕子刀自の事の記す（承前）

文學士　吉丸一昌

刀自の生地は、越後の舊村松藩にて、若きときは大奥に勤めて、幼君の御養育を申上げたるが、其折の事とかよ、老女にいみじう權柄なるがありて、横暴至らざる處なかりしが、此老女いかなる性にかありけむ、蛙をいたく恐ぢ怖れて、一たび蛙を見ば、周章ふためきて、逃げ迷ふが常なりけ

り。刀自はこれを、笑止のことに思ひ、且はまた幼き主君のならはしにも惡しければ、いかにもしてこれを戒め懲さんものと思ひはかり居たるが、或夏の夕凉に、御庭の泉水の紅蓮白蓮咲きみだれたる中を、あちらこちらと、小舟に幼君を載せまつりて、逍遙したりけるが、刀自は此時こそと、懷紙に小蛙一匹を包みて、今しも舟が池の最中に出できと思ふ頃、件の懷紙を老女の前に擴げたれば、蛙は、よろめきながら、老女の膝の上に飛び上るを、あといふまゝ、仰向きさまに、舟諸共、ざんぶとばかり打ち仆れぬ、かくまでとは思ひかけざりしを、素破一大事と、刀自は、早速幼君をかきあげ、目高くさし上げたれど、其身は、泥深く水深くして、身の丈の達くべくもあらず、死なば死なむと、心の限り力の限りさし上げつる内に、人々來りて救ひ上げ、刀自も事なくて助けられけるが、自體このたびの事は、刀自が惡戯より起りたる事なればとて、一伍一什を言上し、謹みて罪に伏せんことを願出でたれば、宿引き下がりて謹愼せよと仰付けられたれど、急々早速の場合に於て、身命を棄てゝ、主君を庇ひたる段奇特なりといふ廉にて、御賞賜ありたりといふ

刀自が夫は、名を勝慶といひ、今は僧となりて高野山にあり、豪邁にして謹直の人なりといふ。そのむかし維新の當時、藩公に苦諫することありたれど、用ゐられざりしかば、されば世に住むも甲斐なし、いでや浮世の外に居て、鷲のみ山の眞如の月の影にあこがれて、一つは國難に仆れたる舊き友の菩提をも弔らはむとて、恩愛の覊絆を切りて紀山の奥に遁れたるなり。されば、刀自は、女の身一つにて、幼き人をはぐゝみ家を整へて、苦楚經營を極めたるは、とても筆紙に盡しかたき

事共なりけり。

義に勇むは、刀自の天性にしあれば、かゝる中にも、己を薄うして人に厚うし、人の窮厄を助けて、獨り自ら喜ぶ、今已に老境に入りて、齒悉く落ちつくせども、矍鑠として尙高木履を穿ちて法の爲、人の爲に奔走盡力して、殆んど寧日なし。心ある人よ、一たび往いて刀自を動坂の邸に訪へ而して望多き前途を以て、刀自の志を繼げ、刀自は實に知命の年を過ぐること五なり。（完）

お杉お松の傳（上）

堀内新泉

「何分にも女のことですから」、「女の身の悲しさには」、「私が男であつたならば」、「女の手一ツでは左様はまゐりません」、「ア、私は何故女に生れたやら」、「女ほど世に情ないものはない」先づ大略こんな言葉は、我等が屢〻女子の口より親しく聞く所でありますが、以上の――云はゞ愚痴の――述懷を仔細に吟味したならば、我が婦人社會の爲に、大いに可歎しいことではありますまいか。以上の言葉は取りも直さず。女子は男子に智慧も力も及ばない――だから何れの點に於いても、女子は勢ひ男子に屈從仕なければ成らぬ最一歩深く切込んで云へば、女子は男子に何事も服從すべきものだと云ふことを、若しや我から告白するのではありますまいか。

これは話がつい横丁に外れましたが、相州の鎌倉在に、お杉お松と云ふ姉妹の娘がありました。

この姉妹は、三田尻喜平と云ふ、極めて貧しい百性の娘でして、その家族は幾人あつたと申しま

すと、兩親の外に喜市と云ふ一人の兄がござゐました。

一家は何れも正直なものばかりで、家業にも疎畧無く努め勵むのでございましたが、人の運命ばかりは又別物だと見えまして、いろ〳〵の災難が引きつゞいた爲に、父なる喜平は五十六歳、母のお秋は五十歳、兄の喜市は二十五歳、姉のお杉は二十一歳で妹お松は十八歳の時に至るまでは、我が家の財産と云つては、僅に二三反の田畑と、雨にも風にも氣の揉める、古い草屋一軒張でございました。

然らばその後は、家に幸福の神が宿りまして、一家は繁昌するやうに成つたかと云ふに、決してそんな次第では無かつたのでございます。

父の喜平も已に人間定命の上を越え、母のお秋もはや五十、兄の喜市も農夫としては、最早嫁貰うても可い年配、姉のお杉も、妹お松も、已に人の妻に遣つても可い年頃に成りましたので、成らぬ中にも兩親は、今年あたりは先づ忰の喜市に嫁を取り、二人の娘をも形付けて、先づ一ト安心した上で、二人が息のつゞく限りは、忰夫婦に喜び勇んで手傳ひ爲やうと、その日生活の切ない中にも、たゞこればかりを樂みにして居りましたのに、人はこの世の結果ばかりで身の運命は定まらず、誰れの人にも佛家の謂はゆる宿業とか云ふものがありますものだと見えまして、現世におきましては、他に對しても善行を爲し、家業には又格別に骨を折るにも拘らず、最早子供の三人は三人まで育てあげた今日に及んで、喜平夫婦は、世にこの上も無い悲みに遭つたのでございました。

世にこの上も無い悲みと云ふのは、おそらく年老いて我が子に先立たれたのでございませう。無

惨や喜平夫婦の人は、この悲みに會ひました。それも一番大切な我が長子の――男子と云つてはこれ一人の、我が子喜市を亡つたのでございます。

初めは何んの、一寸風を引いたのだ、と自他倶に安心をして居つたのが、病ひは忽ちに重りまして、醫者もこれはと首を拈れば、わづかの間に勢ほひを失つた喜市自身も、最早我が身の世に在ることの、久しからぬを知つたものやら、ある日のことに我が二人の妹を、枕邊近く呼びまして、「私は最う此處三日とは、戀しいお前達と、一所には居られまいと、云ひ〳〵涙ぐんだ目で、チツト二人の顏を見れば、二人の妹は左右から取縋りて「兄さんそんな悲しいことを――」と、云ひも終らず泣き伏しました。

喜市は二人の妹を宥め勵まし、「イヤまさか死ぬやうなこともありはすまいが、もし――萬一、私の身にそんなことでもあつたらば、其は何うか兩親を、私に代つて大切に仕てあげてくれろ。宜いか。宜いか。二人、倶に善く分つたかい。私が願ひはこればかり、心がゝりも此ればかりだ。それからな、賴むは何うか二人とも、稼ぐは可い――人は元より稼かねば成らぬがの――稼ぐのも亦ほど〳〵にして、何うか二人とも兄さんを見たやうに、病みわづらひでもして父さんや母さんに、何うかこの上に怪我にも歎きを懸けないやうにしてくれろ。

これが果して、二人の妹には、悲しい、悲しい遺言に成りまして、喜市はその後二日目の夜半に息を引取つたと申します。

この思ひも寄らぬ浮世の嵐に、烈しく吹かれた一家の者の悲みは、殆んど其の極に達しまして、

史談

誰も彼も唯茫然として居りましたが、中にも年老いたる兩親は、歎きの爲め太く身体を痛めまして最早世に在る甲斐も無しと、毎日喜市の位牌に向つて、たゞ〱泣き悲んで居りましたが、近所の人々に兎や角と慰められて、姉のお杉に婿を取り一年おいて妹のお松に嫁入をさせまして一先づこの世の一團落を付けました。

さて、お杉が婿の東助と云ふのは、喜市と丁度同年で、心根が正直でもあり、また善く稼ぐその上に、何よりの仕合には、夫婦の交情も睦じく、兩親に對しても誠に厚く事へまするので、一家は常に善く治まつて、他人の入つたやうにも無いので、喜平夫婦はこの點に、先づ何よりの滿足を常に感じて居りました。

東助居ること三年にして、夫婦の間に東吉と云ふ、可愛い一人の男の子も設ければ、瘦地ながらも畑の一反も殖しましたので、老夫婦の喜びは一ト通りでありません。「こりや家には福の神が婿に來たぞと云つて、老の心にはくゝと喜び勇んで居りました。

この邊で、話は妹のお松が上に轉じますが、これは又同村内の、米原某の許に嫁入して後、舅姑に厚く事へて、夫と交情睦く氣を合せ、家業大事と稼ぎまするので、一家誠に善く和合して世の年月を送る中に、姉のお杉に二年おくれて、これも亦愛らしい一人の娘の子を設けました。

さるほどに喜平夫婦は、近頃始めて、悦びに悦びを重ねまして、南無阿彌陀佛に、孫かわいや、娘夫婦に野山のことを、手傳ひするのも亦肝腎なりと心がけ、この世を樂み、また來世にも疎略の無いやうにして、夫婦倶に善く人道を踏みながら心樂しく世をば送つて居りました。

けれども喜平夫婦の者は、これを佛家に謂はせたならば、よくよく前の世で惡い種でも蒔いて居つたものだと見えまして、その樂みも餘り長くはありませんでした。それは、何故かと申しまするど、この老いたる百姓は、我が可愛い初孫の三歳の秋に圖らず病ひの床に就き、娘夫婦が久しい間、毎夜帶も解かずに介抱したる甲斐も見せずに人は無常や烏鳴く、野邊一ト繼の烟と成つて仕舞ひました。

さて一家の不幸は、また一仕切これを初めに續きまして、喜平とこれまで伴れそつて來た哀れの老女は、まだ少くも四五年位はとの思ひの外、頓に夫を亡つた上に、身は又圖らず眼病に罹り、娘夫婦が十分に醫藥の手當をしてくれたのに、氣の毒や我もまた其の効を見せずして、終に盲に成りました。

一家の不幸は、いやが上にも續きまして、今度はまた主人の東助が、ある日のことに野良に出で鍬を兩手に持つたまゝ、無常の風にや當りけん、つい一日のことはおいて、わづか一時間の其の間も床には就かず、イヤ／＼恨みは未だそればかりでなく、お醫者に一度脈も取つてはいたゞかずに冷たい身體に成りました。

これを見て妻のお松は氣も顚倒、夢か、非ぬかと一時は殆んどこの悲みの事實なるかを疑がつて居りましたが、さてしも在る可きことならねばとて、我が家大切の稼人を、野外に送つて、泣々も夜半の烟と成しました。

さてこの世にも不幸勝なる婦人の妹お松はまた近頃息をも吐かせずに、雨の後には嵐、嵐の後には大地震と云つたやうに、惡しきことのみ頻りに重り襲ふ姉の身を、憐み案じて泣き悲み、日には

幾度も訪ひゆきて、兎や角と撫恤り慰めて居りましたが禍福吉凶定めなき世の中は、何うも是非無いものでして、「昨日は他の上、今日は我が身の上を知れ」と、古の人の戒めおかれし言を親しく今は我が身に事實として見ることに成りました。と、申すのは他でも無く、姉のお杉が百年の、まだその上も伴れ添はんと契りし夫の、果敢なやその年二十九にして墓の主人と成つた後、おなじ心に慕うて居つた我が夫も、年の壯いに頓着せぬいやな嵐に誘はれて、これも亦我が慾目から見た日には、殆んど頓死を見たやうに、病ふ日數の短くして、一本花に野邊團子、南無阿彌陀佛と緣ある人に、淚ながらに拜まれる、果敢ない身の上に成りまして、こゝに圖らず姉妹の若寡婦が出來ましたが、この後二人は如何にして、その一生を送りしか、その邊の消息は次號に揭げまする。

慈門尼（續き）

文學士　小林雨塔

今慈門の爲人を聞くに、其形は大きからねど、容姿美はしく、しかも事に當りては、決然として女丈夫の趣あり、義を見て喜び勇みしこと聖賢の類とも云ふべし、言語動作に表裏なく天眞爛熳の體を失なはねば、人の尼と見へし者一見して相識の如く親み昵みぬ、或る嚴冬素雪の日兄弟の乞丐に古き衣服を與ふとて

　わび人のあはれはよそによこさねど
　　おほ子にせまき袖はうらめし

と詠せし抔其慈仁に富る溫かき心情を察すべし、又一夜偸盗の庵室を窺ふものありしに、尼は快く食を與へ衣を給し夫の無慚の徒をして溫情に感せしめし事もありしとかや、尼が法の師なる一枝

禪師の病に臥すや、尼藥餌の勞に服し、枕頭に侍すること實に四年に及びぬ、なみ〳〵の者の能くする所ならず、師示寂の後は、其菩提を吊ひ師恩に酬ひんとて、西國三十三所の觀音を詣詣せり、其旅途の詠に八鬼山をこゆるとき、

法の師のためとおもへばわつき日に
身をやき山の坂もいとはし

とあり、舊恩に感ずる事の深きを知るべく、西行法師の舊跡苔の清水の下にては

のられしにあとを尋ねて今ぞしる
苔の清水のきよき心を

と打ち誦じぬ高士脫俗の跡を懷かしみたる程も想ひやらるゝなり、此の後尼歸國して里根の里に來り、人の舊居を借り住みけるが、其東北の隅に掌大の地を購ひ求め、草庵を結びぬ、時に寶曆五年なり。尼の歌に「余所めには住ともしらしなひき合竹の林の雪の下庵」とあるは此庵冬の實景なるべし。後十年を經、明和の比には尼の追々老い來りて日に讀書に耽けり和漢內外の諸典諸書何くれと、人の借し與ふまゝ又は特に借り求めて、童幼の持てる繪草紙様のものに至る迄獵り讀むこと幼兒の甘きを喜ぶが如かりしとぞ、尼又施與を好みて自からは多く取らず、又四季の風色を賞でゝ花紅葉、月雪とあくがるゝ事もあり、されど尼は徒手して日を消するを好まず、庵に在りては物縫ひ麻を索ひ、時には林に入りて落葉かき又野邊に出でゝ花を折り、朝暮の樂とする所は採賞行酌の業なりき、かくて尼の德聖遠近に達し、名を慕ひ歌を喜びて尋ね來る人ある毎に交遊して厭く事を知らず、歲月を經て益親みしと云ふ、尼の初め女論語、女孝經、內訓女誡列女傳など云ふ書を讀むにも善惡につけ已に引き較べて、堅き往跡を

慕ふと共に己れの如かざるを慨きしとかや、其自責反顧の念の强さを知るべく、善を見ては喜面に表はれ、惡を聞きては憤色に出るに至りしとなむ。

慈門尼の詠歌を嗜みし事は前に屡々云へり、固より定まりし教を受けし師とてもなき身の只古歌を道の栞と憑みて、自から分け進み、其天賦の詩才發達して優に歴代の歌人をも凌ぐに足る名什を出すに至りぬ、其最も面白きものを摘まめば、

山家花

花さけば心もうつりかはりけり
　みせはやとのみ人のまたれて

溫情玉の如し。

時鳥幽

おもひねの夢かうつゝか時鳥
　ほのかにもらす夜半の一こゑ

上の三句措辭の妙を見るべし。

曉虫

よわり行涙くらへむきり〴〵す
　夜さむにたへぬ老のねさめに

尼老後の詠にや、孤吟石の如く冷やかなる中に枯槁の老軀を横ふ尼と晩秋殘喘を保つあはれのきり〴〵すと兩々對し來りて詩想の美を見るにあらずや。

萩風

よもすから吹おとろかせ萩の風
　うき世の夢のさめぬまくらに

警拔と評すべし。

わかすみる今宵もなかの月の夜を
　たれにねよとの鐘ひゞくらん

思想幽玄、四隣閴寂として天心に澄める明月にわたり行く二三杵の梵鐘を聞くの想あり。

海上月

吹はらふ嵐に余謝のうらはれて
　月すみわたるあまのはしだて

清光圓かに輝らす余謝海上の夜景大佳境なり。

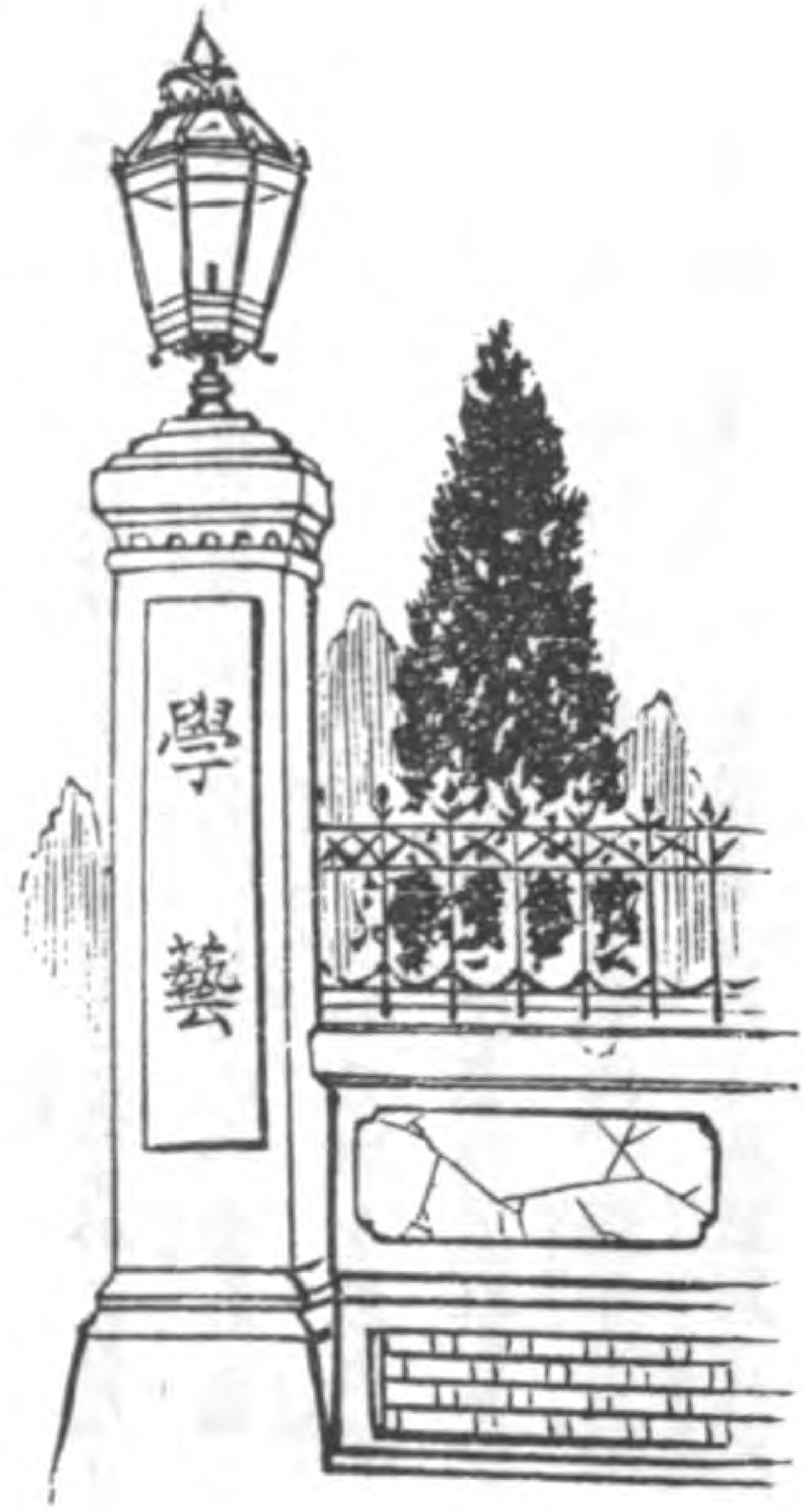
富士山の繪に題して

かけうつす富士を藻鹽にくみそへて
　おもけにみゆる田子のうらびと

情味掬すべし、以上は名什の二三に止まれども尼が詩才の凡ならぬを徴するに足るべし、想飽迄清新と云ふにはあらねども、其調と想と共に一種の清味を帶びて人に快感を與ふること少なからず、尼の歌集とては今松風集と名けしもの一冊あり、初めさる人尼がり行き其の年月詠める歌を取り集め見せ玉へ、世にひろめむと懇に云ひ入れしかば、尼否みあへず詠歌を集め送りしに、幾年を經れども遂に世に出でず、尼世を去れる後武居正武の子久豫、先の人に尋ねし歌集の有無さへ知れずなりぬとかや、實はさる陋劣の輩尼が詠歌を已が歌に交へて自からの歌集とし隱し持てりと云ふ、憐むに堪へたり、此にて尼の歌も空しく散逸せんとせしを尼の友なる海量法師おのれが見及び聞き及べるもののみを錄して板にせしもの即ち松風集なり、尼の集の全からぬは惜みても余りあり、

慈門尼の一生は誠に清らかなりき、寸毫の瑕瑾もなし、されど甫めて十八歲妙齡花の如かりし姿を圓頂黑衣の容に變へしとき、心ある人いかにあはれに感したりけむ、其の生涯は恰かも梨の花の如し、清けれども寐しく、寂しけれども清らかなり一枝春の雨を帶びし窈窕の體も一時はありたり、しかも靜かに音なくて幽かに散り行くは、其運命あり、尼は安永四年のふみ月十日を以て示寂せり、年七十六。

（をはり）



國文學講義

紫式部日記講義（四十二）

井上頼文

みかどづかさなどやうのものにやあらん、おろそかにさうぞき、けさうしつゝ、おどろのかんざし、おほやけ〳〵しきさまして、しんでんの、ひんがしのわたどの戸ぐちまで、ひまもなく、おしこみてゐたれば、人も、えとほりかよはず。

おものまゐりはてゝ、女房、みすのもとにいでゐたり。

ほかげに、きら〳〵と、見えわたる中にも、おほしきぶのおもとの、裳、からぎぬ、をしほ山の、こ松はらをぬひたるさま、いとをかし。

おほしきぶは、みちのくのかみのめ、とののせんじよ。

講義

○みかどづかさ　闈司なり。闈は、字書に宮中の門なりとあるごとく、宮門の開閉の時、御かぎの出し入れをつかさどる女官の称なり。後

宮職員令に、闡司、尚闡一人、掌ニ宮閤管鑰ヲ（謂宮城以内ノ諸門ノ管鑰、即京城門ノ鑰ヲ亦同ジ也）及出納ノ（謂出シ納ル、ヲ諸門ノ管鑰ヲ其從リ閤門ニ出入スル雜物者、門司勘撿也）之事ヲ典闡四人掌ル「同ジ尚闡ニ」女孺十人と見ゆ○おろそかに　粗末にの意あり。前の女房たちの甚だ、美々しき装束をつけ、今日を晴と、けさうしたるにくらべては、闡司などの女房どもの衣服の粗略あるをいへり○さうぞき　装束をきることなり。さうぞきは、もと、装束の字音を、はたらかせるにて、さうぞかん、さうぞき、さうぞく、さうぞけ、など轉用せり○けさう　化粧あり○おどろのかんざし　おどろは草木のなどの入りみだれて、繁りあへるさまをいへば、そのかたちしたる簪なるべし○おほやけ〳〵しき　公然の儀式めきたるをいふ

○しんでん　表座敷なり○ひんがしのわたどの　東の方の廊下なり○人も、えとほりかよはず　人も通り得ずとの意○おものまゐりはて、　中宮に御膳を奉り終りての意○いでゐたり　御簾のもとに出で、居たりとなり○ほかげに　火の影になり○きら〳〵　ウツクしく、ピカ〳〵と、ひかり輝くさまなり○見えわたる中にも　多く見えたる女房たちの中にもの意○おほしきぶ　大式部は女房のめし名○おもと　御許は、人をしたしみていふ敬語○裳　唐衣の上のうしろの方に着て、腰より下部をおほふもの○からぎぬ　晴の時、表着の上に着るもの○をしは小の、こ松ばら　小鹽山は山城の國乙訓郡大原野村にある山にて、名所なり。古今集におほはらやをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ、など見えた

り。さて、この小鹽山なる小松原の景色を縫ひたるなり〇みちのくにのかみのめ　陸奥の守の妻なり。みちのくには、むつのくにの轉訛なり。さて陸奥守の居住地は、國府にして、今の縣廳のごときものなり。王朝時代には、國毎に、國府を置かれ國司をして、地方の政事を行はしめられき。陸奥の國府の址は、今の陸前の國、宮城郡多賀城村、大字、市川にあり、また最初の地は、同國名取郡岩沼町附近にありたりともいへり〇とのゝせんじよ　殿は道長公宣旨は職名、道長公の命をつたへて御やしきの諸事を取りあつかふ職なり。宣旨は、もと、後宮女官の上﨟中の一人を宣旨とよべるが、うつりて臣下の家につかふる女の職名にもなれるなり。よは、なりといはんがごとく、たしかめたることばあり

譯解

また、御まへのおんありさまを拜見せんと、闕司の女官などやうの者にやあらん、粗略ある裝束を着て、ザット化粧しつゝ、ツマラヌ楚の簪をさして、おもてむきの儀式めかして、寢殿の東の方の廊下の戶口まで、すきまもなく、押し込み居たれば、通行の道もふさがりて、用事のある人も通ることかなはず。

さて御膳も奉り終へて、彼のリッパに裝束せる女房たちは、御簾のもとにならびて出で居たりその居ならびたる女房たちの、うつくしき姿のかゞり火の影に、きら〳〵と、ひかりかゞやきて見えたるなかにも大式部の御許の着たる裳、唐衣に、大原なる小鹽の山の小松原の景色を縫ひ取りたるさま最も美しくおもしろし

この、大式部といふ女房は、陸奧の守の妻にて

道長公の宣旨の役をつとむる女房なり。

通俗土佐日記（第二）

廣島商業學校教諭　兒玉彌三郎

廿一日、和泉國まで平安にと願ひ立つ、

○舟は浪速まで着すべき筈なるを和泉國までとあるは、和泉は内海に入る口なればなり。内海に入るまでは、太平洋は更なり土佐阿波の境大洋に突出せる處及び鳴門の邊を通過するなど、甚だ困難なるが上に下文に國より始めて海賊報いせんといふなることを思ふ上に云々又和泉國に來ぬれは海賊物ならずなどあるに思ひ合せて海路の險難と海賊の襲擊とを恐れたるが爲めなり。然して又下文に和泉の灘にて暴風に遭ひたることゝ對照せしめたるなり。

○此の段、紀氏の如き丈夫にて斯く海路、海賊などを恐るべき筈なし、是れ初めより女の所爲と爲したる趣意を貫徹せしめんが爲めに態と斯く女々しく書きたるなり。

藤原言實、船路なれど馬の餞す、上中下醉ひ過ぎて、いと怪しく潮海の邊りにて戯れ合へり。

○藤原言實は　守に屬せる小吏なるべし。

○船路なれど云々　馬の鼻向けすとは元來陸上送別の時手を分つ由のことなるが故に、上に船路なれど、斷はりて戯れに書きたるなり。此の日記中斯く戯れたる所多し、是は此の日記一つには土佐の任の不平と、一つには當時一般に官の擧用に依怙ありて人才を空しくするの孤憤とを、暗々裏にほのめかしたるも、徹頭徹尾謹嚴なる書き方にては、おのづから其れと注目せ

らる丶恐れあるを以て、態と滑稽を挿みたるにて、戯るゝは記者の本意にあらずと知るべし、上とは紀氏の一族、中とは郎從侍女、下とは奴僕をいふなり。

○醉ひ過ぎて　とは言貫が持ち來れる餞けの酒肴などに十二分の醉を盡せるなり。

○いと怪しく　は下の戯れ合へりに冠らせたる副詞にしていかで斯くも戯れ合ふかと思へど思へど思ひ得られぬまでにといふ程の意を見せたるにて、全く言貫の芳志に一同歡を盡せる狀を言ひ表せるなり。

○潮海の邊りにて　總て海の物には潮風潮舟などゝいひ習へりと本居翁の說なり、是れも其の類なるべし、斯かる處にては戯れ合ふべきものならぬに、其れにも拘はらで人々の戯れ合へるは、偏へに醉の酣はなりしを知らしめんが爲めなり。

○戯れ合へり　とはされ、しやれなりといふ言葉にあの字を冠らせたるにて醉に乘じて歌ひ舞ひなどし、種々戯れ合へるをいふなり。

○此の段、言貫の志を喜べるを記すると同時に、任中の善政を思はせたるなり、不平の任國に在りながら、德化深く人々を悅服せしむるまでに善政を致せること、紀氏の衷心大に觀るべし。

廿三日、山康敎といふ人あり、此の人、國に必ずしも言ひ使ふものにあらざりき、是れぞ湛はしき樣にて馬の餞けしたる、守からにやあらん、國人の心の常として、今はとて見えずなるを、心あるものは耻ぢずぞなん來ける是れは物に依りて譽むるにしもあらず。

○といふ人あり　とは平素は疎遠なりしが故なり、總て何事にても、其の物を目立たせんとする時にといふ云々と取り出でゝいふ詞なり。

○此の人國に必ずしも云々　國とは國務のことなり。必ずしもとは其の國務に除くべからざる人にはあらずといふなり、いひ使ふとは國務に關し指揮命令して使ふことなり。

○是れぞ　とは其の國務にも言ひ使はざりし程、平素親交あらざりしものゝ、斯く懇ろに送り來れるとの殊勝なるを取り出でゝ示せるなり。

○崇はしき云々　此の節、或は違はしきとして思ふに違へるをいへるあり、或は正しきとして康教が禮儀を盡せることゝなせるあり、或はあわたゞしきやうにてとありしをあわの二字を脱せるにやと疑へるもあれど、今は本文の如く崇はしき樣といへるを採れり、其の意は康教が情を盡し禮を厚くして送り來たる樣は、若し之れに對して惡しく取扱はゞ崇りなどもやせんと思はるゝ程の樣と例の戯れ書きせるにやあらん、されど尙は是れにても飽き足らぬ心地せらるれど、暫く疑ひのまゝを記し置きぬ、

○守からにやあらん　とは國守なりしからに餘處に見過ぐし難しとの心にて然かするにやあらんとの心を思はせたるなり、是れ暗に其の德の然らしめしをもほのめかせるなり、

○國人の常として　とは廣く諸國の人を指すなり、單に此の土佐の國人とのみは見るべからず、是は都會の人と比較していふにて國人即ち田舍人は質朴にて心厚き習ひなるを以て心の常としてといへるなり、然して田舍人なる康教を思はせたるなり、

○見えずなるを　とは今別れ去るをいふな

り、此の節と下の心あるものはとの間に「薄情者は眼前に在る時は心厚き樣に振舞へど別れに臨みては本來の薄情を表はす類ひ世には多き習ひあるに」との意を含ませたりと見るべし、滔滔たる天下の輕薄者流其の肺肝を剔らるゝ心地すべし、

○物に依り云々　　とは康秀が贈りたる物の格別好かりしが嬉しさに譽むるにはあらずと斷はりたるなり、物の多少輕重を情の厚薄のしるしとすることと一般の人情なり、故に其の人情の通弊に陷りて誤解する勿れといふ心にて、輕薄なる世情を擬きて斯く書きたるなりと、いかにも己れ自らも其の卑しき心を持てる普通人に伍せるが如く書きたる筆力味ふべし、

○此の一段、頗る紀氏の性行を窺ふに足るべきものなれば特に附言せん、抑も此の康秀は國務に與からぬ國人なれば、平素親しくもせざりしに、斯く懇ろに餞送して贈り物をも厚くせしこと都人士の事繁きが爲めに自ら薄情に流るゝに反し、斯かる田舍人は質朴純厚にして平素の疎遠なりしことなどをば思はず、切に別れを惜みて斯く懇ろに餞送せるは、守の德の故にてもあるべけれど、其の德を思ふ程ならば平素ゝ來るべき筈なるに、平素は來ずして今に至りて來れるは、別れを惜むの情切なることと明らかなれば、其の心底の嬉しさは平素來れるものゝ今も來れるが如き比にあらず、然れども之れを明白に言はゞ、平素來りしものゝ餞送せるを輕く受くるが如くなるを以て、只漠然と國人の質朴にして輕薄ならざるを喜びたるまでの如く書きたるなり、且つ此の段も亦紀氏の善政ありしことを知らませたるは勿論なり、物に依りて褒むるに

しもあらずと書せるは専ら世の輕薄の人情を疎めるにて、一見己れが此の康教を痛く擧むるを物の好かりしに依りてかと人々の思ふべきを斷はりたるらしく思はせたるなり、是は上にも言へる如く、普通に人の志は贈る物の輕重にて厚薄を判するまでに、澆季輕薄なれば世人が各其の卑しき心を以て忖度し、是れをも然か思ふならんと歎きたるなり、但し是は此の一事のみの歎きにもあらじ、大凡諂ふものをば厚しとし諂はざるものをば薄しとして、さもなき人まで官位を得、惜むべき人の沈淪せるも多かりければ、是等を深く歎きたるなるべし、此の記全體を通觀するに、紀氏の天性官に諂はざりしこと明らかなり、今試みに紀氏を以て貞觀の紀夏井に比せんか、彼れは國人の贈物を悉く受けず、歸京の後贈れるものも只紙と筆とのみを留めて其の他は悉く返せしに、此れは斯く人人の贈れる物を一つも返さゞりしは、彼れに比して不廉なるが如し、固より受けざるは潔く受くるは潔からぬことなれど、所詮不受は一己を主とする人なり、求むる所ありて贈る賄賂の如きこそ受くべからざれ、其の恩澤を喜ぶ餘り如何にもして其の恩に報いんと、身の程々に心を盡して贈る物を、己れを潔くせんが爲めに其の志を空しくするは忍ぶべからざることならずや、廉者必ずしも其の終りを全うし得ざりしこと古今其の例に乏しからず、故に深く其の心事を究めずして、彼れを以て此れに比しなば必ず此れを卑しむ人もあらんか、されど今兩者の生涯を檢するに、果せるかな此れは彼れよりも其の終りを全うせしこと、是れを以ても是れ等の贈物を受けたる心事を察すべし、總て己れを

潔くする人は必ず人を思はぬ弊あり、己れを瀆しても人を揚げんとするの大度は又格別のものなり、世に誰か貴からんことを欲せざる人あらん、受けざるは貴く受くるは卑しきは言ふも更なれど、己れのみ貴くば人皆卑しかるべし、所詮我が國の美風の秀でたるは今玆に言ひ盡し難し、兎に角に貫之は我が國の特質を具へし人、夏井は漢土の特性に長じたりし人なることは此の受不受にて明らかなり。

廿四日、講師、馬の餞けしに出でませり、在りと在る上下童まで醉ひしれて、一文字をだに知らぬもの等が、足は十文字に蹈みてぞ遊ぶ、

○講師　とは諸國の國分寺に任ぜられて一國を教導するを以て務めとするものなり、法師は殊に女などの尊敬するものなるが故に、出でませりと敬語を用ゐたるなり、

○上下童まで云々　の上下は前に同じく只中を省けるのみ、前には童は言はで此處に童を出せるは、一文字をだに知らぬもの等がといふに照應させん爲めなり、

○醉ひしれてとは、醉ひて正體なきまでに爲りたるをいふ、しれては萬葉集などに愚人とあるが如く、本心愚なるにはあらねど醉ひ極まりて愼める心を忘れたる樣をいふなり、斯くしれてといひて下文しらぬに對映せる詞の遣ひ樣味あり、

○一文字をだに云々　所謂一文不通の意なり、從者の中最も下賤の者及び童等をいへるなるべし、此の句は下の足は十文字に云々を言はんが爲めに置きたるにて、下の語は主なり此の語は客なり、

○足は十文字に云々　所謂千鳥足なり、白氏文集に、「輕衫細馬春ノ年少「十字ノ津頭ニ一字ニ行ク」とあるを思ひ合はせたるかと契沖はいひ、御杖は然らずと辨じたれど孰れにてもありぬべし、

○此の段、講師の懇ろなるを喜びたる如く書きたれど、元來講師は、日本後紀中、僧綱の奏上せる詞の如く、公事に於てこそ國司にも交はるべけれ、斯く私に酒など贈れるは俗に媚ぶる所業なれば、紀氏は之れを快とせざりしを主として、書きたるならん、愚昧の從者輩は斯かる理をも辨へずして大に喜ぶを見て、其の喜ぶ様を寫すを主としたるらしく見せたるは、固と朝廷より任じたる講師なれば之れを露骨に言ひ表はさんは畏れあることとなるを以て、斯く戯れ言に書き去りたる詞遣ひ妙といふべし、前日の山康教は殊に情の厚さを喜び、此の講師のは喜ばしからぬ由を相對照せるなり、康教は俗人にして國事に與らぬ程の人なり、此の講師は出世間の身にして、然かも朝命を拜し一國の民を敎ふべき人なるに、其の胸中は雲泥の差ありと知るべし、

廿五日、守の館より呼びに文持て來たり、呼ばれて、往きて、日一日、夜一夜、兎角、遊ぶ様にて明けにけり、

○守の館より呼びに云々　守は新國守あり、廿二日乘船してより、毎日餞送の人絶えざりしが故にか將た海の荒れし故にか、今日までも尙は舟出もせざりしかば、舟中の徒然を推し量りて新國守の館へ招きたるにて、其の徒然を慰めんとの志あるべし、呼びにといふ詞は彼方より訪ひ來るに反したる詞にて、彼れは當任此れは解任の差はあれど、呼びたるは稍禮を缺き

しことなるべし、但し、強ち呼ぶは不可なりといふにはあらねど、普通ならば先方より心を發して來ん樣に言ひ越すべき所なり、然るを今斯かる招き方に接しては同等の身分として快からず思ひしならん、

○呼ばれて往きて　とは此の招きをば辭したく思ひしもさありては己れの心は其れにて滿足もせん守が折角當方の徒然を慰めんとの好意を無にするに當るを以て枉げて往きたるなり、

○日一日夜一夜は　終日終夜なり、守の饗應の懇ろなりしことは明らかなり、

○兎角　とは其の席上にて有りし事どもを束ねていふなり

○遊ぶ樣にて　とは實に遊ぶにあらざるが故に樣にてといふなり。前日、かの一文字をだに知らぬもの等の處には、判然遊ぶとあるに照らして思ふべしされど表面には「物語りなどもしつゝ殊更に遊ぶにはあらねど何となく遊ぶ樣にて」と聞ゆる樣に書きたる筆力の妙は紙背に徹せり、

○明けにけり　とは昨日守の館へ往きしより、意外に心にもあらぬ長居して、終に夜明くるに及びたりといふなり、上に言へる如く守の志を空しくせじと眞のお務めに往きたるなれば、打ち解けぬ席なりしこと明らかなり、



愛は清潔ならざれば決して深からず。（シルレル）

寡言は婦人の美飾なり。（古諺）



家庭

慈母と愛兒（つゞき）

●生兒の變體

山形縣女子師範學校長　津田元德

●●●双生兒――俗に二た兒と稱するものにて、其類例決して少なからず、倘三つ兒以上も產する事ありといふ、此等は、卵の成熟に關する生理的原因より生ずるにより、吾人の注意如何にては左右すべからざるが如し。

●●胎齒――武藏坊辨慶は、生時談話し、這ひありき、齒生じたりといへども確かならず、されど稀には、生時既に齒を有するものなきにあらず。我反正天皇は、御降誕の際、骨の如き齒三本生へ給ひし故、瑞齒別皇子と稱し奉るとか傳へける如く、概ね左の二種の齒を生ずるが如し、此を胎齒と稱す。

（甲）一個若くは二箇の尖鋭なる齒、下顎の內門齒とあり、弛緩し移動し易く固着せざる類、

（乙）甲に反して、固着動かず、色黄にして粗造の面を呈する類、蓋し琺瑯質を完備せざるにより出生後生ずるものとは大に區別し易し、

古昔或は是等の胎齒あるを鬼子と稱し、其親を喰ひ殺すとか、或は非凡の徵候なりなど言ひ傳ふ

る、何れも信ずべからず、生後拔け去るべければ心痛するに及ばず、但し齒科醫の診察を請ふべし。

●乳腺――本題以下揭ぐるものは變態と稱すべからざれども、普通に注意せざる事多ければ茲に揭ぐる事となしぬ。

通常生後第四日に至つて男女の別なく、乳汁の分泌を始め、同時に乳線に少しく腫脹を發し、第九日にして、分泌及腫脹其極に達し、其より漸く減退し第二週に至りて止むを常とす、されば此等の症狀に驚くべからざるなり。

●變色――生後二三日にして、胎便と乳便との交代期に當り、恰も黃疸病にかゝりし如く全身黃色を呈する事あり、蓋し肝臟の作用なるべければ、平常に比すれば少しく熱き浴を取らしめば回復すべし、但し風を引かしめず、熱を生ぜしめざる注意必要なり。

●毛髮――或は薄くして禿げたる如きあり、あるは濃くして長く且密なるあり、何れも生長に從ひ充分に發達すべければ、心痛するに及ばざるべし、我清寧天皇は、生れ給ひて御髮白く長かりければ、白髮の皇子と申し奉りきと見ゆ。

●兒斑――臀部、腰部、背部等の皮膚に、定則なく藍色の斑點を有する事をいふ、胎生後第四ヶ月以降は此斑點を認むるを得、六七歲前後に至つて漸く消滅す。

此斑點につきて元、或は懷妊中の不謹愼に基くと稱し、或は兒童の强弱に關すと唱ふるものあれども、偶々斑點なきが如きものも、詳細に左右の臀部等を開き見ば多少を存せざるものなく、又生兒の强弱等には關係なきものゝ如し。又此斑點を有するは本邦人と「ジャワ」島人とのみなりと稱するものあれども、近來の硏究によれば、何れの國

民も、多少此斑點を有するが如し。故に其原因は未だ明了ならざるに似たり。（未完）

冬の衛生

中外醫事新報 治療新報記者　尼子四郎

冬の衛生に就て述ぶべきこと尠なからざれども、一々之れを述ぶるときは冗長に流れ讀者諸君の厭嫌を招くの虞れあるが故に、冬季に多き疾病にして而かも衛生上必要のものを撰び、その原因、症候、療法及び豫防法を説明し以て諸君の參考に供せんとす。

秋より冬の間は空氣寒冷にして且つ粗烈なるが故に喉頭、氣管、氣管支等の加答兒殊に多し、この加答兒には急性のものと慢性のものとの二種ありて、甲種のものは小兒に多く、乙種のものは中年者幷に老年者に多くして温暖の候といへども全くその跡を絶つものにあらず。

されどもこの中氣候に大なる關係を有するものは急性の加答兒にしてその多數は氣候の影響を受けて發するものなれば茲には只急性の加答兒のみを説明し、慢性の加答兒は略して述べざるべし。

●喉頭加答兒　呼吸器の中にて最も加答兒に罹り易き部分は喉頭にして、この部の加答兒に罹るときは聲斷嗄れ、その咳嗽は粗烈にして斷嗄れたる音を帶び、喀痰は初め缺如するも後には粘液膿狀のもの喀出せらる、されどもその量は少なきを常とす、喉頭部には抓くが如く、燒ゆるが如く或は乾くが如き感覺あり、而して若し久時談話するか又は高聲を發するときは此部に疼痛を起すものなり。

この疾病は寒冷にして粗烈の空氣を吸入するに

由て起ること最も多けれども、煙草の烟及塵埃の吸入等種々の原因に由りて起り、又甚しく聲を使ふが爲めに起ることあり、されば喉頭加答兒の養生法は此等の有害物を避くるにありて、成るべく外氣に觸れざる樣にし、若し止むを得ず外出するときは必ず呼吸器を用ひ、喫煙、亞爾個保兒分を含む飮料、刺戟性の食物を廢し、且つ成るべく談話を愼み、塵埃を避け、兼ねて熱き飮料、牛乳、「セルテル」水に牛乳を加へたるもの、枸櫞水、砂糖水等の温めたるものを多量に飮むべし、而して頸部には單純の温湯又は薄荷水に浸したる「リント」(二つ折り至乃四つ折りとし)を卷き、その上を亞麻仁油紙(「リント」より幅を廣くし)にて被ひ、更らにその上に繃帶を卷きてこの部を暖むべし、若しこの際「リント」を浸すに熱き「ブランデー」、熱き酒又は芥子湯を用ゆるときはその効一層確實なり、この温濕繃帶は日に二回乃至三回交換ゆべく、夜間睡眠中と雖も取り除けず、加答兒の治癒するまで持續して施すべし(間々喉頭に異常なきに防寒と稱して種々の襟卷をなすものあれども衞生上甚だ惡しき習慣なり)又身體を暖め發汗を促すこと、必要にして殊に加答兒の初期に熱き湯に入りて身體を暖むるときは加答兒を防遏し得ること往々之れあり、而して浴後は必ず冷水に浸したる手巾を以て身體を摩擦し、摩擦終れは能く乾きたる衣服を着用し、外氣に觸れさる樣心掛くべし。

西洋に於ては斯の如き場合には先づ足浴を行ふを常とす、その簡便の法は「ビール」瓶二個に熱湯を容れ、「コルク」を以て密閉し、その上を熱湯に浸して少しく絞りたる抹布に包み、更らにその上を毛織物の片にて卷き、然る後ち之れを一の匣内

に納めて素足をその中に挿入し、蒲團を以て脚部と共に之れを被ひ以て足部を暖むるにあり、或は之れに換ゆるに湯婆を用ひ又は初め乾きたる抹布に包み、更らにその上を毛織物の片にて巻きたる處の熱烙鏝若くは熱煉瓦を用ひて足部を暖むるものあり、此等の足浴を行ふ時間は十五分間乃至三十分間にして、兩三日間反復施行し、浴を終る毎に必ず冷水を以て足部を洗ひ、乾きたる手巾を以て水分を拭去し、然る後は靜かに床中に臥せしむるか或は運動せしむるなり。

この法に比してその効力の一層確實なるは足部蒸氣浴にして、之れを行ふには頭部を濕布にて巻き、脚部を露出して高き椅子に倚り、大なる毛布を以て身體を被ひ、熱湯を充したる提桶の上に棒を横へ、之れをそのまゝ脚下に寄せ、脚をその横木に載せ、蒲團を以て脚部と共に提桶を被ひ以て足部を暖むなり、されどもその湯は凡そ十分間を經れば熱氣減少して最早蒸氣を發生せざるに至るが故に時々紅熾せる烙鏝、石、瓦、火箸等を入れて更らに之れを熱せざるべからず（この際熱湯の溢出して足部の火傷せざる樣注意すべし）、或は熱湯に代ゆるに初めより蒸氣を以てし、革管を用ひて鐵瓶又は釜等より之れを大なる桶内に導くも亦可なり、この蒸氣浴を行ふ時間は通常十五分間乃至二十五分間にして輕症には一日一回若くは二日間に一回施行すれば十分なり、浴後は又必ず冷水を以て脚部及び足部を洗ひ乾きたる手巾を以て水分を拭き去ること既に述べたるが如し、而してこの際若し全身にも發汗するときは冷水に浸したる手巾を以て胸部幷に脊部を強く摩擦し、若しくは冷水を全身に灌漑するなり、されども蒸氣浴は必ず行はざるべからざるものにあらず、故に之れを

嫌ふ人は行はずして可なり。

●●●●●氣管支加答兒　前に述べたる如く加答兒は喉頭を侵すこと最も多しといへども常に該部にのみ限局らずして往々氣管乃至氣管支の方に蔓延し、或は却て加答兒の喉頭を侵さずして初めより氣管氣管支等を侵すことあり、若し此等の部分加答兒に侵され而かもその加答兒の劇症なるときは、屢々頸部又は胸骨下に疼痛を發し、その疼痛は恰も傷きたるが如きものにして、咳嗽すればその度を増し、加答兒の更らに一層劇しきときは疼痛は此等の部分に止まらずして胸の全部に發すといへども概してその度は甚だ強きものにあらず、而してこの疼痛は咳嗽の爲めに發する胸部の筋肉の疼痛にして氣管支より起るものにあらざるなり、又咳嗽に由て喀出せらるゝ喀痰の量は多きことあり或は少なくしてその質頗る粘稠のことあり、若し喀痰の量少なくしてその質頗る粘稠なるときは咳嗽は所謂乾咳にして頗る煩はしく、而かも加答兒の初期には通常此種の咳嗽を發するものなり、されども加答兒の進むに從ひて喀痰多量となりその質粘液膿狀に變じ、咳嗽も濕潤して大に容易となる、時としては喀痰中に血液を混することあれどもこの咳嗽の劇しき時に見るものにして、彼の肺結核患者等の喀出する血痰とはその趣きを異にするものなり。

若し加答兒の更らに蔓延して一層小さき氣管支に達するときは(この症は小兒並に老人に多し)呼吸大に困難となり屢々中等度の熱を發し(殊に夕刻に)、小兒に於てはその熱度高くして攝氏寒暖計の三十九度以上に昇ること往々之れあり、されども加答兒の輕きときは全く熱を發せざること亦之れあり。

上に述へたる加答兒はその性質善きものなれども、時としてはその性質甚だ悪しきものありて、その加答兒は氣管若しくは大なる氣管支に止まりて細小の氣管支に達せざるにも拘はらず、劇しき咳嗽を發し、熱度稍高くして、屡々強劇の頭痛を發し、食慾全く缺乏し、身體甚しく衰弱することあり、この種の加答兒は年によりて流行するものにして常に存在するものにあらざるが故に別に原因の存するありてその爲めに發するものと認めざるべからず、その原因は、一種の黴菌にして頗る迅速に蕃殖傳搬し吸氣によりて呼吸器の粘膜に到り、この部に生息して一種の毒物を作り、その毒物の血中に吸收せられて全身に循環し以て斯の如き症狀を惹き起すものなり、間々本病は氣象の關係によりて起るものありと稱ふるものあれども、氣象不良にして空氣寒冷粗烈を極むる時に起らずして却て氣象の温和なる時に起ると等の事實あるが故に氣象に關係あることは明なり、されどもその黴菌は果して如何なる形狀幷に性質を有するものなるか茲には確乎説明する能はざるを憾とす。

（未完）

挿花の話（承前）

小畑いく子

本花各論

秋草（つゞき）

菊は實に花の中の花たるものでありまして、草花中これに優るものはありませぬ、詩歌文章などにも口を極めて賞賛してあるから今更申までもありませぬ、又其種類も多く隨て培養方も種々ありてむつかしいそうでありますが、挿花の方に於て

も實に此花は大切なもので、矯めもよくきゝ盛りも久しくありますから、此菊で以て充分稽古をして置けば草花の大體はしらるゝ程であります殊にまた「ながし」ものにもなれば、組挿、挿込、或は輪挿にもあり、また黄紅白など花の色異なるもおかしく、夏菊、寒菊などありて其風情もさま〴〵に皆聊づゝ挿方にも亦其趣を異にして居ます、凡そ挿花は花も大事でありますが、葉も亦損せぬやうにすべきは申迄もありませぬが、殊に菊は葉によりて大に趣を得るものでありますから、別して注意を致さねばなりませぬ。



輪挿菊　十一本

大輪ものには多く一花一莖に仕立てるのが多き故、この挿方を輪挿、と申て三輪五輪七輪九輪或は十一十五と

奇數に挿るのであります、さればまづ七輪の花には七莖、十五輪の花には十五莖を用ゐねばなりませぬから、枝の矯方にも大に注意が入りますが、第一は枝の長短と花の配置が肝要であります、他の挿方ならば、ほゞ形が備りたる上にて鋏を入れ不用の枝、花などを除くのでありますが、此輪挿に於てはそれが出來ませぬ、鋏を入るゝ時は僅に葉ぐらひの事なれば、まづ最初の枝調に殊に重きを置かねばなりませぬ、そこでまづ十一なり、



中輪菊

十三なり豫め挿んとする花の配置を考へ置き、枝を矯めるより前に只單に、長短丈を定めて一束に握りもちてまづ根をそろへて切り、然る後矯るやうにせねばなりませぬ、第一圖が即ち其輪挿の形式を示したるものであります。

中輪　以下は一莖に數花を咲かする樣にしたつるが常で、かゝる類の花の挿方は前のとは異り、花の數に制限はありませぬが、長短配置に至りましては少しも變る事はありませぬ、唯付枝を利用する事が

出來るだけ、輪挿よりは大に變化がありておもしろい、然し技ふりに注意をして枝の岐れ目の見えないやうに致さねばなりませぬ、其形の總ては前回秋菊の部に於て述べてありますから、大方はそれを御參考ありたいのであります。

小菊に至りましては殊に花の數などには少しも關係なく只一株〳〵をよく配置するやうにするのであります、それ故輪挿のとは全く趣が變りて、其たけ高からず複雜な形を示すに適して居ります、また此小菊はとかく茂り勝になりますから惡くすると、全體が肥え過ぎて活氣のない形が出來たがるものでありますから、よく注意して其茂りたる間には隙をこしらへるやうに致さねばなりませぬ、總て菊はながしものにも大に適して居りますが、殊に小菊は低ながしなどはおもしろきものでありますから、第三圖に示して



置きました。

夏菊、は秋菊と異る事がありませぬから略しますが、

寒菊は秋の千草がやう〳〵虫の音と共に枯れ果つる中に獨り後れて霜の中に凛々しく晩節を保ちて、まことに氣品が高く、枝つきも稜々と氣骨を備へて居りますから同じ小菊でも、此方は特に優しきよりも、一ふしあるやうに挿さねばなりませぬ、しかし長が低い花でありますから、組挿にも最も宜しいやうであります、また

水揚法は根の切口を炭火にて燒き、然して後倒に提げて冷水をかけ、濡蓆につゝみ後、水に移し置くもよろしけれど、熱湯或は、蓬の煎じ汁にて根本を二寸ばかり、凡そ十分間ほど漬たる後、逆水を灌ぎ、濡蓆に包みて置き、また根を冷水に浸し置く方最もよろしいのであります。（つゞく）

嵐こそ吹きこざりけれみやぢ山また楓葉の散らで殘れる　（更科日記）

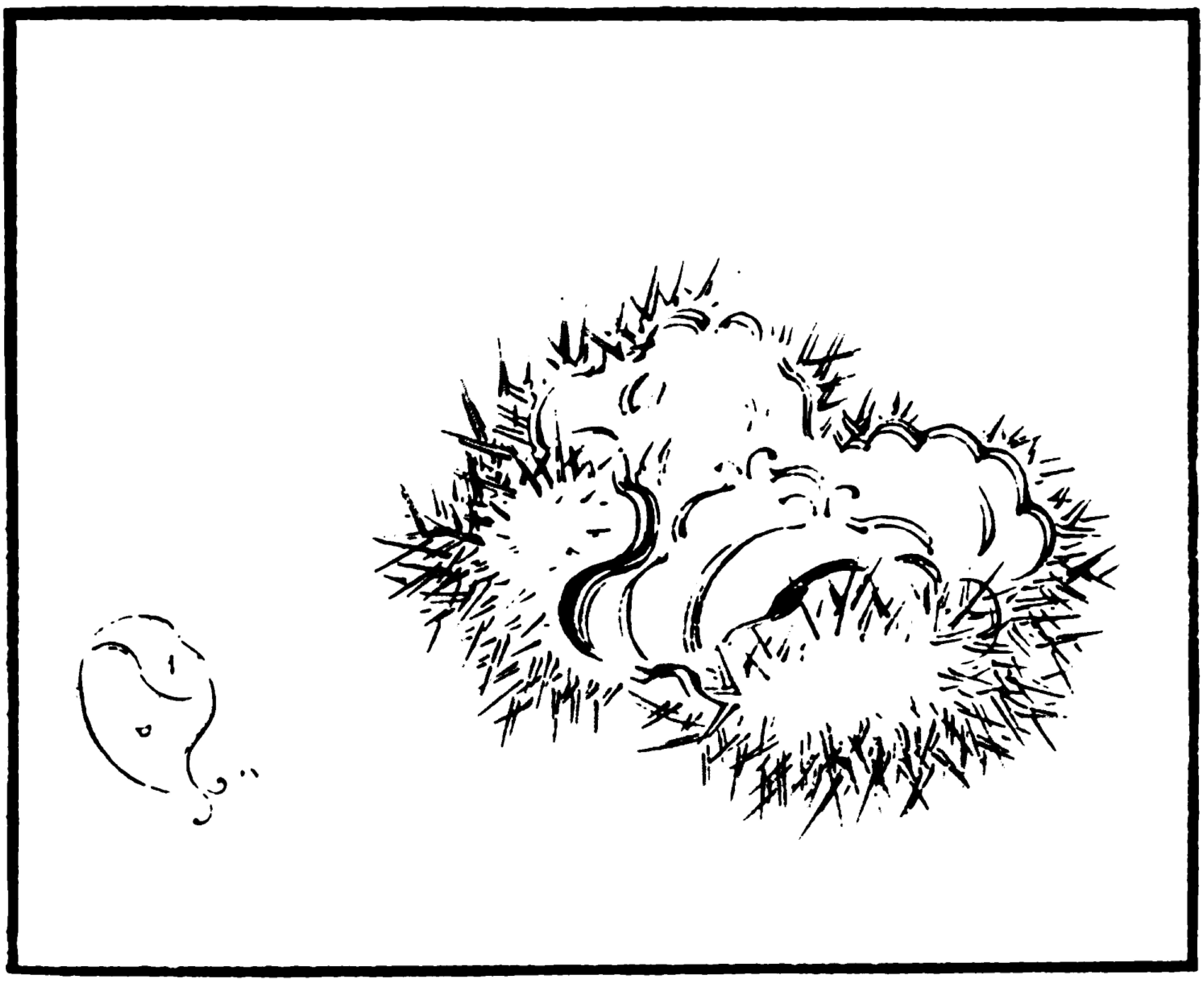
みな底の月のうへより漕ぐ船の棹にさはるは桂なるらん　（土佐日記）

和畫通信講義

山崎彩峨

墨畫にては、淡墨にて皮をゑがき、果實栗毛は、淡墨を含めし筆先に、濃墨を附して、ゑかき、後ち、淡墨の隈を入るゝなり。

彩色にては、赭墨にて、內皮、及ひ、栗毛果形をゑかき、乾きてのち、イハ赭墨、ロは赭墨へ臙脂少量を和したるものを塗布し、棘毛には、薄き赭墨の隈を施し、皮の內部には、極めて薄き赭墨の隈を入れ、筆端を、水にてはかす。ハは、濃墨にて入るゝなり。



だいどころ

女子東京美術學校講師　石井湧太郎

一、口取物は　玉子卷甘藷　紫蘇卷蓮根　世照煮

○玉子卷芋の仕方

用意の道具は、玉子燒鍋、馬尾篩、布巾、飯杓子、大皿、俎板、等である、

原料品、玉子五ッ（但し之れは玉子燒鍋の大小に由つて異なる）、ふかしいも大二本、砂糖、醬油、

●仕方　玉子は腐れたるを防がん爲め、一個づゝ小さき器に割りては他の器に移し合せ此の如くして能く攪き交せ、玉子五個には醬油一勺五勺（小さき盃猪口に一杯）を混せ、尙砂糖五匁を加へて充

分に溶解し、さて玉子燒鍋に胡麻の油を紙に付けてよく塗り置き、火氣に當て、少しく熱したる時玉子を入れて燒くなり、此れを燒くにも一ヶ所に火氣の當らざる樣、四方まんべんなく火氣を當てるに、注意する事肝要なり、厚さは普通二分位に燒くをよしとす、此の玉子の燒けたる時片端より竹などの細串を以て、そろ〳〵とはがしながら卷き行くべし、之れをする時は火より鍋を下し置きて、爲す事と知るべし、卷きたるを兩手に取つて板の上に置き、又油一ぺん鍋にしきて、卷きたる玉子を開らき、燒かざる方の一面を少し燒くべし、此の如くして板の上に布巾を敷き其の上に玉子をひろげ、冷し置くべし、次にふかし芋の筋のなきを撰び、其の皮を剝いて小口より三四分の厚さに切り、馬尾篩にて裏漉しにかけ（裏漉しとは馬尾篩の裏より漉すと云ふ意なり）尤も馬尾篩の下に大皿を置きて、漉せたる芋を皿に受くるものなり、さて芋の漉粉に砂糖十匁を加へ、酢極少量を交ぜて練り交せて、味を付け、之れを以前の冷し置きたる玉子の上に平に延し付け、布巾を以て端より卷き〆、卷の如くになし、其の終りの卷口に玉子の器に殘りたる汁を付け、鍋にて燒き付けるなり、其れを小口より五分或は八分位迄に切りて、二ッ、又は三ッ、皿の向ふに盛るべし。

鯊照り煮、

用意道具は以前の物にてよろし、

原料品、鯊の大なるを五尾、味りん、醬油、

仕方、鯊の頭を落し腹をさきて腸を出し、尤も鱗は初めに取り置くをよしとす、之れを一度水にて洗ひ、此の時俎も共に洗ふべし、次に其の身を三枚におろし（三枚とは兩身を取り中骨を去る事なり）鰭なども切り捨て、細き鐵の燒串に指し連

ね、白燒に焦げぬ程あぶり（白ら燒とは何も用ひずして其のまゝ燒く事なり）さて小鍋に味淋と醬油を等分に合せ、火にかけて半分程に煮込め、其の內に白燒になしたる鯊を入れ崩れぬ樣に少時煮るべし、之れを皿に取り並べ風にあつれば、光澤出づるなり、之れを五ッ位卷玉子の前に盛るべし、

○紫蘇卷はす、

原料品、蓮根少し、紫蘇の葉のなるべく大なるもの、砂糖、酢、味淋、鹽、

●●仕方　蓮根の皮を剝き、水に浸し置きて、少時おゝくを拔き、小口より薄く切りて、後、之れを細形に四ッ位に切り、ざつと沸湯にて湯出笊に揚げてよく水氣をしたみ置き、酢五勺砂糖八匁、を合せ、一寸火にかけ煮返したる內に、蓮根を漬け込み、さて紫蘇の葉を洗ひ鹽を多く振りかけ揉み、之れを揉むに強く力を用ひて破らざる樣注意すべし、此の如くしたるを一枚づゝ廣げて、重ね桶などに入れ、上に板を置き壓をかけ、暫らくして取り出し、水にて洗ひ鍋に入れ、味りん、砂糖を、適宜に入れ、充分甘煮になし、此の葉を以て前の蓮根の甘酢に漬け置きたるを少しづゝ包みて三ッ程を鯊の傍に盛り合すべし。

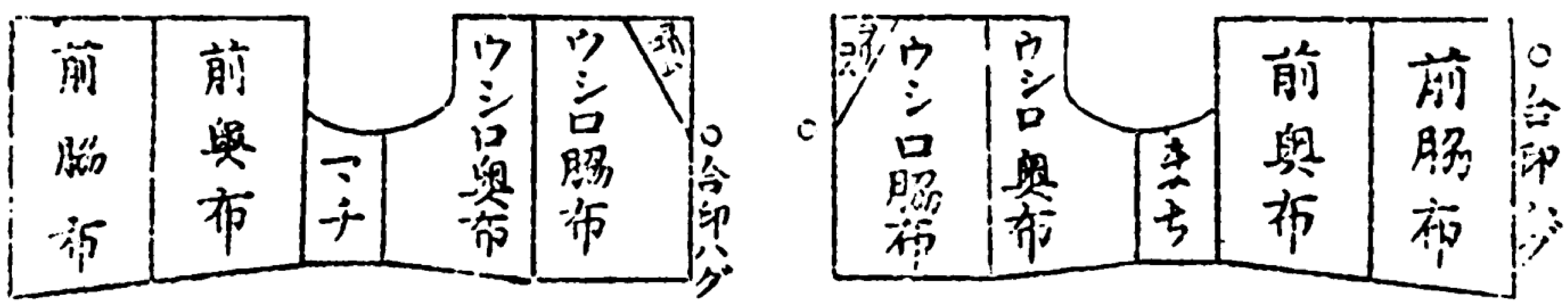
裁縫實修

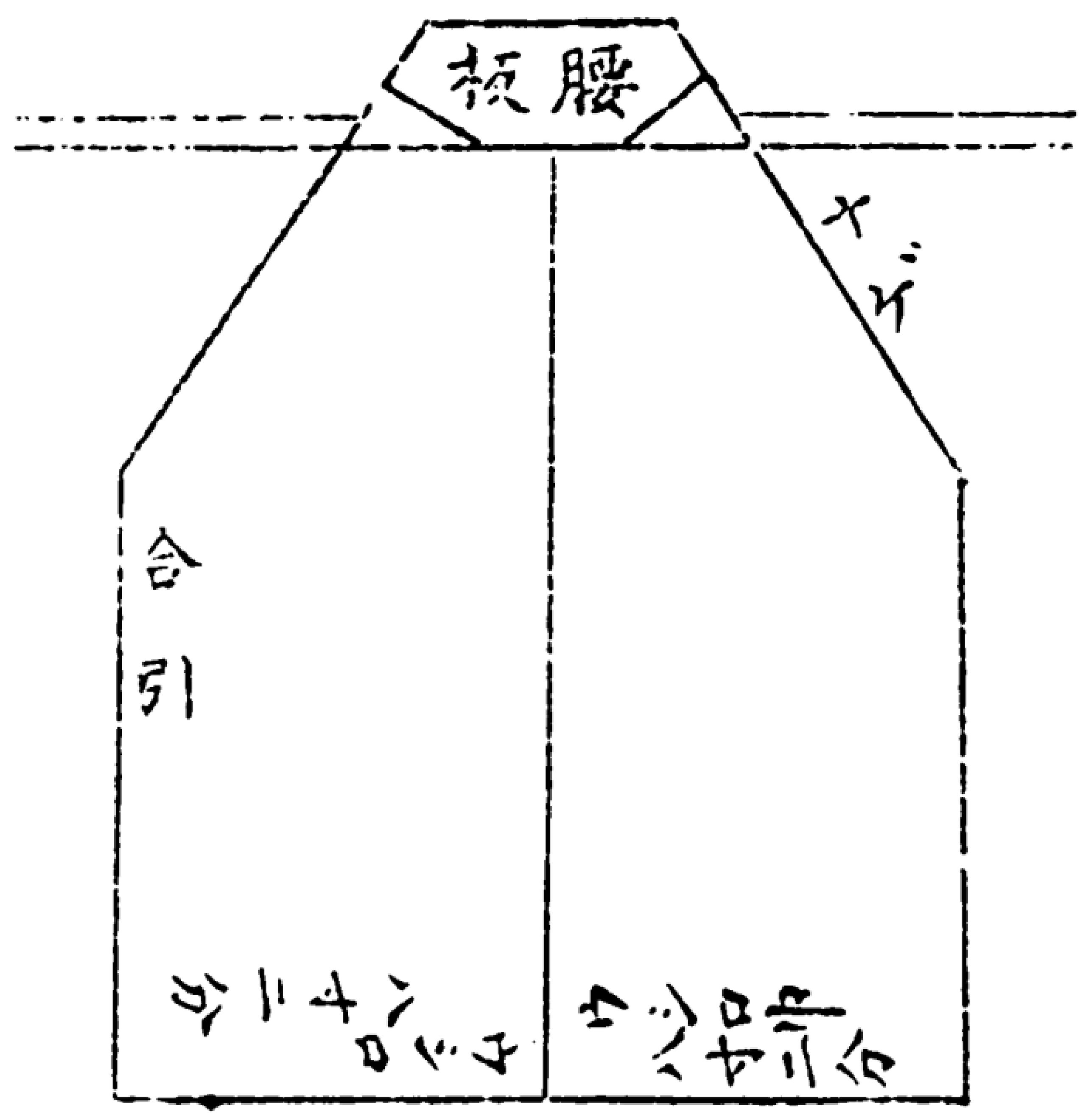
東京野口裁縫專門女學校長　野口兼吉

二丈四尺の布にて襠高袴の裁縫順序

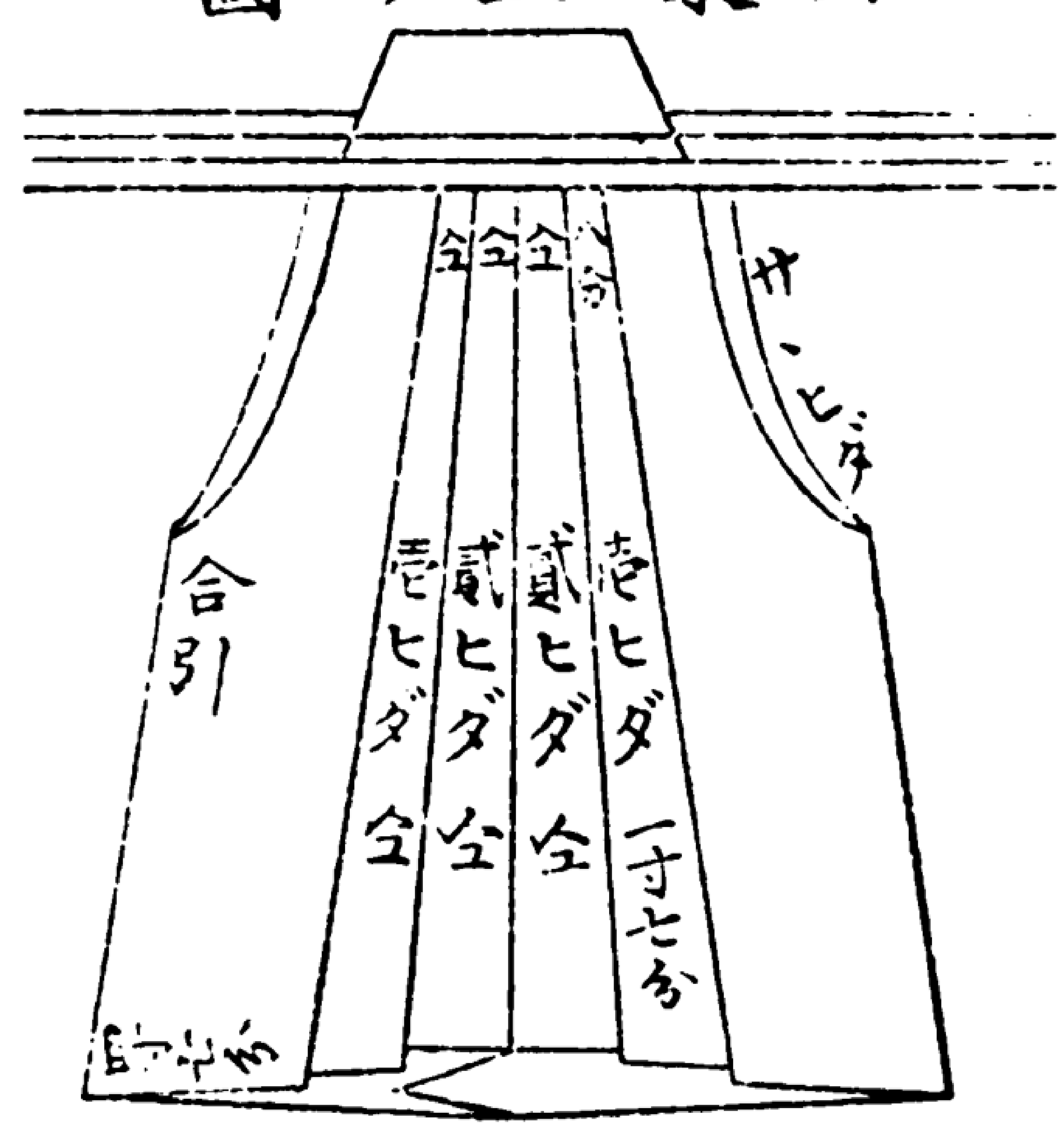
先圖の如く裁ち腰板の下巾六寸八分上巾四寸五分高さは二寸三分に立ぎりのりにて貼り附菱をつけてをき、裏の腰板も紙一枚をはり次に紐をつけ前紐の長さは一つはぎをして八尺六寸後紐の長さは二尺づつ次に合引の高さは紐下二尺三寸なれば一

右左布ハギノ圖

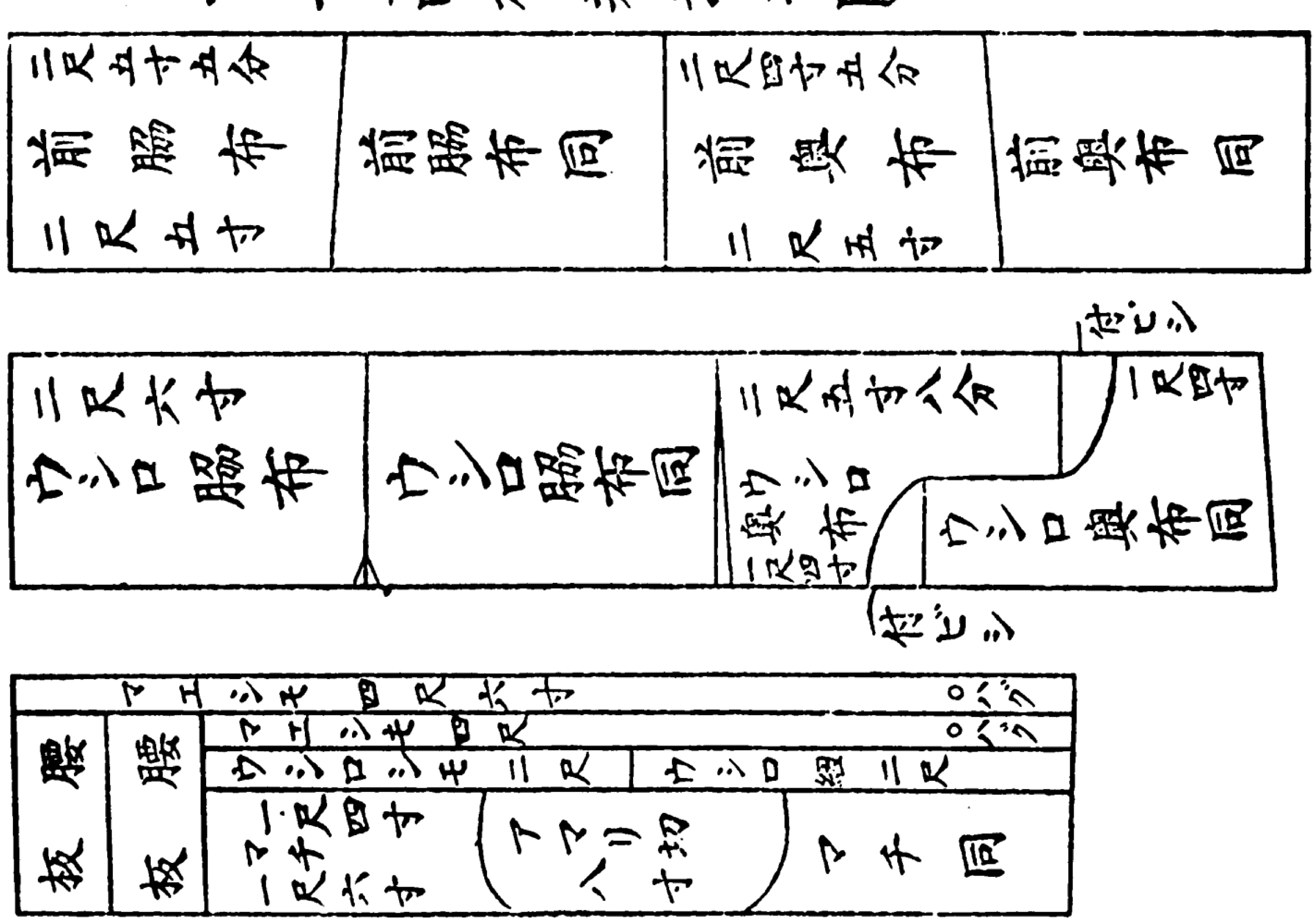




出來上リ圖



マチ高袴裁切之圖



尺五寸襠の高さは一尺四寸にて宜しく後のたゝみはゞ八寸二分前の合引の巾は四寸七分一のしだ二のひだの巾は一寸七分づゝ前のたゝみ巾紐附にて八寸さゝひだの巾上にて九分次に縫めの折かへしかたは總て襠の方へかへし合引のはぎは前の方へかへし次にすそかげを五分二つ折にしてくけつけ次に圖の如きひだをとり腰板をつけて前襠を附圖の如く出來上るなり。

合引の高さ襠の高さ等の如きは袴の丈に應じて仕立つべし。



粧ひは度を過さゞるまでを婦人の身嗜みとなす。（古諺）

漫錄

婚姻學（承前）

法學士　天野弘一

（第二）　家といふ言葉の意味

家といふことは考へやうによつてはどうにでも取れます。例へば此度のあらしでどこどこの家が倒れたとか、洪水で家が何軒流されたとか、或は火事で家が殘らず燒けてしまつたとか色々申します。此時の家といふのは無論家と名づくる建物を

いふのでありまして猶は家屋屋舎といふのと同じことであらうと存じます。そうかと思ふとどこどこの家では家内が睦しいとか、家庭が紊れてゐるとか、或は富みたる家、貧しき家、など申します。此時の家といふのは無論建物といふ意味ではありません。何も家内が睦しいといふたからとて家の内がひつそりしてゐるといふわけでもなし、家庭が紊れてゐるといふたとて家財道具が取り散らしてあるの庭の植木があれ果てゝ居るのといふわけではありません。富みたる家貧しき家といふのも其通り。決して屋舎建造物に就て申すことではありません。否其屋舎建造物の内に生活して居る人人の集りをいふのであります。だから睦しい家としいへば同じ住家に在る人々が御互に中よく暮らして居るその集り即ち團体をいふのでありますし、汚れたる家としいへばきたない建物といふのではなくて、其建物の内に生活して居る人々が皆汚れたる行をしてゐる其團体を指していふのである。貧しき家といひ富みたる家といふ亦然り。一つ鍋の御飯をたべてゐる貧しき人々の集りは之を貧家といひ同じいらかの下に綺羅錦繍を纏うて居る人々の團体は之を富家といふのであります。だから家といふにも大体二様の意味がありまして有形の屋舎建造物そのものを指していふ塲合と屋舎建造物の内に生活する人々の集り即ち團体なる無形のものを指していふこととあります。私の茲に家と申しますのは此後の方の意味で御座ります。併しながら人々の集りといふにしても色々ありまして或は親子兄弟水入らずの集りも御座りませうし、或は多くの下女下男を使ひ居候も澤山居る集りも御座りませう。それ等は何れにしても一の集りには相違有ませんが、前のと後のとは大に其性

質を異にして居ります。成程下女下男居候と雖も一つかまどの下に生活してゐる以上はこれ亦廣く解して所謂家を成して居るともいへませうがどうも此等の者は言はば他人で直接に其家の榮枯盛衰に關するものではありません。だから玆に私が家と申しますのは廣く同じ家屋の内に生活してゐる一切の人々の集りをいふのではなくてそれよりは狹く他人交らずのほんの内々同志の集り即ち親族の結合であつて而かも其上に一家の長たるもの即ち今の言葉で言へば戸主といふものを戴いて其支配の下に在る團體を指していふのであります。尤も其家なる團體を形作る團體員即ち家族なるものは强ち同じ家屋に同棲しなければならぬとは限りませぬ。苟くも同じ戸主の支配の下に在る以上はたとひ其居を同じうせずと雖も猶は其家に在ると申します。だから家とは單に同じ家屋の内に生活して居る親族の結合といふても亦少し狹きに失するのであります。之を要するに生活する家屋を異にするも同じ戸主の支配の下に在る以上は其家に在るといふが如くたとひ生活する家屋を同じうすと雖も同じ戸主の支配の下に在らざる者は其家に在るとは申しませぬ。つゞめていへば家とは同じ家長の下に在る親族の結合團體を謂ふのであります。

然し以上は皆普通の場合を觀て申上げたので御座りまして進むで極端なる場合を想像いたしますれば家とは必ずしも人々の集りをいふとは限りません。唯だ一人にて家を形作るもの即ち法律に所謂單身戸主なるものも御座ります。然し之は殆ど稀なるもので御座りますから私は便宜上唯だ普通の場合を觀て右の如き定義を下したに過ぎないのであります。

村雨日記

文學士　紅於生

千代田の都をすじかいに飛びて、呉竹の根岸の里に巣籠りしほとゝぎす、今は血に啼く聲も聞えず、嗟乎悲夫、鳥の將に死なむとする、其聲やかなし、人の將に死なむとする、其言やよし、この子規の臨終の聲を聽け、

絲瓜咲いて痰のつまりし佛かな

痰一斗絲瓜の水も間にあはず

おとゝひの絲瓜の水も取らざりき

冷靜にして醞籍なるこの言豈によからずや。

我郷の先輩正岡子規子、去月十九日を以て逝きぬ、子規子は我文壇の雄將なりき、その半生を病の床に送りて、わが文壇に貢献せしところ、いかに多かりしかを觀れば、凡俗文士の匹儔にあらざりしを知るに足らむ。

我邦美學の先覺たる鷗外博士すら、いまだ筆を美學に染めざりし昔に於て、子規子は已に之れを俳句の上に應用せしにあらずや、樗牛博士が畢生の心血を灑げる日蓮上人は、博士の名がいまだ文壇に顯れざる昔に於て、已に子規子によりて尙論せられたるにあらずや、壇林の俳風一世をうちなびけて、點取宗匠の勢すさまじかりし時、忽然根岸の空にくすしき聲を放ちて、風雅の大俗を罵倒し、壇林の俳諧は文學にあらずとなし、宗匠等が金科玉條となせし「古池の句」、「道ばたの木槿」の句を批評して俗人の膽を奪ひ、徐ろに文學的俳句を說いて、天下に呼號すれば、具眼者響應して、こゝに伊豫派の旗幟をひるがえしぬ、加之南畵の名人として、しかもその名やう／＼世間に忘られむとする與謝蕪村を、九泉の下に呼び起

して、盛に天明の俳風を稱揚し、研鑽孜々として臨終の期に至りき、元祿の俳壇は芭蕉を中心として起り、天明の俳風は蕪村によりて起りしとすれば、明治の新俳句は子規子の力を藉る所最も多しとなす、芭蕉、蕪村、子規子、この三子者は俳界の三大時期を作りし達人なり。

子規子は多能の人なりき、決して區々たる俳界に跼蹐すべき人にあらざりき、天若し假すに健康を以てせば、その功果は必ずや文學界全般に及びしならむ、而して遊刃或は文學界外に逸せしならむ、昊天無情、子の多能を嫉みて、遂に不治の病魔を與へたり、しかも明治俳句の革新と興隆とは、この病魔の賜なり、嗚呼世事すべて塞氏の馬なるかな。

されど子規子の雄心は、二豎の能く屈し得べきにあらず、俳界の功殆んど成りて、筆端は忽ち和歌界に飛びぬ、古今集以下歴代の勅撰、艶冶優麗毫も生氣なきを排して、直ちに跡を萬葉の古體に接し、金槐集の雄壯を推擧して、莊麗盛大の歌風を挽回せむと企てぬ、看るべし萬葉の古調常に日本紙上に光彩を放つを、これ子規子が唱道の結果なり、子は又新體詩の改進を圖りぬ、その押韻を稱へし如き、成敗の跡はしばらく問はず、確に一見識と云ふべし、日本人にかゝげし「森林の歌」の如き、妙神に入りたり、樗牛博士評して希臘の神話に比せしは、蓋し過當にあらざるなり、この外文藝美術凡百の問題を捉へて、評論縱横、大患の身に迫るを知らざるが如し、精氣磅礴、眞に我が文壇を念ふものにあらざれば、爲し能はざる所なり。

嗟乎此人今や則亡矣、温厚赤誠の聲また何の時にか聞かむ、予の子規子を哭する、啻同郷先輩た

る故のみにあらず、又我邦文壇の一大恨事たるを以てなり。

懊惱八年、未だ嘗て筆を文學に絶たず、墨汁一滴長へに血涙の種となり、病牀六尺常に斷腸の因をなす、しかも靜座默讀すれば、双脚既に棺槨の中に在りて、頭腦いよ〳〵明快、義理精整して一絲紊れず、然れども去月十六七日の病牀六尺を觀るに及んで、覺えず卷を掩ひぬ、子規子功おわりて罪なし、天帝何が故にこの人を苦しむるとかくの如かりしや、予は愚にも天地の神をうらむなり。

予や子規子に於て一面の識なし、夙にその高風を欽慕して、親しく謦咳に接せむと



を望みゐたり、而して未だその期を得ずして、予は白玉樓上に赴きぬ、遺恨何ぞ限らむ、獺祭書屋俳話『俳人蕪村』座右に在り、半宵人靜まりて萬籟死せし時、書窓に凭りて靜讀すれば、彷彿としてその人こゝに在すが如し、せめてもの心やりこれに若くものあし、明月を踏んで前栽を徜徉すれば、零露凝て珠の如し、蛩々の音切々の聲、恨の數は絶ゆる期あらじ、梧桐一葉金風に散りて夜色轉た沈々たり、涕を拭うて根岸の空のわたりをふりさけ見れど蒼々たる長穹、茫々としてそれとおぼしき影だにもなし、一團の雲のちぎれかなたをさして飛び去りぬ、あはれ雲よ、載せ

てゆけかし我思を、嗟乎悲夫。

我涙凝りて成りし黑雲よ
　根岸の空の雨とあれかし

○脹腹漫言

痴男

△近世文明が齎らした結果の中で、萬國公法普通教育の普及代議政體公平裁判法等は其重なるものであるが、婦人の地位の進捗は亦極めて大なる要素の一である。

△如何ある國にてもあれ女子の位地狀態を我に示せ、我は汝に其國文明の程度を示さん、とは公平な一言で、强ちに高襟の專用語ではない。我國の如きも今生殘つて居る昔の夫婦と明治に成つて生れた人々の組織した家庭とを物は試しと比較して見ても、中には例外もあらうが夫が妻を見る眼が根底から差つて居ると云ふ事は爭ふ可らざる事實である。

△處が自分如きは未だ什麽にも日本婦人の位地と云ふ事に論及すると謂ひ度い事が山々あるので其一端を漏らすの寛容を諸君に請ひ度い、と云ふのは婦人自身が婦人の位地を卑しみ悲しんで居らるゝ事の俯効なきを第一に憤慨するのである。中には國家の母などゝのたまはする姫達もあらうから、此等の方々は先つ目を瞑いで居て頂きたい。

△御覧なさい、その宜い證據を御目に掛る、姙娠中の奥様が一から十迄何と被仰る？腹の兒が男であれば宜い！何故である總領が男であるからか、いゝえ總領も次男も男で御出なさる、それだのに男の欲しい、はて此處がそれ婦人專門研究家（某と云へる人の新聞廣告中に冠りたる大

な男用ボンチット）の沈思默考を値する所なのである。

△男兒が生れゝば宜いと云ふ思想の中には婦人の謙遜の徳を痕跡認め得ぬでもないが、試驗紙の紅くも緑にも成る程反應しない、自分一個の管見に據ると婦人の不見識なるを自白して居るので、己が天職を忘れ眼前屈辱の如き觀ある身の上を憤つて彼治者の如何に善良なる治者をも惡樣に謂なす如く意氣地無しが人の物さへ見れば美しがる如く唯もう華美な仕事をする男に限りますよと皮相の考を吐露するに過ぎぬのである。

△これが無教育な御かみさんなら知らぬ事、自分の友達の細君などには立派な御婦人であつて眞逆此人はと思ふと大當違「奥樣御安產で結構です」「エヽ什麽も有難う、此が男だと宜いんですけれどもあなた女なんですよ、落膽しました」落膽しましたには此方が落膽する位なものだ。

△織田信長今川義元を沓掛山に打つて大に之を敗つた時、義元の首を斬つた毛利新介を後廻しにし、計事を薦めた梁田出羽守に馬から降りぬ內三千貫を引手物として取らせたと云ふ話は、有繫名將の深き心使凡を拔て居ると頌へられたる逸話であるが、婦人は平常まあ梁田出羽守の位地にあるもので表面上は温柔であつて、それこそ劔を揮て立討はしないかも知れぬが、婦人の內を戍つて男子に內憂の煩なからしむる手腕は毛利新介と少くとも同等の功と云はねばならぬ。

△兎角華美を外觀に覓めて誰も椽下の礎や根床などより家根の鬼瓦を擔ぐのが世の態である。鬼瓦も風雨や烈日に曝されては鼻を欠く事などが

漫論

あるけれども、暗い濕氣た椽の下も耐つたものでは無い、婦人は椽の下である、鬼瓦の搖かぬは椽の下の力であるから、決して輕蔑されないのである。其功敢て彼が先此が後と云ふべきでは無いが大に自重して下らぬ要意を除くべきであらう。

△日本にも隨分立派な名姫が出て御出のやうだが、一般に婦人自身が婦人を輕んじて、鳥渡した事のやうでも男の子を只管欲しがるやうでは、婦人の地位は中々高まらぬ、男が對等に相手にしてくれる時代は遠いと思ふ。

△實以て男子も婦人の位地の卑いのを喜んでは居ないので、偶に高めやうなどゝ思つたり、此方から高めると手を燒く事があるので、東洋流の專制を遣つて居るのであります、も少し御婦人自身が自尊自重の念を養はん事を希望します。

○ヴェスピアスの大破裂

金輪際の焦熱地獄より噴き出す猛焰は、嚮には西印度マルチニク島の大噴火となり、近くは我鳥島の大破裂となりまして、無數の生靈は、憐はれ生きながら紅蓮火口の亡者として、宙宇に宿るところなき三界に迷へる羊となりました、然し當時の生殘者がなき爲め、とんと如何なる狀態で、如何なる悲劇を演じたかも知る事が出來ないで、絕海の孤嶋今に夜々啾々の鬼哭があるだらうと思はれます、さりながら、其光景が慘憺悲哀を極めたであらうと云ふ事は、火山破裂なる一語で、誰れでも確かに想像が出來やうと思はれます、今猶ほ適切に之れを印象し得る爲め、私は茲にヴェスピアス山破裂の光景を寫した、當時の記錄を抄譯したのでありますが、之れを見たら、火山破裂の如何に恐ろしく、又此難に逢ふ人々の中にも、悲慘極る物語の種を殘す人があるのも知れます、此記錄は、元來は書翰であつて、此火山の爲めに斃れた總督プリニユースといふ人の甥が、其實際目擊したのを、プリニユースの息子に送たものであります、であるから、慘狀歷々として手とる樣であるのも無理のない話です、而してヴェスピアスの破裂は、實に紀元七十九年八月廿四日に起つた事實です。

前略八月廿四日午后一時頃、見慣ぬ程大なる黃雲、天に現はれたる由を伯父君に我母より申し傳へ申候、然るに伯父君には、直ちに木履を求められ、高臺に登りて、天の異象を詳細に觀察せられ候、其折は雲は見得べくも候ひしが、地は餘りに遠方にありし爲

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

趣味と實益との無盡藏

春、夏、秋、冬、常に時と共に新にして讀者の知らんと欲する所を記し、得んと欲する所を與ふ、宛も讀者の胸中に入りて、一々其注文を照すが如し、家居にも、旅行にも、社會無事の日も、國家多事の時も、一日此新聞無かる可からず

繪入日刊

萬朝報

一讀して眞價を知れ

詩あり、歌あり、俳句あり、圖畵あり、雜俳あり、娯樂あり、知識あり、天の聲、人の聲、一紙に依りて聞くを得る、文章は麗、議論は確、記事は綿密にして信切なり、士農工商、一人も此新聞に離る可からず

全國第一の勉强新聞

東京市京橋區弓町廿一番地

電話新橋三五二番　朝報社　電話新橋二三六番

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

關藤次郎先生編

家庭衛生

普通臨床

看病法

精圖挿入◉正價參拾錢◉郵税四錢

醫學士馬島珪之助先生閲　關藤治郎君著

普通衛生

療病新書

附 處方調劑術　正價六十錢郵税六錢

本書は普通一般の疾病を網羅し一々詳細叮嚀に治療の使法及處方を指示せるもの讀者一度之を手にせば醫治の法忽ちにして己れが掌中にあるを得て山間僻邑醫なきの地と雖も常に醫士を招傭し置くの思ある可し加之醫士は之に依て治療の捷徑を得るの便あり故に學校教員會社工業家旅行者航海者産婆看護婦及家庭の衛生等に取りては療治急救上日常庶人の欠ぐべからざる効益顯著の寶典也

産科婦人科楠田院長　楠田謙藏先生閲並序

同醫員　渡邊光次郎先生著

第九版

普通姙娠論

附姙婦の攝生

續編 小兒養育法

一名『兒を設くる法』

紙數二百五十頁石版精圖四十個入

懐中本正價金六十錢 郵税六錢

密封小包郵送八錢 百里外十六錢

本書は久しく産科婦人科に從事して經驗に富める專門醫渡邊先生の著にして生殖器の解剖、生理、衛生を始めとし生殖に影響する全身の疾病、婚姻並婚姻後の注意姙娠並姙娠の攝生に至る迄廿三章、百廿項を設け悉く網羅して平易簡明に説述し加之精巧なる石版圖畵數十葉を挿入し振假名を附せられたれば苟も自己の健康に注意し系統を蕃殖し**強健の子孫を得ん**と欲する諸君は男女を問はず一讀せざるべからざるの好著述なり一たび此の書を繙かば多病なりし夫婦は壯健となり不和なりし閨門は圓熟し不姙なりし婦人は可憐の小兒を擧ぐることを得ん大方の諸君乞ふ世にありふれたる此種の著述と同一視することなく一讀其不幸を癒せらる可し

發兌元

神田區今川橋通鍛冶町四番地

(電話本局四九四)

誠之堂書店

◉賣捌全國有名書店

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

徳富猪一郎著　國民叢書第九冊

九版

家庭小訓

定價十二錢
郵税二錢

本書は凡家庭に處して一言一行一擧一動すべき心得上、注意上、苟も大方の裨益となるべしと思はるゝ點をば著者が叮嚀に、平易に、懇切に陳述したるものにして子女敎育、家政等の事は固より大は家庭の感化を國家に及ぼす事より小は花見、納涼、物品贈答の如きに至る迄網羅せざるはなし即ち本書は必讀の家庭讀本にして之を·當今の女大學、今川狀と云ふも可也、今や九版成る江湖の士女幸に一讀せられよ、

目次

◎愛度き新年◎美はしき家風◎健全なる身體、健全なる家庭◎堪忍◎慈善◎孝養◎何を以て観せん乎◎看花の好時節◎新婚者への戒◎女子教育の事◎手紙の事◎手近き道德◎書物の外にも學問あり◎家庭教育の事◎手近き家庭教育◎父母は教師なり家庭は學校なり◎兒童の教訓としての談話◎家庭教育◎子供の衣服◎夏の樂み◎避暑の出來ざる人に向て避暑の方法を示す◎旅行◎健康、衛生◎家庭の伴侶◎談話の種子◎一家の秩序◎生活の程度◎家庭に於ける手工◎内職◎親類緣家の交際法◎來客を待遇する心得◎奉公人を使ふ心得◎品物の贈答◎歳暮の家庭

蘆花生著

第二十五版

不如歸

上製總クロース金文字入　定價五十錢郵税四錢
並製　定價三十錢郵税四錢

●●●●帝國文學評　寫し出されたる社會の廣き、事象の多端にして統一せる想の健全なる、愛の醇なる、慰安的なる、人物の性格一致して活動の妙ある、文致清婉詩趣に富めるなど之の點に於て評家の言一致したるが如し。吾等の見る所を以てすれば氏は確に現時小説界要求の幾分を滿したるものゝ如し、凡人小説、不醇戀愛小説に對して一新生面を開きたる功績は沒了すべきにあらず。

蘆花生著

第十一版

思出の記

上製總クロース金文字入定價一圓郵税十錢
並製　定價六十五錢郵税十錢

●●太陽評　文情の高潔なる、今の小説界に於て稀に見る所也。全篇の結構平淡に過ぎて波瀾に乏しきを憾むべしと雖も、樂天和平の間に於て能く人生の歸趣を描くところ、太だ及び易からず。加ふるに深き信仰あり、高き道念あり、而して詩趣亦乏しからず：：今の駄小説に較ぶれば、殆ど同日の談に非るを覺ゆ。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社



五鈴道人

菊開き香る今日この頃、わきても目出度よろこばしき天長節の一と日、空朗に、秋の錦のいろ〳〵ある中に、黄金の光りとや見ん俤の、如何に尊かりけるよ。

目出度酌み交す聖代の菊酒に、微醺ける諸人の眼元の色や正に是れ大和心の山櫻、まこと朝日に匂ふらん。

文の錦の菊襲ね、數限りなく匂へる中にも、女の鑑と輝く本誌、今日盛装りし榮の姿、曇らぬ御代に照り渡る國の光と仰ぎことほぐ。

め、雲烟が果して山より立ち昇り候やは知り能はざりしに御座候、されど時を經過するに隨ひ、其恐ろべき雲烟が、ヴエスビアス山より來りしものなる事判然致し候、小生は今其雲の形を此に精密には寫し出し候事困難に候が、申さば、老いたる松伯が、其枝を擴げたるにも似つかはしきと云ふより外に、形容し能はざるに御座候、高丘に於ける非常なる高木が、枝より枝を出だして茂り合ひ、かの天に迫りて四方を蔽ふが如く、忽ち風伯の襲來に遇ひて、下方より上方に推し昇されたる樣に覺ゐ申候、然るに雲の重量は、自然と下層に向ひて下迫し來り、更に其擴張を相增し申候、而して其倏忽の間に、忽ちに光明灼爍とし、忽ちに闇々として土砂を捲き灰燼を充たし、漸次畏るべき異象を呈し來り申候。

元來伯父君は、好奇冒險の性質に富ませられ候を以て、玆に異象の何たるやを究めんと欲し、航路に輕裝船を備ふべく命令致され、小生にも隨行の許可を下され候ひしが、小生は勉學の最中なれば、後に殘らんと申候、しかるに其折、レクチナ女よりの書狀參りて、其居處のヴエスビアスに近く、今や危險に恐迫され、且つ遁逃すべき船さへも用意しあらざる由を申し來り候、さればプリニユウス伯父君は、直ちに四櫓立の小船を海に引き來らしめ、自ちも之れに乘ぜられて、レクチナ女及び知人を救助せんとて出發せられしが、其海岸は元來高貴の人々住居せらるゝ處に御座候、かくして伯父君は、刻一刻危險に近づかせられつゝ、然も破裂の變化變狀を寫して、舵を彼方に向けて疾驅せられ候、熱騰せる灰礫雨の如くに降り來り、一歩は一歩と其度合を增し、時には輕石の裂片と、噴出せる炎火より飛散せる黒色の燃ゐ立つばかりの石を奔迸して、海濤は海岸より後ざまに飛返る、げに獰猛の光景、岩片雷霆の如くにヴエスピアスより狂ひ立つ所、最早人間の近つくべからざる場合と相成し由に御座候此に至りて、伯父君も暫時躊躇せられて、歸航せんか否やを考一考せられたるが、忽ち歸航諫告せる舵手に向ひて一呼せられし由に候、『勇氣は幸福を扶く、船をポンペイに向くべし』と、之れ實に其勇悍なる一呼に候、暫くして、船はスタビアに着きたるを以て、避難の爲め家財を船に荷積みしたれど、行手遮ぎる逆風は、其落ち行く先を吹き卷き止めたる由に候、プリニユウ伯父君は、此時恐怖と不安に堪ゐざる徒黨を慰められしが、折しも吐き出すヴエスピアスの大破裂は、彼方此方の大地を破りて、前にも增せる猛力を以て上騰し、深夜に似る闇黒は、人々の驚悸を高めん爲めかの如くに一面を蔽ひ渡りたる由に候、伯父君は此時休息を取らんが爲め、ポンペイの別莊に赴かれ、深く睡眠に耽られし由に候、然るに其寢室の前の空地は、忽ち降り來る灰に蔽はれ、暫時を經れば、室外に出づる能はざるに至りしかば、人は直ちに伯父君を呼び起して、更に眠らでありし人々の方へと來られ候、此時人々は、屋内に留まるべきか屋外に流派すべきかを相談致し居りたるが、其時早く、家屋は强裂なる地震に揺り出され、奈落の底も裂け、彼方に推され此方に推し飛ばさるゝが如くに見ゐ申候ひしが、人々の猶一層戰慄に堪

はざりしが、屋外の大天、輕石の暴雨を注ぎ來る事激しかりし事に御座候、されば人は最後の手段として、他に移り行かんと決定致し候、或は墜ち來る石を防がん爲めにか、リンチル布片を頭部に巻き纏ふもあり、或は走り逃がれんとしてか、其途に迷ひ彷徨ふもあり、げに慘憺悲愴とは此事をや云ふなる、世界の至る所の國は、此時猶ほ白日皎々の間にあれど、此處は全く萬有を眞暗の巷と化し、黑闇々、時に倏然たる電光、惡魔の舌の如くに闇の間を綴りて閃くのみに御座候、此間に立ち迷へる、幽鬼に似たる人々は、海岸に走りて、只管救助に來る船を望み求めけるが、荒海は更に一層の狂亂を極め、此に止める船とては、唯の一隻も無之かりし由に候、プリニユウス伯父君、此時打壊されしリンチルの布上に横臥せられ、元氣を回復すべき冷水の一杯を求められて之れを飲み下されし由に候、折しも閃き渡る炎火のすさまじさ、硫黃惡臭を吹き込めて人々の呼吸を塞せしめんとし、今や奔逃すべき勇氣をすら奪ひ行く、而して伯父君も此が爲めに、驚きて跳び起き給ひ、二人の奴隷の肩に依倚せられ、勇氣を鼓舞せられんとせしが、おのづと弱る人力の悲しさ、再び人共々に倒れられし由に候が、見れば最早窒息せられたる慘憺の有様となられし由にて候、是れ實に窒息死に至りたる人の第三番目なる由に御座候、人の肩に擔はれし御遺骸を見奉れば、四肢には何の御怪我も御座なく候へ共、永劫の眠に入り給へる姿、死の神の手に奪ひ去られたる、悲しきとも何とも申すべきも御座なく候。（天風譯）（未完）

筆のしづく

文學士　田淵芙蓉

天下漸く亂れ初めたる正中元弘の昔、東風いたづらに吹きすさびて、九重深き宮居の雲、しばらくも靜かならず。戰ひの塵、巷をおほひて、笠置の露に御袖を絞らせ給ふ世の有樣、淺ましき事の限りなりけり。

後醍醐天皇は、叡明の帝におはしければ入道高時が陪臣の身にてありながら、恣に權をふるひ朝廷をあいがしろにするを怒らせられ、資朝、俊基等におほせて、關東御征伐のことを深く謀らしめ給ひけるに、その事はしなくも關東に聞えぬ。入道怒りて、不道にも兵を差向けたれば、帝は誓事を賜ひて事すみしかど、資朝以下の人々は皆鎌倉に送られて、多くは流罪に處せられ、或は殺

されにき。されど、帝はおもむろに高時を滅するに若かじと思召けむ、まづ皇子の尊雲法親王を天臺座主として、當時勢力ある山門の大衆を味方となし、窃に高僧を召して、關東調伏の法を行はしめ給へり。されど如何なる惡魔の仕業にや、此事また關東に聞えてけり。高時烈火の如く怒り立ち「われ此君の位にあらん程は天下安き事あるまじ、いで、承久の例にならひて、遠國に移し奉り大塔宮をば死罪に行ふべし。且は之に前だち龍顏に咫尺して當家を祈りし僧侶を捕へ、委しき事の由を尋ぬべし」と、決しぬ。その暴戻なると、茲に至りて極まれりといふべし。かくて、二階堂下野



判官、及び長井遠江守の兩人、使命を含みて上洛せり。理非をわきがたき荒吏の事なれば、また辛き憂目にや遇ふらむと、主上の宸襟を惱まさせ給ふも、いとかしこし。兩使は、直に雜賀隼人佐を遣して顯宗（天台宗）の碩德忠圓僧正、外二人を逮捕し、且つ南都（奈良）より、知教、教圓の二人をも召出して、六波羅に拘引しけり。されど、こゝにあはれなるは二條中納言爲明卿なり。卿は敷島の道にすぐれたれば、みかどの御いつくしみ凡ならず、花の朝、月の夕、歌合の御會には、必ず召されて御宴に侍すること常なりしかば、させる嫌疑あるにはあらねど、若し此の人を問ひ質

さば、叡慮の程も知れなんとて、遂に召されて高藤氏に預けられぬ。かの五人の僧達は、鎌倉に送りて處分する筈なれども、爲明卿のみは、京都にて、一應尋問の上、白狀あらば、その旨鎌倉に注進せんとて、檢斷に仰せて、やがて拷問の準備をなさしめたり、六波羅の庭上に山のごとく炭火をおこし、その上に數多の青き竹を列べ、雜色傍を擁してこれを歩ませんとす。烈々たる猛火は、炎をふいて竹の間にあらはれ、酷吏眼をそばだてゝ四邊を警めたり。實に四重五逆の罪人が、修羅の責苦にあふもかくやと覺えて、見る者目を消し、聞く人身の毛を慄はしむ。されど爲明卿は、なみ〳〵の公卿の類にはあらず、よし身はさかれ骨挫かるゝとも朝廷の秘密洩すべきにあらず、況してよくも知らざる事をいかでか白狀すべきと覺悟やしけむ。いと靜に其樣を見やりて「硯やある」と仰せければ、さては、火に懼ぢて白狀のためかとて、硯に料紙を添へて出しけるが、白狀にはあらで、一首の歌を書きつけたり。

　思ひきやわが敷島の道ならで
　　うき世の事を問はるべしとは

視よ帝の關東御調伏のことは知らじと、巧に其半面より辯護して余りあるにあらずや。寸鐵人を殺す底の特長は、實に短詩形の中に存するものなり。言葉づかひ流暢にして調べよく齊ひ、而も一種の生氣あり。誠にかゝる場合に望みてこそ、初めて、人を感動せしむること深きものなれ。されば、さすが暴戾なる東吏等も、これを讀みて、涙を流し、げにもとて、爲明卿をば放免しけりとぞ僅か一首の歌なれど、一は朝廷の秘密を守り、他は一身の禍を免れたるものにして、また美談とするに足るべく、又和歌の德をも頌すべし。

上來述べ來りし事實は、單に一部を示したるに過ぎざれども、和歌の價値のいか程なりしかは、大方知るに難からざるべし。されどその和歌たるや、粧飾たるべからず、眞に衷心より出でしものたるべき也。之と共に、たゞ思想（和歌の内容）の上にのみ重きを置きて、字句修辭を顧みざるは、甚だ不可なり。そは人を感動することうすければ也。畢竟、内容外形の完美せるは、詩歌の期する所たるはいま更論を俟たず。嗚呼世の舊派先生よ徒に古今、新古今にのみ戀々するをやめて、少しく明治の新事物を捕へて、和歌の美形にあらはし給へ。ハイカラ先生新派先生、單に構想のうへに走るを止めて、少しく古歌を翫味して、格調修飾を勉めよ。氣韻なく高尚ならざるは、詩歌として、最も卑しむべきにあらずや。（完）

家庭俳句（三）

内田茂文

◎雪の簔家内中來て脱せけり。　後月

この句管々しく説明するまでもなく和氣靄然たる家庭の光景が十七語外に溢れて居る、他出したる家族の者か若しくは他人にもせよ降り積る雪空に簔笠纏うて外より入り來るを家内中の者が戸口に出迎へて「嘸々寒かつたで有う」とて雪装束を手傳ひて解かしむる心操の優しさ、此親しく温き家庭の睦みには雪の寒さも忘られんとするのです。

◎不行儀にあたりて寒き巨燵かな。　野月

疎匆かしき、、、サッ漢の無作法なる擧動を目前に見る樣です、外部からは見えぬ巨燵の蒲坐の裡さへも行儀は正しく仕度ものです。

◎其癖に返事は輕き巨燵かな。　長者丸

是はまた巨燵の暖さに戀々として他に呼ばれても容易に巨燵を出で去らぬズルイ者を警めたものです、返事は輕きの裏面には其尻の重い事が想像され、其癖斯いふ人物に限つて返事ばかりは容易く「今行きます只今……」など丶言ひ逃れて居るのです。

◎寢る事も用に數へて年の暮。　如濤

漸次に押し詰つて最早數へ日となつた年の暮の光景、何處もかしこも春の仕度に日も足らぬ家庭の忙しさ、明日は何をして明後日は彼をしてと胸算の裡には寢る事までも用の中へ數へる頻繁なる家庭を咏だものです。

◎花足袋を片々穿て居る兒かな。　文巢

男兒にあれ女兒にあれ、四歲五歲と云ふ愛嬌ある遊戲盛り、母親の言ふ事時としては聞かばこそ足袋さへ片々穿いたる儘にて駈出す小兒の無頓着に掬すべき天眞爛慢に見ゆるけれど、其兒を見て其親の家庭をも窺ふ事が出來ます。

◎家每に道持つ雪の戶口かな。　藜雨

是は尺以上も降り積つた大雪に雪掻き拂ふ術もなく僅に各自の家々のみ通ふ道を掻き拂ひたる光景を客觀的に咏だものであるが、人情は凡て玆處です、他はイザ先自己の家のみ夫も僅かに步み得らる丶通ひ路の雪掻く人心、誰やらの古い句に「寢る恩に門の雪掃く乞食かな」といふが有りますが、是も矢張り他の爲めならで自巳を愛するからの已むを得ざるに出づるもの、斯る時にこそ人情といふものは見え透さる丶のであります。

◎寢て居ては猫も踏まる丶師走かな。　其殘

由來俳句は表裏に意味の存するものが多い、此

句などは殊別て其顯著なるものである、春の仕度や暮の仕廻りあどにて繁忙しき師走の頃は家の中に居る飼猫さへ寢て居ては忙しき人の足に踏み飛ばさるゝ歳暮の繁忙なる家庭の光景を叙すると同時に怠惰者を戒しめた警句です。

◎拵へる上に兒の這ふ蒲團かな。　八　巣

この句は別段に深き意味の含まれたものではなく、文字に顯はれた通りの光景を露骨に咏だものであるが、如何にも幼兒を持てる家庭には有るべき實景、彼の昔の俳女園女の吟に「負ふた兒に髪なぶらるゝ暑さかな」と云ふ句があるが恰も同一對にて、斯る場合に五月蠅い思ひをする母親の身が察せらるゝのです。

◎琴の音の隣に背く砧かな。　露　蝶

是は都離れし郊外の閑靜な里などの夜景とも見るべきもので、紳士若しくは富豪の寮などにてあらんと思はるゝ家に床しく奏づる琴の音の、其隣りの家には里人の住居で夜に入りてまでも稼ぎ居る砧の音と相和せざる所、兩種族の家庭の差異なども想ひやらるゝ句です。

◎八九軒煤掃ならぶ天氣かな。　巴　女

追々と年末に迫り來ると何かに頻繁になり煤掃なども速くに濟せて置きたいと思ふは凡ての世間の人心であつて今日こそはと天氣都合を見計らひての煤掃は言合はさねど此處も其處もと軒毎に遣て居るのは妙なものです。

◎年の夜や一間は更て茶の薫る。　三　惠女

是も歳晩の句で除夜の景を咏だものです、家内中が繁雜を極めて居る中にも一室は最早掃除も届きて老人、隱居とも云ふべき人は斯の閑靜なる一室に春待ち顔に澄して茶を煮て居る光景です。

漫錄

結婚に對するトルストイ翁の意見

法科大學 佐藤天風

結論

一葦を横斷し、僅かに之れによりて偉大なるト翁が宗教的觀念によれる排結婚説を管見せり、吾人の筆、未だ短かくして、彼か遼天底の大見解を紹介するを得ざるを恨むと雖ども、固より彼が見解し、彼自身の宗教よりいでし學説たるを免れざるを以て、彼我胸中一貫して融化せずんば、到底之れを悉く解明する能はざるなり、然れども彼が如斯の大膽なる所説を公開するの先きには、必ず因りて以て、其來る所あらざるやは、之れ總ての人の前に横はる疑問たらずんばあらざる也。

彼は自ら謂て曰く、予は如斯の説を公言するを欲せず、最も普遍なる人類の最大弱點を指摘して、強ゐて之れに其罪悪なるを責むるは、是れ予が容易に忍び能はざる處なれども、理論を糺だし、聖經を研究し、而して更に之れを推理するの結果は、縦ひ幾度びの躊躇を經るとも、遂に之れを信せざるべからざるに至れり、故に予は已むなく之れに向て進軍せざるを得ざるべからずと、然り彼は熱心なる基督の信徒にして、又眞面目なる人生の研究者なり、之れを以てか推理研究の結果は、遂に如斯に至りしものとは云へ、若し更に其根底を探明し、其四邊の境域を觀じ來れば、如斯の以外、他に又彼れの學説の因て來る所以を求むるに難からざるべし、時弊に激して、ルーテルは改革の熱血を注ぎ、譎詐世に貴はれて、孔子春秋の聖經あり、蓋し一世の風潮、日に腐敗に趨き、月に沈滯に馳るに及び、此に偉大なる精神の英雄生ず、基

督然り、釋迦然り、日蓮然り、而して今又吾人トルストイに於て然るを見る。

惟ふに十九世紀は、異常なる智の發達を促したりき、一切の要求は智の鑰を以て常に答へられ、人は亦之れに滿足して、盲目的自由研究を以て妄進せり、無神論の盛んなりしは此時代なりき、科學萬能の大響ありしも、此時代なりき、唯物派か物質を以て萬有の大法と輕信し、自由派が極端ある秩序破壞を試みんとしたる、皆悉く十九世紀の所産たらずんばあらず、此に於てか、智はあらゆる方面に展開し去りて、時代の潮流は、遂に狂亂混淪の亂調子に陷るに至りぬ、然れども強ゐて、此間に於て社會倫理思想を貫きしものを求むれば、吾人は實に



極端なる平等主義と、猛烈なる自我的個人主義の二者を推さずんばあらず、兩者の爭は十九世紀中半に至りて益激甚を極めたれども、人類の心的傾向は、漸次自我的個人主義に傾き、世は益弱肉强食の亂態を示すに至りぬ、視よ、かの自由平等主義を唱ふる者も、若し一度び其心情を抉剖し盡さんか、是れ貧なる者、或は覇氣滿心の徒が、自己の滿足を求めんが爲めに絶叫する濁聲に非ざるなき乎、彼等の平等なるものは、富者の生血を吸うて自己の瘠軀を肥やさんとするなり、彼等の所謂自由は、放恣狂態を飾る裝衣に過ぎざる也、嗚呼恐れざるべけんや、恐れども更らにかの高貴富有の輩に至りては、より猛烈に、より露骨に、殆んど傍

若無人の慨あらずんばあらず、彼等は白晝肉慾主義を公表し、之れを實行せんが爲め、全力を振て自我の如何なる程度まで展開し得るかを試み、其富と其位とを以て、此賤むべき目的の手段となす、而も自らは自我の展開を以て、強ゐて人生の價値を定めんと欲し、滿足なき疾驅を以て、特に滿足の標準となさんとす、ルーソウ之れが序を書き、ニーチエ之れが跋を作り、ゴルキー之れを謳歌す、嗚呼人道茲に沈淪せんとし、怪雲天に漲りて飛ぶ、人誰れか大風の來りて魔臭を一掃するを翹望せざらんや、果然トルストイは、眞正なる自由平等と、節慾博愛の旗を翻へして、壓制の荒野東歐の一角より現はれたり。

人は人と爭ひ、國は國と戰ふ、權利と云ひ、國權と稱するもの、皆悉く自己胸中の慾火に非ざるなきか、國家の方針とする處は呑噬なり、個人の目的とする處は富貴榮達なり、而して其呑噬と富貴榮達の裏面は、性慾情火の燃ゆる所、都て之れを實現し得んとし、野卑なる肉身に向つて、多くの快樂を與へんと欲するが爲めなるのみ、是れ人類が再び野蠻の歴史を繰返さんとするの徑路にして、諸階級に於ける露西亞の國家思想が、最も明らかに、最も露骨に、之れを代表して餘あり、嗚呼人生！かの哲學者の渾身の智識を以て焦身するの人生は、しかく憐むべく、しかく悲しむべきものなるか、時間空間及び一切の萬有、此に至つて果して幾許の價値あるべきか、蓋しト翁の眞面目なる心胸は、如斯悲觀的社會觀を以て滿たされしや明なり、之れを以てか、彼は渾身の精力を此の消息裡に集注し、而して綜合し得たる觀察斷定の大精神は、實に私慾を以て成立したる現代の思潮と、之れに對抗すべき博愛平等の大主義な

りき。

彼思へらく、私慾は一切の罪惡の禍根なり、故に私慾なきの所は、讒誣中傷とあらゆる譎詐私鬪あることなし、而して神は私慾なきの愛なるを以て、玆に天上の平和郷を降下すべしと、嗚呼此間基教の感化與りて力ありと雖ども、若し他の方面より觀察する事あらば、是れ時代思想に反抗する、所謂時代に消極的感化を受けし一大勇健の大抱負なりと云はざるべからず、社會學者フエーバンクス曰く、社會心意(又は時代精神)は、能く天才の功業を生み、天才は又社會心意を高尙なる將來に導く、而して此の天才は即ち是れ豫言者なりと、若しトルストイにして現代の精神に憤激し、之れが消極的感化を受けしものなりとすれば、實に彼は十九世紀より廿世紀に亘る、社會より生れ、社會を導く、かの雄渾偉大なる秋霜的豫言者なりと云ふべきなり、諺に云へる豫言者は鄕土に容れられずとの言は、今トルストイの現狀と相一致し、今に於て吾人の感想を惹起すること窮りなし。

實に彼が理想は、如斯にして社會の木鐸となり、鼓角となり、放恣勃戾なる社會人類の鼓膜に響き渡れり、而して其排結婚說の如きも、亦此の大理想の推理に異ならざりしなり、故に苟も之れに對するもの、少くとも崇敬畏虔の念を以て、此詩的理想を嘆唱せざるべからず、然れども飜つて其全局を考ふれば、常に詩的理想の完全なる能はざると同じく、又徹頭徹尾讃美の謳歌を與ふべからざるものあり、視よ、彼が博愛の大精神を宣傳するにもかゝはらず、先登第一歩に於て、人生の最大至難なる非結婚說を公にする如き、是れトルストイ翁自身に於ける、一大矛盾に非ずして何ぞ、蓋し情的發動にかゝる詩的理想は、時に襤褸と朦朧

を寛容するの僻あり、然り而して、更らに吾人の怪訝に堪えざるは、彼の見地が、常に抽象的理想によりて、社會學的地盤に據らざること是れなり、彼は曰く、人は神の國を地上に出現すべきの理想を有せざるべからず、故に清淨獨身の生活を保つは、之れ人の向上的精神の義務なりと、思ふに之れ社會學的地盤を有せざる立論ならざるか、夫れ神の國と雖ども、何も人類が集合團體を組織するの處、必ずや茲に社會あらずんばあらず、之れを以てか、若し彼が如斯の社會を實現するには、少くとも彼は如斯一躍的進歩の外、更に漸々的進捗の途を講ぜざるべからず、偉人は偉大なり、凡人は常に平凡たるを免れず、而して世に所謂偉人なる者は千載にして一人を得べきものなりとすれば、急激なる排結婚說を唱ふるの以前、彼等をして茲に至るの手段を考ふべきの要あるや、急ならざるべからず、既に斷崖千仭の高きに立つトルストイには、排結婚は理想に至るの一手段と云ふべきも、坦々たる平地、或は百尺の深淵の底にある凡人には、排結婚に至るまでに、更らに幾多の手段を要し、理想は更らに更らに幽遠渺々の彼方にあらざるべからず、故に彼の立論は、偉大なる個人を立脚地としたる者にして、社會を根底にするを忘れしものと云ふべく、同時に彼は、一個人にて神の國を地上に降下し得べしとの結論を得ざるべからず、是れ豈に個人は即ち社會なりとの謬斷に陷入し來りれる議論と云はざるべけんや、是れ予が敢て尊敬するトルストイ翁に聞かんと欲する所也。

遮莫、彼が資性は詩人なり、豫言者なり、而して同時に革命的狂熱宗教家あり、一言以て蔽へば、カーライルの所謂ヒーローにしてグレートマンな

るものなり、信念と狂熱と眞面目とを以て、然も内に無限の感想と涙とを包含す、此に於てか其見地や猛烈なり、熱誠なり、直覺して到達せる理想の前には、些の矛盾と誤謬あるとを厭はざるなり、吾人切に思ふ、現代の腐敗せる濁流に反抗するの彼は、蓋し思想と行爲とを以て、醉へる世人を攪醒する、かの嚴冬の凘風の如きものなりと、嗚呼吾人は寧ろ彼が誤謬と矛盾とを捨てゝ、彼の讃美者として其偉大をたゝえ、貪慾なる人の子の、彼の前に慚愧に堪えざるを待たん哉。

（完）



美婦は人の目を悦ばしめ賢婦は人の心を喜ばしむ　（ナポレオン）



垣間見

井上雲巖

（第四回）

眼に涙を浮べたる友は堅く我が手を握つて、

「君、待つてたよ。」

親類の少い故でもあらう、が斯くまで我に依賴するかと思ふと、同情の念一時に燃えて、我も涙の差含むを禁じ得なかつた。兩人はそのまゝ默して

小說

病室へ入つた。

熱が高いのか、細君は息苦しさうに眠つて居る友は靜かに坐つて氣遣はしげに容態を窺ひながら、昨日の雨天にも拘はらず、細君は舊き友のそが夫なる人と共に米國へ旅立つを、新橋の停車場まで送つたのが原因で、歸宅後夜に入つてから烈しく熱發して、今仍四十度近い趣を語つて、心もとなさに堪へぬ樣である。

世にも寂しきは我が友の生活なるかな。多くもあらぬ親類縁者は遠く國を隔て、心を語る友とては我一人、斯くも寂しき生活を營みつゝも、尙よく浮世の激浪と戰ひ得るは、內に温情玉の如き細君のあるからである、一日の辛勞も美しき細君の前には忘れらるゝのであらう、一週の疲勞も柔しき細君の手には消されるのであらう、而かも細君をして斯く美しく柔しからしむるものは、また彼の美しく柔しき心からであらう、實に彼の生命は細君にして、細君の生命は彼である、一を缺けば他もまた缺くるのである、然り今その一は常を失ふたのである、他の一たるもの、何ぞ全きを得べき、苦悶輾々、彼の憂愁は豫想の外である、我は到底慰むべき辭を見出すことは出來ない、たゞ一刻も速くこの憂愁の種子を除いてやるより外に仕方がない。然るに彼の我に依賴するの厚き、自分は心弱くてこの苦悶に打勝つことが出來ぬから、どうか萬事を指揮して呉れと賴むのである、賴まれずとも固よりその分、我は細君の全快するまで看護の任に當らうと決心して、待たせて置いた車夫に、この由を我家に傳へて、且我が着換等を持來るべく命じた。掌を合せて拜む友の喜びは、顏を側向けずには居られなかつた。

昨夜から眠らないのと、過度に心配したのとで

友の顔色の不尠惡いのを見出した我は、新に病人が出來てはと、無理やりに休息させて了つた。朝日が隣家の屋根を外れて障子に映ずので、部屋の中がパッと明くなつた。平素は向眞に見る機會が少ないので、左程にも思はなかつたが、今は眠れる彼より外に人の居ないので自然と彼の面に注ぐ我が視線は、始めて彼の眞の美人であることを認めた。目鼻口元の管は云はずもがな、宛も春の海の如き温容は世にも稀なる美人、高襟文士に見せたらエンゼルと叫ぶであらう。

斯る美しき縹緻と柔しき心を持ち而して夫として待くは、これまた得易からざる温厚の君子、嗚呼何たる好匹ぞや。

我は羨望の念を以て、暫時恍惚として眺めたがまたしても胸に浮ぶは彼の秘密。

春の如き家庭を作るこの細君にして、一點疾しかるべき秘密を藏すとは、實に口惜しきことの限りである、偕老を契り終生を寄せる夫に隱す秘密とは抑も何であらう、不義を外にしては夫に秘すべきものはない筈である、まして斯くも愛情深き兩人の中には。併しこの細君に限つては不義などと云ふ、口にするも忌まはしきことのあらうとも思へない。

我は又痛く思ひ亂れた。九時でもあらうか、柱時計の打つ音に眼を覺まして、我が夫ならぬ我の居るに驚いた、彼は正座する積りであつたか、身體を起しかけるので、我は強ゐてこれを止めて平臥せしめた、彼はまた我とのみ對座するときの嚴格の色を浮べるのである、我は彼の心を騷がすことの病氣の爲めに不得策なることを考えたので、力めて靜かなる口調をもつて、今より我が看護の任に當る故に、心安く養生せらるゝ樣にと告げた

彼は我が言葉を如何に聞たのか、怪しくも顏に紅を潮して、伏向いたまゝ暫時無言であつたが、軈て遽に幾度か感謝の辭を繰返して今までの態度に似ず、我を見詰むる彼の顏は如何にも嬉しげにまた懐しげにあつた。或は心機の一轉して、我に對する疑惧の念を去つたのではあるまいか。

我は彼の唇の乾いて居るに氣がついて枕邊の「レモナーデ」を與へると、彼は感謝を以て甘さうに飲み盡して、凝然と思ひ入つた樣に我が顏を見詰めた。

（第五回）

到底役には立つまじと思つた友も、今は仲々に一期の浮沈と決心してか、非常なる勇氣と滿腔の愛とを以て看護に從事した、我はこの情熱のみにても必ず細君は全快するであらうと信じたが、病勢は次第に募つて、熱の烈しい爲め甚しく衰弱を來した。

熱が高いから心臟を冒さねばよいがと、小首を傾けた醫師の杞憂は不幸にも事實に顯れて素人の我が握つて見ても、脈搏は確かに四十以下に減じて居る。夕景醫師が來て一通診察をして眉を顰めたが、歸りがけに玄關まで送つた我に、最早や望のない由を告げた。

嗚呼、我等の苦心も水泡に歸したのである、彼の運命は最早や限られて了つた、友は最愛の妻を失はねばならぬ、我は友の愁嘆を分たねばならぬ吁、敢なきは人の運命よ。

看護らで休むべきではないが、友の落膽失望を見るに忍びないので、何氣なく病室へ歸つた。以外にも友は喜の色を以て我を迎へて、細君は大きに樂になつて、熱も少し下つた樣であると、頻りに喜んで居るのである、成程顏の赤味も少しは褪

めた樣である、が、これは燈火の消える前にパッと明くなるそれではあるまいか、と思ふと、友の元氣づいたのが氣の毒で堪まらぬ、我は到底醫師の言を傳へる勇氣は出ない。

友は少しく安心したので、二晩も眠らなかつた疲勞が一時に出たと見えて、少しの間看護を代つて呉れと頼んだ。胸一ぱいになつた我は無言に首肯いて、部屋を出て行く友の後姿を見送つた眼を、軈て細君の窶れた顏に轉じた。

彼は今すや〳〵と眠入つて居た樣であつたが、ぱつちり眼を開いて室内を見回はして、軈て靜かに我が名を呼んだ。この時の彼の顏は如何にも艶艶しく輝いて、音聲さへ確かなので、或は眞實に快いので、先刻醫師の言つたのは誤診ではあるまいかとまで疑つた。何故か彼はさつと顏に紅葉して、再び我が名を呼びながら、少し起き上がらうとしたが、身躰が自由にならないのでまた元の樣になつて、幾度か言ひ淀んだ後、終に決心したらしく、

「妾はもう到底全快りません、貴郞と夫の手厚い御介抱を戴いて死ぬのですから、何も思ひ遺すことはない筈ですが、妾は何うしても夫に明すことの出來ない秘密をもつて居りますので、終始自分で自分を苦めて、死ぬにも氣がゝりで死にきれません。この苦みを救つて樂に彼の世とやらへ行ける樣にして戴くには、今は貴郞より外にはありませんから、どうぞ今死ぬ妾へのお慈悲に、心置きなく死ねます樣に頼まれては下さいますまいか」

ホット一息ついて、口濕したげに見えるので我は「レモナーデ」のコップを與へて、さてはと思つたのであるが、今は仲々に悲しさ痛しさに同情の念に耐え兼ねて、

「ハイ、引受けましやう、何なりとも」我知らず前に乗り出せば、「レモナーデ」を一口飲んで、さも安心したらしく、いと靜かに語り出した。

（第六回）

果然彼は秘密を抱く女性であつた、彼の語つた要點を摘めば斯ふである。

我が友に嫁ぐ前未だ高等女學校に居る時分、彼はある青年と戀を交はしたいである。併しそれは純清潔白なる神聖の戀で、決して野鄙なる肉交ではなかつた。然るに彼等兩人は所謂内氣な性質で互の兩親に打明る勇氣がなかつたので、婚姻の近づいた彼は兩親より婚家を指定された、それが今の我が友小山武之助である。彼は實に青春燃ゆるが如き戀を破られたのである、多恨の涙は四の袂に餘つたのであるが、彼等の戀は比較的東洋的で

あつて、世間多數の少年少女の如く放縱ではなかつたので、父母の命としあれば何事をも甘んずる彼等は、潔く相分れて互の父母の心を安んじたのである。併しそれは、戀の度の低いのでもなくまた所謂自暴自棄と云ふのでもない、彼等は確かに一つの理想を抱いて居るのである、別れに臨んで交はした辭は、これを証明して居る。

互の戀は決して奪ふべからざるものである、併し運命はこれが圓熟を許さない、今後はたゞ過ぎ去つた戀を樂むのみで、之が爲めに「各」が將來に於て、運命に依つて定められたる偶匹に對して、天賦の愛を傷つくることは許さない、新しき運命の命ずる夫なり妻なりに對しては、更に滿腔の愛情を捧ぐべきである。

如何にも立派なる理想、彼はこの理想をもつて我が友に嫁いだのである、夫たるものに明かすも

毫も耻づべくまた疚しかるべき點はない、併し東洋的なる彼は同じくこの立派なる理想をも告白するの勇を缺いで、逡巡の中途にその機を逸して了つた爲め、あはれ立派なる理想も終に秘密として封じ去られて、彼は終生憂ある身となつて了つた然るに彼の憂愁は一段を加へることゝなつた、彼は我の今住む家より轉ずる際、人目の繁かつた爲め、彼が唯一の戀の筐として捨てるに忍びないで床の間の天井裏に秘して置いた、昔の戀人よりの文殼を取り出す機會を得なかつたので、そのまゝ遺留して引移つて了つたのである。我が家を垣間見したもこれが爲めで、また我が夫の友人であると知れてからは、回收の手段も全く絕えて、而も何時我が爲めに發見せらるゝやも知れず、もし既に發見せられたりとすれば、何時我の口から漏らさるゝやも知れないので、それ故彼は常に我に對して疑懼の念を抱いたのである。然るに漸く我の人となりを知りし彼は、我が看護の任に當らむとの一語に疑懼の念を一掃し而かも死の既に近く、秘密の終に回收すべからざるを悟つて、今は反つて我に依賴するより外に手段の施すべきなく、且我に依賴することの安全なるを信じて、斯くは我に打明けたのである。

彼は一息ついて尙我に疑ふ所あらば文殼を檢しても苦しくないが、もし疑ふ所なくば文殼は夫に知れぬ樣に棺の中へ納めて吳れ、これとても敢て夫に知れるのを恐れるのではないが、溫かりし夫の愛に對して、今更不快の念を起させるに忍びない、願くばこのまゝ秘密の中に封じて了つて、假令自分は今死ぬとも、永く夫が胸中に妻となつて、花晨月夕永く夫の慰安を計りたいからである。と云ふ旨を述べて、且幾度か我を疑ひし罪を謝した。

語り終つて彼は非常に疲れた樣であつたが、我の快諾に安心したものと見えて、心地よげに寢入つた。が少時間の快氣は果然燈火のそれであつた。

花を散らす夜半の嵐颯と吹く時、あはれ無常、花の如き細君は眠つて了つた。

友い落膽、細君の蘇生せざるよりは、慰藉することは出來ない。

宿秘の疑團は解けた。友に對する我の義務として、一應は文殼を檢すべきであつたかもしれぬが、我はこの上を疑ふ勇氣を有たない、我はたゞ遺言を果したのである。

（をはり）



おどろ内儀は久しからず

（四 誌）[illegible]

おあさ

天聲

（二）

三日四日は無邪氣き遊びに暮るゝも早く、何時か七日も昨日となりし八日の朝まだき、燕口抱へて寺通ひの路すがら、江戸の事あり、水戸浪人、十何人かゞ云々との取沙汰、近傍の人の言の葉に不圖洩れ聞きて從容ず、寺に行けば毎時に變らず、わや〳〵と此處に一團、彼處に一組、横なでの袖まくしあげて相撲とるあれば、太筆たつぷりと墨つけて誰かの頰にと覘ふあり、八口釘にかけて、びり〳〵切れし袖の糸屑、指先に引張出して見る横町の白雲小僧、俺の辨當箱長さんが打碎したと、武者振付いて喧嘩する門前の鼻たらし、さては、眞黒に彩色された机の角に、耳打潰して澁い顏す

る腕白盛、お淺の來しを見て忽ち駈寄りお淺さん江戸で御大老さまが首級斬られた、あんたのお父樣も斬つた方の仲間だとよ、强いあゑらいなあと、振の袂を我も〳〵と捉へながら聲喧ましう騷ぎたつに、他事ならねば胸ぎつくり、心悸はげしく言葉は出でず、茫然と立盡せしまゝ衆童の顔視つめしが、やがて師の許に行きて心地あしければお暇頂きますと辭儀するも遽しく、寺の門まろぶやうに出でゝ倩々思へば、今朝の噂さては嘘にてはあらざりし、歸つて訊かんと菱屋の門口、勘兵衞店頭にあつて、如何かなさいましたかとの問ひ、氣分惡しきと答へしまゝ室に入りつ、心配顔に入來し女房の顔見るより、江戸にて御大老さま水戸浪人に殺されしとか、眞實で御ざんせうかと問へば、女房の顔色少し動きて、其樣なる、噂は聞きましたれど、まさか天下の御大老樣が御首取られう筈もなし、大方なんぞの間違ひでがな御ざいませうと氣もなき風情に言うてのくる言葉の末は靜かに澄めどもすまぬ心は色にも出でゝ不審晴れやらずかさねて勘兵衞に事實を糺せば、何の其樣ことが御ざりませう、世の中が騷がしいので虚説もさま〴〵傳はりますと、これはまた理もなく打消すに、敏き心にさては愈事は眞實にて、夫婦にて我に秘すよと測れば、父樣は其浪人のうちに極りぬ、さあらば御身の上覺束なし、若しもの事あらば御顔見ること叶はず、一日なり半日なり、お側に居ての上ならば、かね〴〵の仰せ、我身も武士の娘なれば、嘆きの中にも思ひ殘すこともなかるべけれど、あゝ何うしたらばたつた一見、逢ひたし、お目にかゝりたし、寧そ是より江戸に行きてお尋ね申すが分別かも知れず、聞けば江戸へは三十餘里、南の方が其れとばかり、何の道とも

さだかならねど、聞いて行かば知れぬ筈もあるまじ、よしよし天神さまへお詣りして、祈りて來んと乙女心、程遠からぬ土產神、森の社と字せる祠を指して、夕暮の門そつと出でぬ。

白木造りの拜殿、小さけれど厳めしく神々しき社前に跪き、祈りはてゝ歸らんとする石段の下に、年は我より三つ四つも幼き小娘、母と見ゆる婦人に伴れられ、曳れる樣になりて上り來りぬ、白木綿に西國巡禮と記せし上衣、雨泥に汚れ、小さき脚に同じ布の脚絆、足袋の指頭綻々になりて、草鞋其れに穿きしめしありさま、菅笠背にして杖持つ母に縋り、疲れたから休まうと哀れさ誘れかなしき聲に、お澄他事とは思はず、深くも強くも胸を打たれて、暫時は我にもあらで佇立しが、漸て心付くと均しく、急ぎ菱屋に歸りて見ふば、店頭に誰も居ぬは何うしたものと、四邊見廻しながら室に通りて、崩るゝ如く疊に座りぬ。

黃昏の色濃く、障子暗うなりて晚餐もすみ、勘兵衛眼鏡越しに帳面繰りひろげ、若者は其か側近く算盤拵へて、の出入勘定、女房は女のやさしく京山の合卷物膝にして納戶に座り、店頭には丁稚三人、何をか言ひ罵しりつゝ動搖き居たり。

江戶に飛ぶ心を僅かに鎮めて、さまざまに身の振方を思ひ廻せば、今日森の社にちらと見かけし巡禮の姿羨ましく、歳はも行かぬ幼き身すらあの樣に旅するものを、況して我身は今年十四、一念を五體に籠めてふるひたちなば、たとへ山なりとも海なりとも、行きて行かれぬことのあるべき、明朝は、人知れず此家を出でゝ吾妻へ行くべし、さなりさなりと思ひ決むれば、磐石の精神たしかに、やをら身を起して針箱取出し、簞笥より白木綿の布片引出してあれこれと撰りし末、見事作られし

は脚絆、絎紐さへあるべき處の手際よく附け得たる早速の働き、年にはませし準備のくさ〴〵、古錦襴の護袋、母が紀念の懐劍はもとより、注意し程のものは殘る方なく肌身につけ、假名文字ながら家出の趣、云々と記し遺し、馴れぬ旅路の啓行ち、思はず時をあだに過して、寢られぬ夢を結びもあへぬに、起き出で丶見れば日は早高し、遲くなりぬと躊躇ふうち、夫婦もいつか起出でたれば今は詮方なく、其ま丶例に變らず朝飯をすまし、小さき燕口小脇に擁へ、昨日休みましたれば今朝は早くと、ある程の智慧に嘘を言ひて、小父さま小母さま、行て參ります。





文林

初冬　東久世通禧

冬きぬといふよりやかて吹そむる
　ひ丶やかはらのあらし烈しも

杜紅葉　高崎正風

陰しけみ露もしくれももらさらむ
　こすゑはかりの杜のもみちは

折菊　長岡護美

つゆの上にやとれる月の影なから
　手をりてかさすにはのしら菊

文林

朝紅葉　長谷信成

あさつく日にほふ梢のくれなゐは
つゆにぬるての紅葉なるらむ

漁村時雨　宮地嚴夫

藻鹽やくけふりかすかに日は暮て
うらわさひしく時雨ふるなり

秋曉雨　阪正臣

こゝろさす山の松たけたけすきむ
此あかつきもまたあめのおと

松中樂翁　小杉榲邨

たそかれの宿に眺むるつきに匂ひ
花にかをれるあはれことのは

愛菊　植松有經

まかきにも庭にもあまた匂へとも
山路のきくのなつかしきかな

山家鳥　大口鯛二

啄木鳥のほかに音なふものもなき
わかしはの戸の靜かなるかな

鷄　遠山英一

はきよせし賤か軒はのちりつかを
掻ちらしてもあさるにはとり

寐さめに虫をきく　近衛貞子

旅きぬをかつきていねし秋の夜に
さむく聞ゆるむしのこゑかな

駒迎　柳原愛子

玉しきのにはにひかるゝ嬉しさに
こまもいさみて道いそくらむ

遠樹紅　南郷柳子

いり日さす遠山もみちつねよりも
くれなゐふかく見えわたる哉

女學校　小池道子

進みゆくまなひのまとの姫小まつ

ねかふは千代のみさをなり鳬

菊盃枝　松平健子

置あまるつゆさへかをる心ちせり
まかきのきくの枝たはむまて

自轉車　常磐井文子

獨してはやくめくらすをくるまは
こゝろのかちそかなめ也ける

聞虫　大谷籌子

さまゝゝの虫の音しけく聞ゆなり
月かけさむきにはのしはふに

玉　中村禮子

琢きてもひかりなき身を如何せむ
やみにかゝやく玉もあるよを

時雨頻　小川直子

村しくれ西はなれぬとみしほとに
また北まとにおとつるゝなり

月前時雨　土井榮子

月かけにみれとも人はなかりけり
にはの落葉にしくれおとして

海邊月　下田春興

こゆるきのいその松風音ふけて
月にしつまるおきつしら浪



○秋蝶　敏子

露のやどりとなりはてし
萩の袖がきしたひきて
蝶はなにをか戀ふるらん
吹きくろの秋の夕かぜに
つばさもしをれ枯れはてし
尾花のすゑにやどりして
春のゆめをやむすぶらん
しろき小さき蝶一羽

○小督局　　下田春興

それきゝて月もすみけむ。それきゝて虫もなきけむ。ちりの世をさがの丶奥に。かきなでしつくし琴。はやかきなでの心ならねば。月のごとそらにすみけむ。虫のごとあはれやひきし。今もなほそこしおもへば。そでぞつゆけき。



○山家獨吟　　笠木しづ子

思ひねの夢おどろかしふるあめに　誰なうらみのそでしぼるらむ

白露にやつるゝくさのとこにわび　恨むかあきなむしのこゑ〳〵

あらし吹く峯のうき雲たちさわぎ　あしもみだれてゆく時雨かな



敎の庭

十一月五日題

○谷落葉

天　肥後國菊池郡城北村　佐々小琴子

木からしにもみちちりしくたにかは　にしきのなみそたちさわきける

評曰、初句より結句まで語勢碎けずしてよくとゝのひたり

地　麻布區櫻田町二番地　山村くら子

ましらなく聲もきこえてたにかけの　木こりかいほにもみち散りしく

評曰、幽谷のさまよみ得たりといふべし

人

神奈川縣川崎町 田邊房子

さえ渡るつきもやとりてたにかはに
もみちちる夜のさむくも有る哉

評曰、實景さもありなむ

甲之部

筑後 宮崎しげ子

ふく風にわらそひかねしもみちはに
せかれてよとむたにかはのみつ

肥後 千知波橘子

山かせに木すゑのもみちちりしきて
こけむすたにもいろにいづらん

東京 名木山勝子

さをしかの鳴くこゑとほき夕まくれ
たにのおち葉にかせわたるなり

長崎 八尾いへ子

ひかりさへうとき谷まによのあきの
あはれもふかくつもるもみちは

東京 山本梓子

もみちはを下ゆくみつにまかせしと
しはしとゝめしたにのかけはし

東京 北島功子

谷川の清きなかれをせきとめて
いやちりしけるみねの紅葉

大阪 大阪谷信子

行あきはとゝめさりけりあふさかの
せきのたに間につもるもみち葉

埼玉 横田音羽子

吹すさふみねのあらしにはら〱と
このはちりくるたにの下いは

東京 戸塚てつ子

杣にんのかよひしあともたえ〱に
もみちちりしく谷のしたみち

大阪 桝田登子

秋の庭

こからしの風もいろあるこゝちして
もみちにうつむたにのしたみち　三河　服部萬子

むすひてもひきとゝめは帶とみる
ほそたにかはのみつのもみちは　三河　早川種子

なかれゆく紅葉のたにのかはみつは
とゝめまほしきあきのいろなる

乙之部

雨とふる木の葉にのきのそらはれて
いよ〳〵さむしたにのしたいほ　三河　小野田信子

山かつのゆきゝのみちもうつむまで
たにまのもみちちりはてにけり　東京　牛山素子

立田ひめみそやさらせるくれなゐの
にしきなかるゝたにのしたみつ　東京　敷島うた子

山のはのもみちのにしきちりしきて
ふまゝくをしきたにのほそみち　東京　牧　銀子

ふく風にみれのこのはのちりつみて
たにのましみつせきとめにけり　和歌山　長尾小蝶子

散る花とみまかふはかりもみちはの
かせにみたるゝたにのしたみち　靜岡　夏目松江子

あらしふく峰の木の葉にうつもれて
たにまのしみつおとそかれゆく　東京　椎野ぬき子

みやまへはもみちしぬらん谷かはも
かせのまに〳〵にしきなかるゝ　東京　椎野清子

木枯のかせふきあれてしかのすむ
たにまにつもろみれのもみち葉　長野　松澤まつ子

あさ夕にし水くみにしたにかけの
みちはこのはにうつもれにけり　京都　坪内りき子

風すさふ木の葉のあめにたにかはの
あやとろなみもにしきおりけり　茨城　内田さた子

おちたきつさかまく水にちろもみち
見のおもしろきたにのしたみち　茨城　荒野たに子

たに渡ろましらのこゑもきこゑきて
やましたかせにこの葉ちろなり　横濱　山下とめ子

此ころのやまのあらしやいかならん
もみちなかれぬたにかはもなし　筑後　鏡山増代子

ふきすさふ峰のあらしにこのころは
たになうつめてちろ木のはかな　山口　村上操子

山かせに木々のもみちはちりしきて
たにのほそみちこゑそわつらふ　和泉　福原蓋子

たにかはゝ散る紅葉はにせかれつゝ
日ことにほそるみつのおとかな　廣島　衣笠澄子

ふきおろすみれのあらしに谷の月を
うつむはかりにちろ木の葉かな　肥後　千知波鶴生子

高根よりおろす木の葉のちりしきて
たにのかけはしうつもれにけり　札幌　山田靜子

ふく風に木々の木の葉はちりはてゝ　札幌　山田嬌美子

こがらしに峰のもみち葉ちりうきて　たに間にさむきふゆの夜のつき　肥後　坂本美響子

木がらしの吹のまに〳〵たにみつも　たにまのみつもにしきとそ見る　栃木　青木たま子

山かせのふきのまに〳〵さそはれて　おとせぬまてにうつむもみちは　伊豫　緣友子

たに川にみかさまらてふるあめは　たにふところにちる木の葉かな　三河　本多きさ子

たにの戸の鹿のしとれもきのふけふ　しくれにまかふ木の葉なりけり　甲府　上田なほ子

山かせのふきのまに〳〵あはれにも　にしきとなりぬちれるもみちに　伊豫　緣元子

木からしの風にみたるゝもみち葉は　たにそこふかくちる木の葉かな　肥後　德永多瑠子

小ぐらやま御幸は絕てふくかせに　やかてたにまのにしきなりけり　長州　岩田章子

きくもみちあさりくらして谷かけの　もみち散りしくたにのしたいほ　東京　北岡文子

落葉かく子らもかよはぬたにかけは　おち葉しきれにひと夜あかさむ　東京　北岡美代子

山おろしふきまく木々のもみちはゝ　ちりしくにしきたれかあつらん　靑森　柿崎秀子

とし月はこの葉とともにたにかはの　やとすたにまにあきはこもれり　大阪　大阪谷新子

うき事はおち葉とともにつもりきて　なかれてはやくふゆはきにけり　大阪　伊勢村花子

やさけひのむかしおほゐて風さそふ　あはれもふかきたにかけのいほ　大阪　伊勢村春子

苔ふかきたにゝちりしくもみちはゝ　いちのたに間にちるこの葉かな　和歌山　瀨戶榮子

ふく風にみれのもみちはちりそめて　あらしのゝこすにしきとそみる　神田　積山鐵子

ちりつもる木の葉のいつかせきとめて　にしきおりなすたにかはのみつ　埼玉　前野壽賀子

そまひともかよはぬやまの谷かけに　おともかれゆくたにかはのみつ　香川　鎌田光惠子

ふきおろすみれのあらしにたに川の　つもるおち葉やいく重なるらん　上總　高石登代子

たにかはのいはせく水もきのふけふ　みつも木の葉に見ねすなりぬる　東京　三好珍子

ほのくらき谷ももみちのちりしきて　おちはのあめにおとゆつりつゝ　東京　永井さき子

ちりつもる木葉にたにのしたいほと　ひかけまはゆきこゝちこそすれ　三河　三宅中枝子

あめとふる日かすつもりてたに川の　うもるゝみ豆のこゝろほそしや　三河　河合ぬひ子

たにふかみしくるゝ空とわかぬまに　なかれぬみれば木の葉なりけり　東京　片山あや子

山おろしふきすさみたるたにかはの　まつふりくるはもみちなりけり　東京　平尾あさ子

風にちる木々のこの葉にうつもれて　みつはおちはのしたくゝるなり　大和　澤田よし子

いやかうへに散りつもりたる紅葉はの　みちわけかたきたにのゆふくれ　美濃　吉村せい子

したなかるゝたにかはのみつ

ふゆ深みおつる木の葉のしけゝれは　ひことにほそるたにのしたみづ　伊豫　小田操子

峯にてるもみちはかせにはらはれて　さらにいろあるたにのかはなみ　東京　椎野秀子

ふく風にみねのもみちはちりはてゝ　にしきなかるゝたにかはのみつ　東京　椎野鋭子

山ふかくこすゑはなれしもみちはを　さそひきにけりたにかはのみつ　東京　椎野薫子

木のはちる音よりほかにおともなし　にしきふみゆくたにのしたみち　尾張　後藤のふ子

おのつからうつろひはてゝ紅ち葉の　ちりしたにまそにしきしきける　肥後　坂本登子

木からしにもみち葉ちりて谷みつは　そこともわかすなりにけるかな　肥後　佐藤直子

もみちはの雨とふりきてたにかはに　みなきるものはにしきなりけり　筑後　武田龜子

ふくかせに峯のもみちのちりしきて　たにはにしきにうつもれにけり　山口　田村多豆子

なか〱にもみちのにしき散しきて　たにのひかりとなりにけるかな　松山　上原のふ子

おく山のたにゝちりしくもみちはゝ　うかふときなくくちぬへきかな　伊勢　池田梅子

谷かはにしからみかけてうかふめり　今朝木からしのさそふもみち葉　肥後　佐々有鄰子

ちるか上にちりかさなりてもみち葉の　うへなかるゝたにのしたみつ　肥後　吉富彦子

歌の庭

落葉こそふかくなりけめこのころは　たにのしたみつおとたゑにけり　三河　永井さい子

こけむせるたにには落葉にうつもれぬ　よはのあらしやはけしかりけん　肥後　徳永雪枝子

このころはおちはか上におちはして　みたにかくれはかくひとそなき　肥後　志方圓子

ふみなれしその山かつもまよふらむ　このはちりしくたにのほそみち　肥後　徳永下枝子

ふきおろす峯のあらしにおちはして　たにのなかはもう川もれにけり　肥後　坂本たけ子

かせさむきふもとの谷のゆふくれに　おちはかく子のあはれなるかな　肥後　板井みは子

風たちてちりしもみちもたにかけに　にしきのいろののころたのしさ　肥後　徳永廣子

よもすからさわきし風のおとたえて　おちばによとむたにかはのみつ　肥後　徳永萬壽子

もみち葉の散りつもりたるたに川は　なかるゝみつもいろかはりけり　長崎　内藤美與子

いほひともなつむはかりになりに鳧　木のはちりしくたにかはのみつ　埼玉　横田秋子

つゆしもに四方の山〱いろつきて　たにのなかれにちるこの葉かな　長野　依田たつ子

あきはてゝみ山おろしにちりつみし　たにのおちはにしもそおきそふ　長野　依田靜子

ふきすさふ峰のあらしにちりつみて　いろさへふかきたにのもみち葉　埼玉　前野ふさ子

ひかりなき谷の戸ほそももみちはの　但馬　田尻保代子

ちりておとなふやまかせのむた
いく秋かふかくちりつむもみち葉に
たにはいよ／＼あさくなりゆく　　紅於女

紅葉たよりを故郷へ告げやる文

長門萩奥玉江　岩田章子

千代しめてと頼みし、桓根の白菊もうつろひ果て、板庇おとなふ時雨の音訛しき此頃、祖母樣には、如何渡らせ給ふらん。冬も早き越の風の、御身煩はす事どもおはさずや。いつも、旅にさすらひ侍る身は、萬につけて故鄕のみ忍ばるゝになん。今日しも、一日を、友と瀧見の不動へ、紅葉愛で申候。町より一里半、白水谿の山懷にて、つづら折なる谷道を挾める兩岸の紅葉は、此山より彼山と、進むまに／＼、漢織、呉織の工いよゝ細かく、不動に至り申候ては、妾が綾なき筆のいかで／＼。錦と燃ゆる紅葉の間に、天より落つる白銀の河。瀧つ波、玉と碎くる岩壺に、彩れるごと舞ふ落葉。蔦は老松の幹に時ならぬ花をかざし、小鳥は、危うげる谷を覗ける小枝に囀り、同れ皆うた人の、筆拋つ景色のみに候ひき。あはれ、故鄕の、諏訪の湖取り圍む花紅葉やいかなに、鄕ノ岡は、夕映に、そが優姿、水鏡にうつすやらん。近き御便りに、祖父樣の御庵成りしと承りしが、定めし、夕々、朝ぎよめせぬ紅葉の莚に、例の檢校召して、平家聞きますなるべし。封じ込み候ひし二葉三葉は、今日の山づと、もし御酒熔むる枝にも雜はらば、妾のみならじ、紅葉も、嘸や本意に覺え侍らなむ。あなかしこ。

評、才華煥發して、甚だ詩趣に富む。優美なる好文章といふべし

柳櫻をこきまぜし、春の錦にも色まさりたらむ。四方の梢の、きのふけふ、折々そゝぐむらしぐれに、もよふされて、飛ぶとりのあすかの山の麓わたり、名におふ川のたきのしら糸も、立田姫の染かへたりとなん。京わらはへのいひつとふるに、みやびをきそふ都人の、林間に酒あたゝむる用意など、そゞろに心あくがるゝを、きゝわたるにも、昔かざしゝ故郷のもみぢの色もなつかしう、承はらまほしさに、まつこなたのけしきことつてまつりてとなむ、花のつかひは、山里よりとこそ、ききおよびしか、これはしも、きてかへる、にしきならねど、故郷に、つくるもみぢの色も見えなむ。あやしき鳥のあともおは、折ふしごとの御心なくさに、はたこなたの空もおしはからひたまへ。あなかしこ。

秋の[illegible]

東京市赤坂區青山北町三丁目六十八番地　山本梓子

評、簡潔にして善く盡せり。

東京本郷丸山福山十　名木山勝子

やう〳〵夜寒になるまゝに、都大路をよびあるく豆腐屋が聲も、野寺の鐘の音と共に、うら淋しう暮行く昨日今日、皆々樣にはいよゝみけしきうるはしうおはしまし、まづ〳〵御めで度存じ奉り候。されど流石に、按摩の聲悲しき霜夜などには、齡高き御二方の君、さては、いはけなき弟妹たち如何に。風や召させ給はぬなど、案じわづらひて、はたと、執れる筆をも投げすて候ひつ。清き月影に鳴行く雁の音を忍び申され候。叔母君が日頃愛でさせ給ひつる梅の下蔭はら〳〵と散りくるも、早色こき紅の葉に御坐候。何某の女王が春の花より匂ふと、口ずさび給ひ、もろこし人の、如月の花より紅なりと、歌ひましけんもむべ。まと此かたぞなか〳〵にさまさゝまに眺められ申候。都わ

たりには彼の瀧の川、はや天長節には、やう／＼色づきそめ候て、此次の日曜頃こそ、嘸やと思はれ申候。朝まだき有明の片破月戴きて、そゞろありきする公園のほとり、色こき葉の上に、白う霜ふりかゝりたる、こよなうめでたう、覺え申され候。銀杏の黄なる、松の色變へぬ、蔦楓の赤き、とり／＼に錦織りなす、是より後の山の姿よ。麓流るる水清らに、蔭映したるなども、げに、畫にもかゝまほしうなん。いかで／＼一日いとまおはさば、わりごふくべなどとゝのへさせ給ひて、小春日和の暖かさに、紅葉狩おぼしたち給ひなむや。知れる限り、道しるべ しまつらむほどに。あなかしこ。

評、題意に入らざる節もあれど、文章の老熟にして滑脱なるは最と感ずるに堪へたり

愛媛　綠　友　子

なつかしのふるさとにも、今日此頃は空さだめなく、しぐれ候ひつらん。此の地は最早木々の梢も、軒の蔦も、皆染めつくし、打わたす四方山は、さながら、にしきのとばりかけわたしたるが如く、からくれなゐに織りなせる美はしさは、中々に、描き水ぐきのあとには、え染め出ださずいと口惜しうこそ候へ。かゝるけはひなかぞいろの君と諸ともに、ながめなば、いかにうれしからんと、あくがれぬべきさまを見つゝ、唯一葉紅葉のたよりをのみかくなんかしこ。

評、巧みならねど、乙女心の天眞流露して、かざらぬところ却つてよし。

長崎　內藤美與子

秋更けて哀深うなりゆく此頃、如何に渡らせ給ふらん。嵐吹く夜の徒然に、去にし年、共に紅葉を狩くらしたる折の面白かりしな、今更思ひ出で侍るにつけて住侍る邊りは、其名聞えたる耶馬溪とて、岩山の景色得も言れず。さるに山姫の、露霜なたてぬきに織なせし錦は、一しほ趣を添へ、なかしさ言ん方なし　殊に世の塵も浮ばぬ里なれば、紅葉の匂ふ盛ともなりなんには、霧立夕暮は、海士のたく鹽風の烟とも見え、又日かげのきら／＼とさしいでたる朝は、空の海さへから紅になりて、人の外なる世の中に、いつか來にけんと怪まれぬると、承り侍るさ有なんと思ふは、此里の境は七里ばかりの道なれば、もろこしの阿房宮の古に、まさるばかりの繁き見處ありとなん。そは兎まれ角まれ、立田姫のぬさと手向ぬほどに、いざたまへ、さいつ年の遊びしくりかへし侍らん、ならせ給はゞ、雁の羽がきひとひら給ひれかし、待つとしきかばなど誦して、枕べのあかしかきたてゝものしつゝろになん。かしこ。

大阪　桝田益子

人めも草もと、ながめ侍らんも程なければ、いかにさう／＼しう

やおはすらん。後にも時雨るゝ空の、雨となり風となり、故里戀しう覺ゐ侍るな。ひと日人にそゝのかされて、嵯峨野に物しけるに、松な秋風ふくからに、小琴の音に通ひて古への片折妻戸も偲ばれ。小倉山は立田姫の心のまにまに染めつくして錦のとばり、張りたらんやうにて柳櫻の春のにしきも物かはと、思ふ斗りになん。諸共にと誘ひ參らせずして、異形の雁の列ならぬぞいと／＼恨みに侍る。紅葉の山のいつとしも、限り侍らねば、せめては作な思ふ、あかき心の色な、是の一葉にもふし侍るになん、御邊りの御庭のうるはしさに、たくらべては何でう事も、侍るまじう、おはすらんかし。いかで／＼秋山の峯のさ霧と共に立いでさせ給ひなんや、朝日の山にまうで給はゞ、夕河渡りおくりきこゆべくなんかしこ。

小倉山みねの紅葉になつかしき
　ふみにこもるこゝろ知らなん

長崎　八尾いへ子

吹風身にしみて虫の音もやゝ遠ざかり行此頃、平らかにおはすと承るなんこよなうめでたうこそ。色付し梢なあとに見て、惜しき秋なわかちまつりしは、一月二月かと思ひ玉ふるに、およびなれば、早一年も過ぎさりぬ。今年も如何なるいろにか匂ふらんと、いとゞ故郷の空のみうちあふがれ侍ぬ。されど此地は四ツの時、いづれも勝り劣りは侍らざれど、わけて秋のけしきの殊にまして妙なるに驚かれてなん。四方の山は紅葉葉ならぬはなきか中に、幾千機たてゝ織けん錦ぞと思はるゝ迄、見渡す限りあるは淡くあるは濃く染渡たる高尾山。よぢて平らかなる處より見下すは、紅葉谷といへるにて松杉の緑に立まじるくれなゐの色は、淋のくにに打つゞき、谷のくま／＼見ゐみかくれみ流るゝ水は、錦の流もて畫たる屏風のいきたる心地なんするは、中々筆の及ぶべうも侍らず。此年もやゝ色付侍れば、聞は見に如かずとも見ゐ侍りぬ、かれて思ひた立せ玉へつれば此折ならでいつかはある、母刀自なもそゝのかしいざさせ給へ、今より出立せ玉はゞ、來まさん頃は此山姫も心して一しほ色こき錦を織出し侍らん、故郷人の夢にも見ざる都の秋錦、必らずきても見給へかしとひたすられんじまいろにこなん、定め玉はゞ一ことの雁の便り玉ひれかし。あなかしこ

愛媛　絲元子

故郷のそら、眺めがちに、御父君御母上初め御身には、いかにおはしますか、定めて下草百草あとなく枯れはてし庭の面のけはひ、淋しうおぼすらん。されどもわたりにも色づきぬらん、木々の梢な、いかに見そなはし給ふや。さても此地はいくたびかめぐり來りし時雨に、こゝもかしこも梢はおしなべて紅葉し侍り、まいて名高き高雄山を見渡せば山姫のたくみなる手染めに、下しほの色も一しほふかく、げに錦の衣をまとふかとばかりに、覺ゆるうるはしさ、まことに御身に見せたく候。今日は日曜なればとて友の誰れ彼れと共に、紅葉狩りせんとて、ものしはべり、我袖さへてるまでに匂へる、楓柞櫨などの陰に、たのしく一日を暮し候。殊に夕日に色はへたるけはひは、たとへんにものもなく、なかなかに春の花も、及びがたかるべし。其の赤き二葉三葉をむしりとり、文にはさみて參らせはべれば、高雄の紅葉はこれなるよと居ながら御覽じたまへや。あまりのゆかしさに、こたびは此のたよりまでかしく。

肥後　佐々有鄰子

一筆申上たてまつり候。秋も深く成ゆき侍るに、御そろひうるはしく朝夕御くらしあそばされ候御事と遙にぞんじ上まゐらせ候。さてとや。此ころは時雨もをり／＼ふりそゝぎて、四方の黄葉日ましに染出て、立田姫の神の唐衣の錦もかくやあらん、禁色の織物の

赤に背に、其地一般の綾のにび染にもかよひて。みるめいとうつくしく候へば、小倉百首の歌の手向山もみぢのにしき神のまにまにと、菅原の大臣のふることなども思ひいでられ侍りて。故郷こひしく。そなたの空のみ、ながめられ侍りて、今を盛りにてりかはす紅葉を、一ひら紙に包みて、きこゆ上げ侍りぬ。あなかしこ。

長野　依田静子

山のなでしこさきみだれ、古寺の鐘は山々傳ひきていとさびしき時節と相成候處。承はれは、皆々樣がた御きげんよく御くらし遊ばされ、誠に目出度存じまゐらせ候。私事も無事に通學いたし居り候まゝ、御安心下され度願上候。秋の時節と申しながら、四方の山々いろづきて候へば、紅葉は立田川とて古より名所と稱へられ候へども碓井山はそれに次ぎて、誠によろしく御座候。私ども、友達と共に先日日曜に、遊びながら碓井山へ紅葉見に參り候へば、山は錦をきたる如くよろしくもみぢは風にさそはれてうちなびきおちくる葉は我袂にとびちりていと〳〵心地よく、たのしく歌なうたひつゝ、ながめおりしほどにいつしか日は西の山のはちかくなりしにうちおどろき、名ごり惜しくも歸宅いたし候。よく朝より紅葉の如き赤心にて、勉強いたし居り候。此のもみぢ二ツ三ツ差上申上候まゝ、御ひまさいの中におはさみおながめ下され候はゞ、いかに〳〵よろしき事と存じまゐらせ候。かしく



雑報



○行幸地沿道の行在所

天皇陛下には秋季大演習地行幸の爲め、九州に赴かせらるゝに付來十一月六日午前七時新橋御發車あらせられ同日は名古屋離宮に翌七日舞子有栖川宮御別邸に八日は山口縣長府毛利子爵邸に御駐輦あらせられ九日を以て熊本に御着輦遊ばさるゝ御都合なるやに洩れ承はる

○日本赤十字社大會

日本赤十字社は豫期の如く、廿三日、午前七時より上野公園四軒寺跡に於て其二十五年紀念祝典を

雜録

兼ね第十一回社員總會を擧行せり打續ける連日快晴の後を承け小春日和の氣澄み風暖く珍らしき好天氣なりしかば早朝より來集するもの雲霞の



如く參會者は約十萬と註せられ其雜沓いはん方なし

▲裝飾及設備　先づ櫻ケ岡の入口には中央に紅色にて大なる赤十字章を出し兩側には「第十一回總會二十五年紀念祝典」と黃色もて記せる緑門を設け精養軒前より沿道の各旅店及茶店を以て各府縣支部出張所に宛てたり博物館前より車馬の通行を止め　皇后陛下及各皇族殿下の通御門はパノラマの左側と定め一般社員の通口は式場高地の北口に七個の入口を設け招待員等は凌雲院脇より出入することゝしたり

▲式場の光景　式壇は北面に檜肌葺十二間に五間の御殿形に造り棟上には緑葉を以て記章を彰はし玉座の背面には金屛風を立て紅白の幔幕を打張り兩側の柱には萬國赤十字旗を吊るし中央には帝國旗と赤十字旗を交叉し玉座の左側を以て皇族席に

其右側を以て總裁宮殿下等の御席に宛て階段の右側を總理大臣以下各招待員、各國公使同夫人、親任官、同夫人、左側を副社長、理事、幹事等の席とし十萬の社員は式場廣間の正面に起立し右側には篤志看護婦會職員及婦人社員等左側は本部支部職員及特別社員病院醫員等整列したり

▲皇后陛下の行啓　かくて皇后陛下には午前十時三十分君が代の奏樂中に御着輦あらせらる總裁宮、同妃並に御先着の各皇族殿下を始め奉り社長、副社長、理事、幹事等職員一同御車寄に整列奉迎し總裁宮殿下の御先導にて式場に入らせらる。



▲第十一回總會　花房副社長は恭しく御前に出で報告書及其他の書類を上り同社の現況を奏上し了るや副社長は總會を開く旨を宣し　皇后陛下より先づ左の優渥なる令旨を賜へり

令旨

日本赤十字社第十一回の總會に臨み茲に各員を見るを喜ぶ倘將來本社の事業益々盛大ならんことを望む

依て小松宮總裁殿下は左の如く奉答あらせらる

總裁殿下御答辭

日本赤十字社は我が至仁至慈なる　皇后陛下の眷護を蒙ること創業以來廿五年一日の如く社業賴て以て發達し社基賴て以て確定せり茲に第十一回總會を開くに方り忝くも復た親臨を忝うし優渥なる令旨を賜ふ社員等歎か此光榮に感激せざらんや自今益々協同奮勉して以て恩眷の萬一に報ひ奉らんことを期すべし謹で答辭を上る

次で副社長は前年の事務會計及清國事變救護決算を報告し常議員の補欠選擧を行ひ小松總裁宮殿下は親しく有功者に對し各人に一々有功章を授け篤志者には一同整列の上上席の一人に束ねて特別社員章を授與し副社長は右の賞記及推薦狀を交附して總會を終れり

▲二十五年紀念祝典　副社長は引續き創立二十五年紀念祝典を開く旨を告げ小松總裁宮殿下には　恭しく左の謝恩表を上らる

奉謝表

日本赤十字創立以來機運漸く盛に規摸愈々擴ろ伏して惟ろに　天皇陛下天覆の仁地載の德化四裔に被り澤八紘に洽く夙に萬國赤十字條約に贊同し又本社の旨趣を嘉尚せられ奬勵扶掖至らざる所なし本社は唯應に結搦奮勵して事業を擴張し國家有事の日に當り一視同仁の聖旨を奉體して諸患者を救護し以て効績を全うせんことを期すべきのみ適々創業廿五年紀の吉辰に値ひ聊か祝典を擧げ乃ち衆社員に代り謹で謝表を上る



茲に於て　陛下より又左の令旨を賜はれり

御令旨

本年は赤十字社創立より二十五年紀に當れるを以て本日祝典會を擧行するに臨み茲に親しく其盛會を見ることを喜ぶ

社長の祝詞に次ぎ來賓總代桂首相の祝詞參會者總代千家男の祝詞あり了て理事松平子爵の作歌に成る左の廿五年祝典唱歌にて奏樂あり

仰げば高き日の本の　海の内外の隔てなく
兵を憐れむ斯道は　やがて皇國の道ぞかし
支那の野山に吹すさむ　風になられし草も木も
うるひし露のしら玉の　光かゞやく赤十字
過こし年ははたちまり　いつかと待し今日の日を
悦び祝ふ國民の　心の色の赤十字
世の文明ともろともに　いよ〳〵進まむ斯道の
末の榮ぞいちじるき　末のさはぞいちじるき

次で副社長より社長に代りて小松總裁宮殿下に對し奉り創業の際より董督の任に當られたるに付謝辭を奉呈し終て皇后陛下は還幸を仰出され總裁宮殿下御先導にて職員一同御車寄せに奉送　陛下には玉顔麗しく午前十一時還御あらせられ之にて社長より閉會を告げたり時に十一時五分なり

▲賞詞恩賜　尚廿二日便殿に於て陛下より總裁宮殿下同妃殿下の御功績を賞させ給ひ總裁殿下には銀花瓶一對同妃殿下には蒔繪料紙硯箱を賜はり其他左の諸氏には同二十五年間繼續社業に盡力せし功勞を感じ召され厚き賞詞を賜はりたり

社長、伯爵佐野常民△副社長、子爵大給恒△同、△男爵、花房義質△理事、男爵小澤武雄△同、子爵松平乘承△同、平山成信△常議員、侯爵鍋島直大△同、男爵石黑忠悳△同、笠原光雄



▲現社員及基金　左の如し

△現社員　七十九萬百十人

△現在　金五百五十五萬四千九百五十圓餘

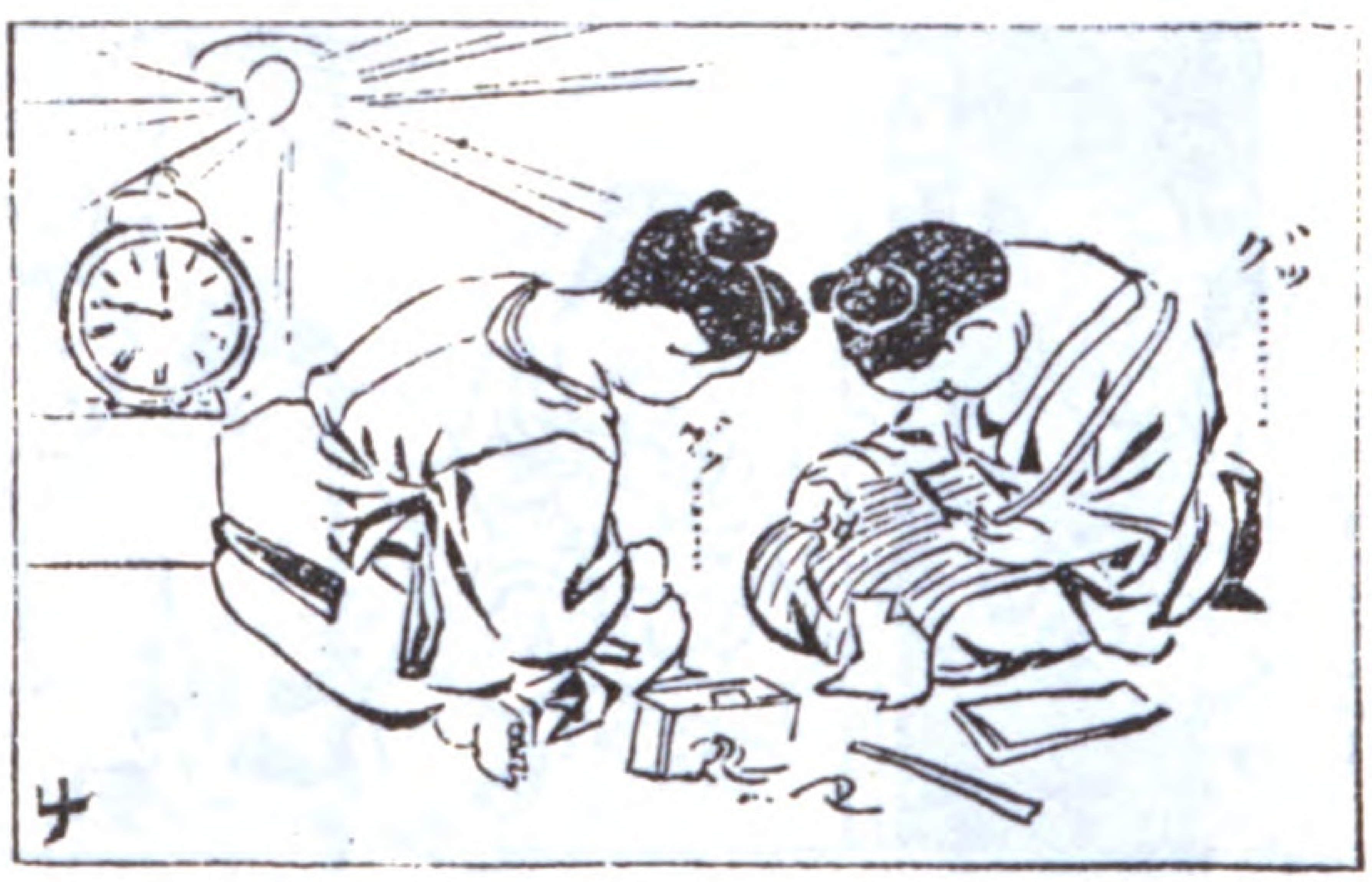
○京都女醫學校の設立　京都同志社病院長ドク、トル佐伯理一郎氏は目下婦人科佐伯病院、看護婦學校、産婆學校等をも主宰し居れるが女醫學校設立に關しては多年計畫する所なり　愈設立の運びに至り明年四月を以て開校する豫定なりと云ふ

○女子教育の制限　高等女學校程度の教育に關しては其父兄に注意し其住居地の該學校に於て修養せしめ東京遊學をば全然禁止し高等女學校程度以上の學業を修めんとするものゝみに對しては寄宿舍設備と

か或は公認下宿或は親戚等の如き相當の監督者あるものに限り遊學を許すの方針を取り現在の如く女學生の遊學を放任せしめざるやうにすべしとは當局者の語る所なり

○女子學校教員陶汰　文部省視學官が市内各女學校を巡視して第一に感じたるものは多くの内には無資格教員の多きことにて之れが爲め視學官諸氏は市内女學校を殘らず巡視し然る後直接監督者に對して此等教員の處分をなさしむる筈なりと

○婦人柔道家　近來婦人にして柔道に志す者漸く多く下田歌子女史を始め華族女學校の教授十數名が麴町五番町の嘉納道場に於て指南に預る事は既報の如くなるが其後下田氏以下は嘉納氏の渡淸より稽古を廢し居たりしも過日同氏が歸朝ありしかば毎水曜日必ず本田存氏の教授の下に稽古着姿甲斐々々しき扮裝にて教授を受くる由なり同門下蘆谷スエ子孃は著しき上達にて漸く堂に上らんず勢ありとぞ



○留岡氏の家庭學校　年齡八歳より十六歳までの不良少年を收容し家庭的溫情を以て教育するを目的とせる巣鴨なる同校は校長留岡幸助氏以下の盡力に依り創業僅かに四年なるに比しては効績殊に顯著にして目下慈善事業に從事すべき人物を養成するの急要を感じ慈善事業師範學校なるものを起し已に九名の生徒を得、家庭學校の方は目下二十五名の生徒を有し前途愈々有望なり然るに不幸にも去月初旬放火の災を受けて第一

家族舎を燒失したれば此際に一面目下焦眉の急に應ずるの手段を取ると同時に他面將來規模を擴充するの計畫を立てんとし差向き校舍二棟の新築費二千五百圓の三分一は賛助者及評議員に於て負擔することを約し殘り三分二は偏く世間同情者の贊助を乞ふことゝし仍ほ計畫の完成に付ては更に世間の義金に待つ筈にて校長及評議員の名を署したる趣意書を有志の間に頒ちたり

○最も仁惠的なる發明　人の職業は一として安樂なるものなしと雖も職業其物が直ちに死を意味すること彼の汽船火夫の業の如き最も苦痛の甚しきものなるべし此程米國大北鐵道會社長ヒルが同會社の外國貿易に使用するためニユー、ロン



ドン造船所に命じて建造中なる二大汽船は器械を用ひて火を燃す構造を有し火夫を要せざる由なりこは新しき發明にわらざれど未だ不完全の域にありしを改良したるなりと云ふ果して好成績を擧ぐるに至らば人道に益すること莫大なるべし

○世界最少の婦人　はシキタと云ふ玖馬の一婦人にして年齡は二十三歳なるが其身長は僅に二十六吋（我凡二尺三寸）に過ぎず然も身體は健全にして智識の發達は常人に異ならず音樂及び其他の遊藝を能くし容貌も亦美麗なり其美裝せる時は宛然仙女の如くなりと云

○エヂソンの洒落　有名なる米國の電氣學者エヂソンが蓄音器を發明したる頃の事なり氏は極め

て諧謔を好む人なるより或る時置時計の中に蓄音器を裝置して之を各室に置き一友人をして其室に宿せしめたり友人は衣を脱して今や寢に就かんとしたるに何處よりともなく「十一時……モー一時間」と叫ぶ聲聞えたるより急に氣味惡るくなり中々に睡る能はず聽て夜半となるや同じく怪し氣なる聲にて「十二時……死ぬ覺悟せよー」と叫びたり客は此聲に寢所を驅け出して隣室に跳び込みたるが此室にはエヂソンが友人等と忍耐してこを待受け居たるもの丶如く一時に腹を抱へて笑ひ出したるより客は始めて洒落なることを了解したりと云ふ



○巴里の婦人に對する禮　巴里にては婦人に對する握手の禮今や殆んど廢れて武家時代に行はれたる婦人の手に接吻すること又々流行せんとする由なり而して接吻の方法は親疎の度に依りて之を異にすと云ふ

○日本女子大學校の運動會　日本女子大學校は其創立以來主として體育に重きを置き歐米各國の女子の體操遊戯を折衷して我國の女子に恰存せるものを撰擇し居れる由なるが客月十八日同校に於て催ふしたる運動會を參觀するに從來女學校の運動會は其組織殆んど男子と異なることなく、競爭遊戯を主とし之れに二三の舞蹈を配して施行するを以て通例となせるに今回女子大學校の運動會は、演技の三分の二は美的遊戯と體操を主とし競爭遊戯は僅かにその三分の一

に過ぎざるが如し、今其の景況を畧記せんに先づ會場の入口には、生徒の製作物なる、縦二尺斗横六尺斗の善學善遊と題する四大字を各色の菊花を以て表はせし額を掲げて、此門にて一々來賓を送迎せりさて午前十時に到り運動會を開始せしが午前中の體操及び遊戲は

(第一)　徒手體操　(高等女學校第一年)

此體操は、ハーヴィー氏の方式なる由、二三の不整なきにしもあらざれども、先づ無難に敎師の洋琴伴奏と共に行はれたり、

(第二)　水環遊戲　(高等女學校第五年)

此遊戲はアリス嬢の考案の由、中には踵の上げ方不十分な生徒もある様に見受けられたり、

(第三)　毬入れ競爭　(高等女學校第三年西組)

此の遊戲は、籠を長き一丈斗りの竿の先きへ結び付けて立て置き、生徒は二組となりて、紅白の毬を入れ競ふものにて、先づ女らしき競爭なるべし。

(第四)　第二マーチ　(高等女學校第二年)

之れは、ハドソン氏の考案の由にて、名はマーチなるが、體操の如き處もあり、頗る變體なるものと思ひしが、後ちにて聞けば、マーチへ木環體操を附加へたりとの事なり、風琴の伴奏と一致して、頗る調子よく整ひたり。

(第五)　和歌組合せ　(國文科第一年)

此は、春夏秋冬の古歌一首づゝを撰び、各一首を三十一枚の厚紙に一文字づゝ記せしものを置き、各生徒走て之れを一枚づゝ執り、前方の大掛板に貼付し、速かに順よく一首の歌を掛け終りたるものが勝となる趣向なるが、少し物足らぬ心地せしも面白き趣巧なりき

(第六)　霞の富士　(高等女學校第三年)

生徒は一本づゝ扇子を以て恰も舞の如きことをするなり、同校敎師の新工夫にて表情體操とか云ふものゝ由なり、之れには歌詞がありとの事なり名詮自稱優美なることと全く霧の富士の如かりき

（第七）　對抗啞鈴體操（高等女學校第四年東組）

此體操はハドリン氏考案にかゝり、從來の其れと異なりて己れの啞鈴にて對手の啞鈴を打つ仕組の樣なり頗る斬新にして生徒も熱心に調子よく整ひ敎師の洋琴伴奏と共に一點の申分なく仕てのけたり

（第八）　秋草くらべ（高等女學校第五年東組）

頭に七草の花釵を插して星形に方形に進行して終りに七色の旗を以て競爭するなり今少し幼なき生徒に行はせたき心地せられき

（第九）　輪體操　（高等女學校第二年）

白黄紅の輪を以て運動するものにて眞に女子體操と思はれて面白し

（第十）　女子ベースボール

女子のベースボールは必ず見ものなるべしと、思ひ居たるに、非常競爭とかに變更せられたるは遺憾なり

（第十一）　夜行列車（高等女學校第五年西組）

提灯を携へて出られた迄はよかつたが何にを仕たのやら一向に要領を得ず、無遠慮に云へば當日第一等の不手際なりしなるへし

（第十二）　夕立マーチ　（家政學部第一年）

一隊の孃子何れも手に洋傘を用意して出で、一種變體の行進にして少しも曲線の處なく常に直線に場の一隅より斜に他の一隅に進み、其間或は傘を開き或は閉づるなど成る程夕立マーチとは善くも名づけたり

（第十三）　可憐孃　（高等女學校第一年）

花の如き少女の各可憐の人形を抱きて出たるには滿塲オヤ、マー、可愛の聲を發せざるはなかりき、人形を以て一の體操用具として運動し、終りに之れを背に負ふて洋琴の湧くが如きに連れて子守歌を唱ひながら順々退きたる風情は無邪氣とも可憐とも云はまし

（第十四）容儀體操　（大學部）

此は佛蘭西式の體操とかにて頗る優暢流麗のものなれども、たゞ高尙といふの外なし

（第十五）提灯體操（高等女學校第五年東組）

各手に一つの提灯を携へ恰も暗夜を歩行するが如く軍樂隊の吹奏に伴れて徐々と練り行くなり體操としては如何と思はるれども前後の步調如何にも暗夜を辿るが如く吹奏能く調和して參觀の外國人も感服したる樣見受けられたり

（第十六）自轉車毬拾ひ　（大學部）

名の如く妙麗の女生六人各自轉車に乘り、片手に玉網を以て毬を拾ひて投くその趣甚だ輕妙にして面白かりき右にて午前中の運動を了りぬ午後の況景は次に掲ぐべし　（つゞく）

◎女學生談　河原京都高等女學校長は語りていふ近來女學生墮落の事を追々耳にするのは我々女學教育の任に當るものゝ大に考なければならぬ事である而してこれに對する文部の方針は公私學校に拘らず父兄の家より通學する外は總て相當の寄宿舍に收容して嚴に監督する見込なりとの噂あるがこれは至極適當の措置と信ずる我が京都高等女學校の如きは大にその取締を嚴にして下宿屋に居る事は一切これを禁じ父兄の家なきものは學校にてこの人は確かと信ずる家に同居せしむる事に定めてある併しこれとて決して安全とは云ふべからざれば出來得べくんば悉く寄宿舍に收容し度ので

あるが何分定員のあるので致方がない又一概に女學生の墮落と云ふも中には賣淫婦にして殊更に女學生に扮せるものも尠らず殊に東京にはこんなものが多ひ様だが近頃京都にも出來たと云ふ事だ女學生墮落の動機は處々の下宿屋に放浪せる腐敗書生の誘惑に罹り知らず識らず邪路に陷るものと一つは監督の不充分なる私立學校に入りて遂に足を濁流に投ずるものが多い京都は幸ひにこれ等の墮落女學生と如何はしき私立學校の尠ひ爲め女學生の風紀も割合好けれど將來又これ等惡學校惡書生の出で來んとも限らざれば今より大に警戒すべき事である云々

○事務員養成所女子部　神田區裏猿樂町の黒岩規氏が管理する銀行事務員養成所にて過般來新設したる女子部の近況を聞くに入學女子の成蹟は頗る良好にして進歩の度合殊に著しく將來女子職業として最も好望の由なり唯習字の思はしからざるは欠點なりと云ふ

○落葉籠

●近來新聞雜誌で東都の女學生攻撃の聲が非常にやかましいですが、實際そんなに墮落してゐるのですか、妾はこれから勉強に出京しやうと思つてゐるのに、實に心細う御座います。（水戸はな子）

●新派和歌は大いの嫌です、何だか私共には意味がとれませぬ。大體故意とらしき漢語を交へ、口調の澁滯して居るのが、頭痛のそも〳〵です。（つる子）

●毎月新體詩を募集しては如何です。女鑑にはとんと見えませむやうです。（山口、東とみ子）

●妾はポット出の田舎者で御座いますが、東京は何んだか勉強する場所ではなくツマリ學力を戰はすところで活戰場の舞臺だらふとかんがへます、

だから地方で十二分に實力を修養して、東京で色上げをする、試驗をするといふ覺悟で來なければ、大變な間違が出來やうかと、皮相の見だらふがそうおもはれます、如何でしやうか。(本郷弓町、小乙女)

●今年の一月より八月までに、歌や文に天賞を得たまひし孃樣方、二十五人まします。中に御寫眞を拜度き御方は、伊豫宇高松子、大阪桝田益子、東京山本梓子長崎八尾いへ子樣方のを。一日千秋の思ひをして待つて居ます。(肥後片山猿女)

●女子職業學校の所在地を、何卒記者樣御敎へ下さい。(女鑑愛讀者)

▲御尋の職業學校は、神田區一ッ橋通廿二番地であります。(記者)

●私は、此後學問するに付、苦學をいたしませうと存じますが、どのやうな事をいたしたらばよろしいでせうか御きかせ下さい。(同上)

●私は、日頃より和歌がまなびたく思ひますけれども、何等家事が多忙で、少しもそんなひまが御座いません。もとより學問もなく、歌學なぞは別して心得が御座りませぬが、しかし折角の望を無にするも、誠に殘念に堪へませぬ故、今より少しなりとも和歌の道に入りたく存じますが、初歩には、どんな書物を學びなばよろしうござりますか。何卒皆さん敎へて被下いまし。(伯耆大橋能婦子)

▲落合先生等の歌の著述が多くありますが、まづ古今集をよく御讀みなさる方が宜しい。(記者)

●私は今度和歌のはがき集をして身の敎の手本となし、尚家寶にいたしたう御座りますから何卒皆樣題はなにゝてもかまいませんから、送て頂戴きたう存じます。住所は大阪西區薩摩堀裏町三六邸伊勢村春子と御しるし被下い。(大阪、伊勢村春子)

●今日は畏くも、我大君のみあれまし〻日、尊く

雜録

も大御光のさし出で給へしいと〳〵よき日なれば、例の如く、家居を掃き清め、日の御旗高くかゝげて親しき友連打集へ、わが大君のみさかえをとほぎ奉らむと思ふ心は、玉のうてなに住むひめ君も、しづが屋に住む妾等も同じ事ならんといと嬉しく思はれます。（信濃松澤まつ子）

◉蕈狩

讃岐　小西甚之助

八千竹の野邊を見あきて奥ふかく
茸狩る山のめつらしきかな

枝折して花にのぼりし山もとに
われまつ茸のむかへ顔なる

谷陰やはやも取り得しこゝちせり
足もとちかき秋のかなりに

◉新刊書籍及雜誌

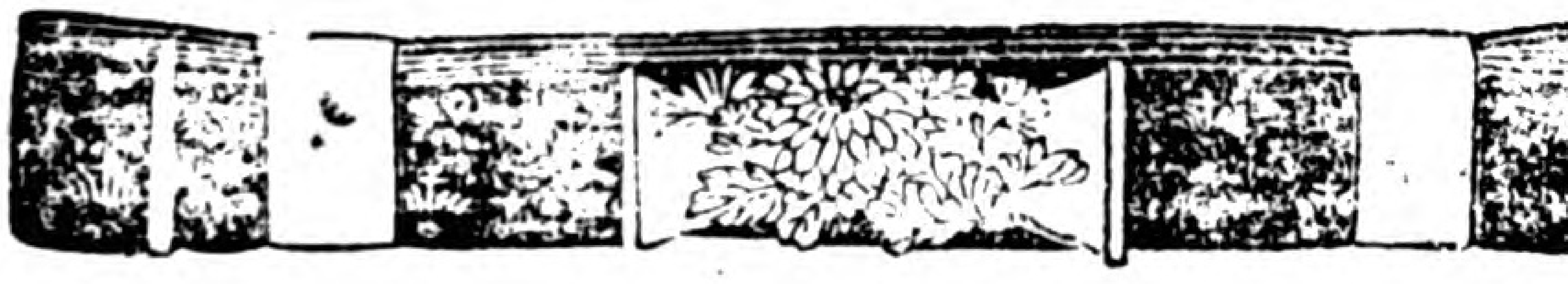
大日本婦人教育雜誌　第百四十八號　同會事務所
女子之友　第百二十九號　東洋社
愛國婦人　第十五號　愛國婦人會
六合雜誌　第二百六十三四號　日本ゆにてりあん會
をんな　第十號　大日本女學會
佛教　第十號　佛教社
婦女新聞　第百二十七八九號　婦女新聞社
婦人世界　第十七號　淑華婦人會
むさしの　第八號　東洋文學會
くわつじどう　第十二號　内藤温故堂
偕行社記事　第三百號　偕行社
教育公報　第二百六十四號　帝國教育會
慶應義塾學報　第五十七號　慶應義塾
新明石　第二號　慈善商會
經濟新報　第十五號　同社
大帳　第十三號　山田丹心舘
東京府教育會　第百五十五號　同教育會
女子普通作法書　木田たつの・谷川とく共編　金昌堂
評釋女子文範　鈴木秋千編　東洋社

明治三十五年十一月二日印刷
明治三十五年十一月三日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊業一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木良雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話特新橋八八）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

貴金屬指環帶留





指環

(無地槌目)

純金二匁附 金十二圓十錢
廿金同 金十一圓三十錢
十八金同 金九圓三十錢

同彫刻附(二匁附)

純金片切 金十四圓方
同高彫 金十七圓方
廿金片切 十三圓八十錢方
同高彫 金十八圓方
十八金片切 十二圓五十錢方
同高彫 金十四圓方
同ダイヤモンド入 十七圓方二百圓迄
ルビー入 七圓方三十圓迄
サツフイヤ入 六圓方廿五圓迄
エメラルド及猫目入 十五圓方三十四圓迄

(注意)御注文の節は指の太さを厚き紙にて御張付被下度候

(郵券代用一割增)遞送料實費申受候

彫刻附帶留

廿三金 二十圓方
十八金 十五圓方
十四金 十圓方

石入帶留

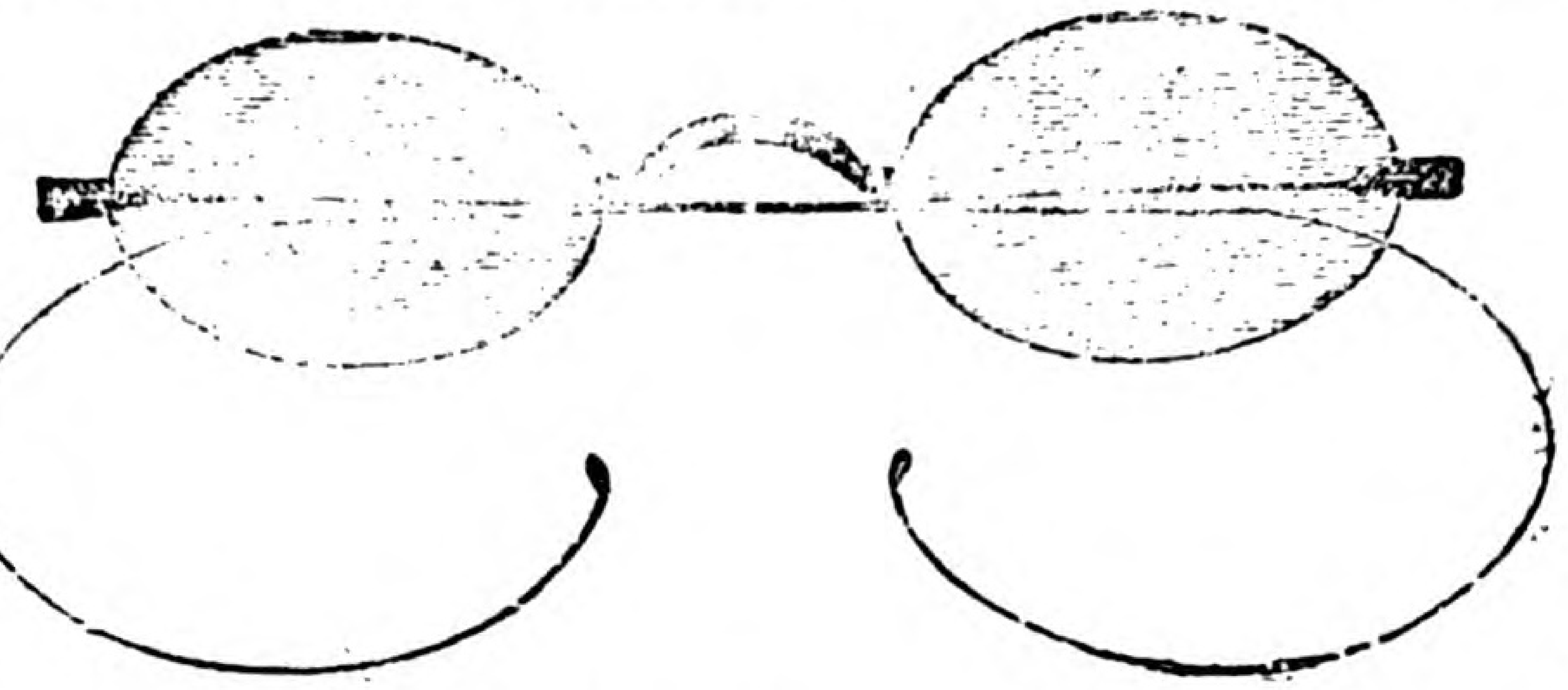
廿二金 十八圓方百圓迄
十八金 十二圓方五十圓迄
十四金 八圓より廿五圓迄

餘は御好に應じ候

一 銀製彫刻附金二圓方七圓迄

弊店從來金細工營業罷在候間金質其他の確實なる保證す萬一相違の際有之候節は何時にても他の品御交換申上候か又は原價を御返戻致候共御需に際すべし(爲換振込所南傳馬町郵便局宛)

金銀縁眼鏡



蔓掛
廿二金 一匁三分附 十二圓二十錢
廿金 一匁二分附 十一圓
十八金 一匁二分附 十圓也
十四金 一匁一分附 七圓八十錢
十二金 一匁附 六圓七十錢
九金 九分附 五圓五十錢

差込及半掛
廿二金 二匁三分附 十九圓五十錢
十八金 二匁一分附 十五圓四十錢
十二金 一匁九分附 十圓四十錢

縄蔓掛
廿二金 一匁八分附 十六圓二十錢
廿金 一匁七分附 十四圓五十錢
十八金 一匁六分附 十二圓七十錢
十四金 一匁五分附 九圓八十錢
十二金 一匁四分附 八圓六十錢
九金 一匁二分附 六圓九十錢

半掛
廿金 二匁二分附 十七圓五十錢
十四金 二分附 十二圓
九金 一匁八分附 八圓廿錢

新製切子縁
十八金蔓掛 一匁一分附 九圓八十錢
十八金縄蔓掛 一匁六分附 十三圓也

六ッ折〇八ッ折四枚玉〇引出し鼻掛等種々

右の外御注文次第調進可仕眼鏡は遠近眼素通等御好み次第〇金質は金性の割印捺し確實なる保證書相添萬一相違のかど有之候へば他品と御交換又原價を御返戻申べし

郵券代用一割增●爲替振込所南傳馬町郵便局●遞送料十里迄五錢百里迄八錢百里以外十六錢申請候

美術

貴金屬細工袋物商

東京市京橋區南傳馬町三丁目十六番地

丸屋商店

(電話本局二十番)

金子直吉

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●再版發賣廣告

●●樞密院副議長　東久世通禧伯題字
●●華族女學校學監下田歌子女史序文

東京帝國大學醫科大學卒業　秋山七朗先生著

再版　女子教育　家庭教養法　全一冊

◉製本菊版大本　◉四號活字鮮明刷　◉正價金五拾錢

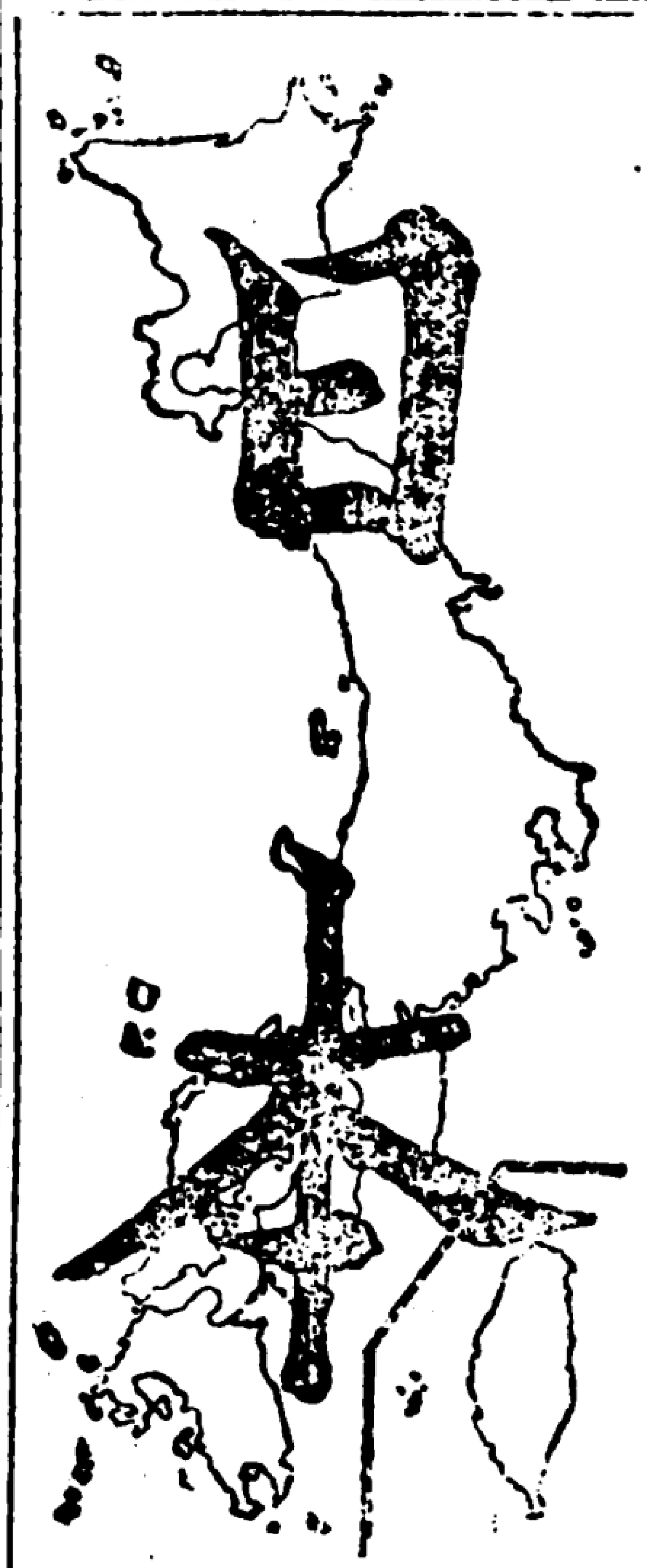
女子教育は今日の一大問題にして、家庭に學校に其書甚た少しとせす、然かも專攻學家の手に成り生理に照し衛生に基き學理の上より家庭に於ける教養の方法を詳說したるものや即ち少し、殊に筆を姙娠の前に起し分娩、保育より教育、性行に渉り家庭を通して必要なる教養の方法を詳說したるものに至て本書に於て始めて之を見る、是れ本書に題して女子教育家庭教養法と謂ふ所以にして、試に其目次の一班を擧げんか第一章に姙娠を說き姙娠の徵候、精神の衞養、身體の攝養、乳房の準備を詳說し、第二章に分娩に入り産前産後に付て産室、出產用具、出產、産褥中の用産を說き、第三章の生兒の保育には母乳、乳母、獸乳より入浴及胎髮、臍帶及衣服、啼音睡眠及外出、乳齒、離乳、種痘、保姆、疾病、健康、醫師藥用、服製、玩具及遊戲、第四章の教育には體育智育德育に付き身體の發達保護、衣服飲食、智力の發達、視官、聽官、觸官、嗅官、味官、筋肉官、記臆想像、概念、斷定、推理、性情、體慾、色慾、慾望、情愛、情操、推考意思、摸範、教訓、習慣を分說し第五章には放縱、傲慢、沈鬱、過敏、怯懦、刻薄、輕躁、懶惰、嫉忌、好奇等の各性行に付き矯弊の方法を詳說し、凡そ女子教育に於て最も必要至重女子の知らさる可からさる家庭の教養法は擧て漏すなく、生理的に心理的に衛生的に學理の定則より詳說細述したるものなり、是豈に生花の書を讀み點茶の書を讀むと其必要同日の論ならむや、苟も母たり女子たる者の座右に必す缺く可からざる大好書也、賢母たらんとするの淑女請ふ必す一本を購讀する所あれ

東京市麴町區飯田町四丁目三十番地
發行所　（電話番町四八二番）　自治館

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

本社の特色

『日本』は世間幾多の新聞紙と其趣を異にし、主義一貫材料豐富、而も全紙些の卑猥の文字なく、極めて着實謹嚴の筆を以てす、故に嚴肅なる良師として位置名望ある社會上流の人々に愛誦せられ、世上既に定評あり、今回更に「教育及宗教」の一欄を設け廣く江湖の投稿を歡迎し、益々世道人心に裨益する處あらんことを期す、曩者商況欄を擴張し各地方の電報通信員を增加して一層報道を迅速にし、今復此欄を設け益々大新聞の特色を發揮せんと欲す。



年中無休刊
每月曜日附錄週報發行

壹枚 金貳錢
壹箇月 前金四拾錢
參箇月 前金壹圓拾五錢
半箇年 前金貳圓貳拾五錢
壹箇年 前金四圓四拾五錢
(市外は別に郵税壹箇月拾五錢宛)

本社の附錄

『日本』は別に附錄として每月曜日に紙質鮮麗體裁優美にして有益なる週報を發行し加ふるに每月二回宛精確鮮明なる府縣地圖(本紙一頁大二回摺)を各別に精製し月極めの購讀者諸君に進呈す既刊地圖及次回後發行豫定の分左の如し

●既刊（定價郵税共一部金五錢）

東京府 長野縣 神奈川縣 埼玉縣
山形縣 新潟縣
富山縣 石川縣
秋田縣 臺灣
福井縣 青森縣
福島縣 巖手縣
宮城縣 栃木縣
群馬縣 茨城縣
千葉縣 靜岡縣
愛知縣 山梨縣
熊本縣 長崎縣 佐賀縣 福岡縣 鹿兒島縣 宮崎縣
大分縣 沖繩縣 滋賀縣 岐阜縣 三重縣

右地圖の裏面には其府縣重要統計を記入するを以て各府縣の地形を知ると同時に國勢の一斑を窺知するを得べし

發行所 日本新聞社

東京市神田區雉子町『電話(特)六九』

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

見よ大擴張後の日出國新聞を!!!

讀むべし大刷新後の日出國新聞を!!!

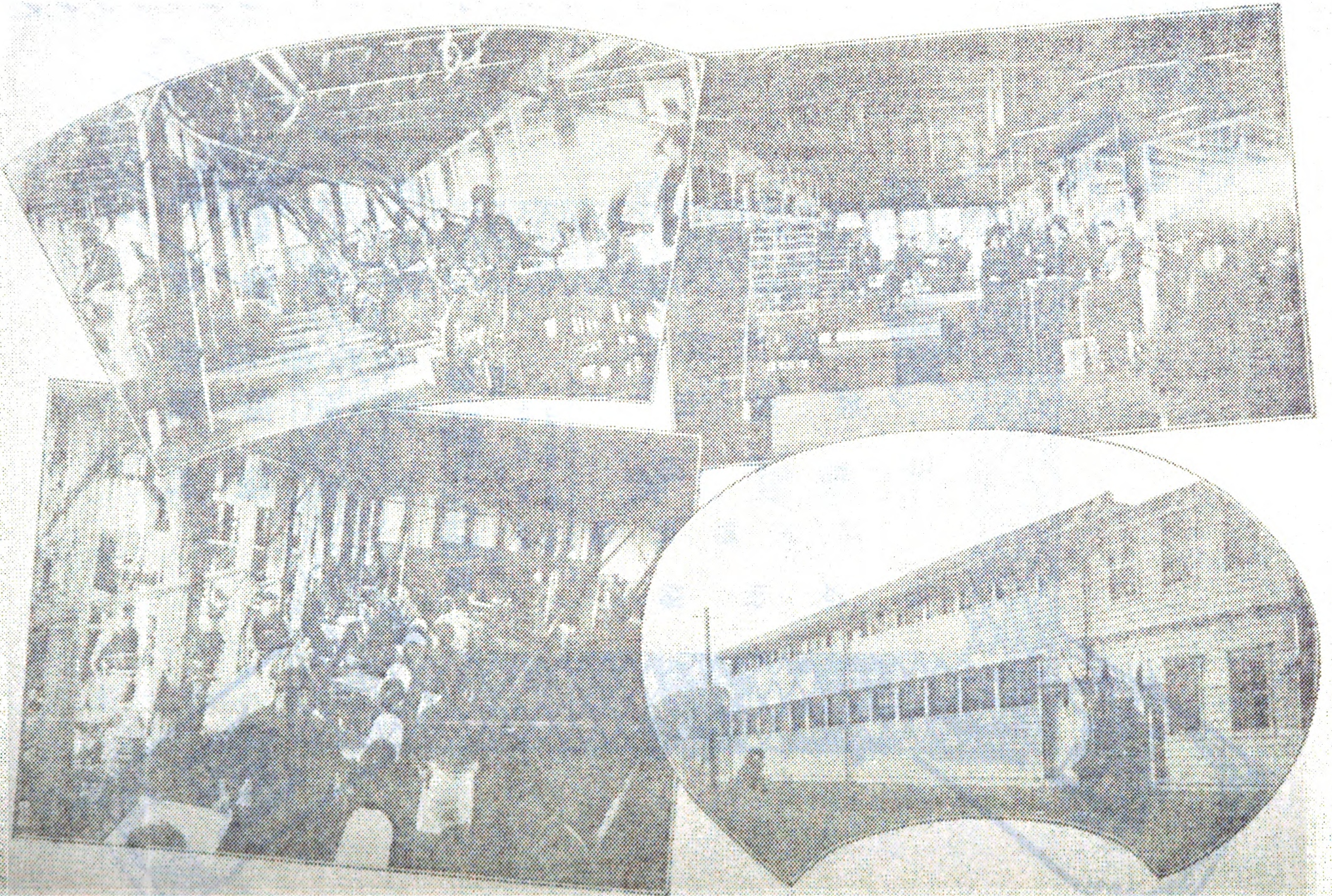
大祭翌日の外
年中無休刊

日出國新聞（やまとしんぶん）

定價一ヶ月
金貳拾四錢

▲小說◎◎ 福地櫻癡居士の筆に成り海內無双▲論說◎◎ 面目を一洗して議論該博、筆力精透▲新刊批評◎◎◎ 深討精查、巨犀の淵を照すが如し▲名優藝話◎◎◎ 挿畫に據りて名優の藝話を平易に記述したるもの▲錦繪◎◎表紙册子附錄◎◎◎ 艶麗人の目を奪ひ又讀物は探偵實話なり▲訪問◎◎と視察◎◎ 其人に接する如く其境に在るが如し▲日出新聞社相談所◎◎ の設けあり

發行所 東京京橋區三十間堀 やまと新聞社



◆株式會社國光社印刷工場之一部◆

秋期附錄

天長節の歌　清水橘村

つまさだめ　廣津柳浪

八木原骸華

垣根越　堀内新泉

露の音　柳川春葉

天長節の歌

清水橋村

ためしすくなき天地の
この歡喜にあひあうて
まづうるはしき秋草の
菊のしづくのさか瓶を
あけて離にくまばやな

錫の提手にひたしたる
黄菊の花のかんばしく
籬にこそ馨れこの旦明
あやしき雲の流離へる
雲井をつるの渡るかな
たれかめでたき此朝の

祝のさけに醉ひ〳〵て
夢の中なるまがごとの
醉を山路にさまさゞる
さめての後に歌はざる

げに君がためおほ空の
雲はかくるゝ山やまの
波はながるゝうな原の
うしほは岸を廻りつゝ
たかき鼓の音にひゞく

秋津の島にかゝる日の
白きひかりは杳かなる

萬の國に落ち行きて
帝の冠紫衣の袖
金の車駕を照らすかな

長きことばに盡すとも
なほあまりある蓬萊の
松の千枝のふかみどり
二葉のかずのかず〳〵に
祝はんけふの君が代や

天長の節しかすがに
よろこび多き秋の國

つまさだめ

柳浪
柳絮　合作

（上）

曩莫三曼多。縛日羅赦。戰拏。摩訶盧灑拏。娑頗吒耶。吽怛羅吒。唅鈐。

祈禱の聲も口の中。

　初冬の星は金沙子の如く空に冴ゆれど、數千百年の老樹の枝に遮ぎられて、瀧壺は眞の闇、萬籟銅蛇の口に集つて、直下幾丈、聳ゝの音に絶間なくして却つて寂寞、寂寞にして悽愴、これが眞夜中過ぎの、目黒不動の瀧の樣なのである。

　眞言の聲止んで半晌、瀧壺を上つたものがある、肥え太つた白い皮膚を、星に覗かせしも霎時で、彼は手早く着物を纏ひ、顫ふ齒の根を噛み締め噛み締め、堂の門を出ると、彼は道を右に取つた。

二

　垣の内から吠え立てる犬の聲に身を縮めた彼は、刻足に一二町、横を向いて、交番所の前を行き過ぎやうとした。

『オイオイ』。

呼び止めたのは見張番の巡査であつた。

聞へぬ振りの彼は足を止めなかつた。

『オイ、こらッ』。と、高く鋭く叫んだ巡査は、靴音烈しく驅け寄つて、彼の袖を捕へた。

『ちと、尋ねたい事があるで』。と、巡査は彼を交番所に入れて『まア顫への回復るまで、煖たまつたがよい。』と、莞爾して慰めた。

許された火鉢には手を出さうともせず。

『私ア、惡るいことしないだ、不動樣へ信心に來たのだ、早く歸して呉れさッせエ。』と、顫へながら、僅つと言ひ切つて、巡査の顏を覗いて居

る。

『イヤ、それは知つて居る、今夜で七晩目であることも知つて居る。』

『それを知つて居なさるから、早く歸して呉れさつせい。』と、彼は泣かぬばかりの氣配。

『尋ねる事を尋ねれば直ぐ歸へす』と、笑を含んだ巡査は、ポッケットから手簿を出して。

『御前は何處の者だ。』

『私けエ、私房州の金束で。』

『イヤ、本籍はよい、現今は何處に居るのかい。』

彼は迷惑さうに。

『それ堪忍して呉れさッせエ。』

『政府の御規則だで、それが出來ぬのじや。』

巡査の口調は、嚴かであつた。

彼は泪ぐんだのである。

『此此此先の………。』と、言ひ淀んだ。

巡査はすかさず。

『此先の田島か、楢島か、山口か、加藤か、それとも上州屋か、信濃屋かな。』と、引き出した。

『イエ、イエ。』

『はてな。』と、巡査は首を捻つた。

『園城寺さまで………。』

『オー』と巡査は失せ物でも捜し當てたかのやうに、頷いて、『彼の獨逸の文學博士、園城寺謙太郎先生の。』

『ハア、お爨どんで。』

『名は何と云ふかい。』

『わぐり、わぐりじやア可笑いッて、御母堂樣が、お八重と云ふ名を呉れさしッて、それでお八重、お給金が貳圓五拾錢で、髮は………。』

『ハ………、まア好い、が、お前は何の爲に、

女の身で、この寒い、しかも夜更けに、寂しい不動樣の瀧にまでかゝつて信心をするのかい、若いものにはありがちの、添ひたい人でもあつての事かね、それとも……。』

八重は識らず〳〵の間に、煖を取つて、もう顫ひも見えなかつた。

『ホ……………。』

『笑ふことはあるまい。』

『でも、お前さまが、可笑しなことを言ひなさるからよ。』

『フヽム、可笑なこと。』と、火に翳して居た手を引いて、『では何の爲の信心、殊にお前は單衣で居るではないか。』

『だッて、お前さま、お母堂樣に知れないやうに、毎晩寢所を拔けるんだから。』

『サ、それだ、その樣な苦勞してまで信心するのは、何の爲かそれが聞きたい。』

八重は訴るが如く、哀を乞ふが如くに、巡査の顏を瞶めて居たが。

『云ふ、云ふけれど、お前樣、主家の御母堂樣にも、旦那樣にも云うて下さるなよ。』

『氣遣ふな、此塲のことは、此塲限り、他言などは決して致さぬ、で、安心して……。』

八重は安堵の胸を撫で下し乍ら。

『旦那樣の大病を癒して上げやうと思うて。』

『何ッ』と、巡査はビリビリと身を顫せ、『正歟、園城寺博士ともあらう人が』と、口の中で呟いた。

『お前樣、もう歸つても。』と、八重はもぢもぢして居るのである。

無言の巡査は、さま〳〵の想像に襲はれた、乃公も一二度は見たことがある、獨逸戻りの新紳士容貌なら、擧止動作なら、天晴の紳士が、如何に

閨淋しとて、如何に質朴愛すべき點があつたにもせよ、この八重に………、主の身として雇人を………、が、人の心は面の如しで、蓼喰ふ蟲も好き〲と言へばもしや………、否否さうでない、園城寺博士は、倫理學者で、此間の新聞の評論にも、才學德行兼備の學者、日本の新ソクラテスとまで譽めてあつた、殊に戀愛に於ける博士の一節には修身不犯でそれも失戀の爲ではない、と、云うてあつた、して見れば、博士の德行に化せられて、この女が玆に及んだものか………。』

『お前樣、もう歸つても。』

『イヤ、まだ。』

『あれ、鷄が鳴き始めた、早く歸して……。』

想像の霧に包まれた巡査は、一道の光明に射られたかの樣に、始めて我に還つたのである。

『お前いつまで園城寺に奉公するのかい。』

『今年の暮まで。』

『それから。』

『房州へ。』

『歸つてからは。』

『もう來年が二十歳だから、大方嫁にでも遣られるのだんべエ。』

八重は平氣で言つて退けた。

巡査は、無量の感に打たれて、思はず。

『あゝ、園城寺博士にして、始めてこの下女ありだ、日本未だ澆季ならずだ。』と、叫んだ。

八重は吃驚して飛び退いた、巡査の聲が常軌を外れて居たからである。

叫んだ巡査は、急に悄氣返つて、頻りに感涙にむせんだのである。

『お前さま、腹でも痛いのかね。』

その言語が眞に肺臟から出た。

巡査はもう耐へられぬ、急に八重の手を取つて。

『あゝ、逸群の烈婦だ、群鶏中の一鶴、萬緑叢中の紅一點とはお前のことだ。』と、口を極めて賞讃の言葉を贈つた。

が、八重は更に感じないのである。

『あれ又鶏が鳴く。』

『イヤ、お前の忠義には感服した、が、お八重さん、人の病ひは信心や、祈禱で平癒るものではない。一に看病、二に藥師と俗にも云ふその通り、もう明日の晩からは、水垢離などを取らずとも、よく氣を注けて看病して上げた方が、病も早く癒る道理よいか、もし又今夜の樣に、危險な眞似をして、凍へるとか、病氣にでもなるとかした曉には、故郷に居られるお前の兩親が……、主人に忠義を盡さうと思つても、その盡し方が間違ふと、親へ不孝になつた上に、主人へも忠義が却つて不忠義になるから、よいか、もう明日の晩からは、水垢離はよしたがよい。』と、巡査は噛んでくゝめたのである。

膝に手を置いて、聽いて居た八重は、

『もう水は浴びねェだよ。』

『オー、それが解れば本官も滿足だ。』

『もう歸つても。』

『好い、好いどころではない。』

八重は叮嚀に默禮した。

巡査は交番所に伸び上つて、八重の後影を見送つて居た。

横雲がきれて、東方が白みかゝつた。

『あゝ、これがもし去年で、宿妻を貰はなかつた先ならば……。』

肥料車の轢に驚いて、巡査は儼然と容を端した。

○　○　○　○　○　○

垣根越

堀内新泉

谷中八景の一ッに數へらるゝ鶯谷の近傍は美術家屋敷と云つても宜からう。主人は主に鑄金家木彫家、牙彫師、畫工など云ふ人達で、何の家のかゝりを見ても、杉、枳殼、要冬青、山茶花、或は竹の折懸垣などに圍まれて、一寸心にくい生活をばやつて居る。また何の家を見ても多年の風雨に洒されたものらしいが、中に一戸初音町の通りに向つて、まだ床の下には白い鉋屑や、大工が煙草の吸殼などの、その儘殘つて居りさうな家がある。

家は新しいと云ふ丈の取柄で、間數は六疊に四疊半、それに二疊の玄關があるか何うだか。但し山手に住む一德には、庭は割合に廣く取つて、春は櫻あり、秋は山茶花あり、加之要冬青垣に圍まれて居る、井も細君の御望み通りに直ぐ臺所の傍にあつて、井端には又一株の老梅が、今や馥郁として恣に床しい香氣を放つて居るが、その梅の木の股には、二本の楊枝と一袋のライオンとが挾んである。庭に向つて南を受けた椽先の障子はまだ雪のやうなのに、はや彼方此方と亂暴に破つてあつたり、また今こそ拭きましたと云ふ椽先に、一寸宛位大さの違う、小な足跡が幾ッもあるのは、この家には少くも二三人の兒童のあると云ふことを示して居る。

頃は丁度井端の梅が名殘無く散り盡して、土地の名物鶯の聲は、些の遺憾無く圓滑に成り、門の柳は最うそろ／＼と綠を吹きかけて、庭の櫻は今一雨だといふ頃であつたが、天は早うつすりと霞んで來た庭に出て、臺所の戸を二枚外して、日

あたりの好い椽頭に立懸けて、いづれ子供の袷であらう荒い柄の双子を、切々と張り始めた細君の年齢の比は二十四五味方をしても、美人とは云へ無いが、塵芥は掘つても鶯の何處となく上品に、色も白く、目元も涼しく、善く身まめに働く所爲か、長くはこんな貧しい生活はしませぬぞと云ふやうに肥つて居るが、目下の服装はいかにも酷い。背には三ツばかりの逞しい男の兒を、これなら千里も走れると云ふやうに括りつけ、毛こそ散さね髪も手束、垢こそ付けね綿銘仙の幾度か水を潜つた綿入、これも手荒いことは出來ぬ繻子襟のかゝつた、殆んど綿入と同じやうな柄合の、樸素な綿銘仙の筒袖の襟をきツちり胸に合せて、前懸の括緒にしやんと止め、下駄は散々穿き減した男物のいづれは山桐の打割に、小倉の鼻緒も水や埃を充分に吸つて居る。

稚兒は善く肥つた兩足を母の腰の邊にふみ張つて脊中に身を反し、何時の間にやら散斑のゴム櫛を拔き取つて、それを玩弄品に遊んで居つたが、何時しかこの單調な遊びに飽いて母の脊中に伸上り／＼むつかり出した。

若き母は腰を伸し、兩手を後に兒の顔を顧みて搖りながら、

『さあ坊や、最少し我慢して下さいな。後で直ぐ御乳をあげますからね』

何か氣を紛らす物は無いか、と見廻す中に庭の隅の椿の花が目に着いた。

細君は近寄つて、雪の腕を伸しつゝ、一輪ボキと折取つて、葉をパラ／＼と扱きおとし、

『オヽ綺麗だ、坊やこれあげませう』

兒は受取つて兩手に持ちつゝ、

『ちツ、ちツ』

『オヽ、ちッ、ちッ、ね』
母はこの間に、また張物に忙しい。
『鳥渡其邊まで往つて來るぞ』
障子の内に、まだ若さうな男の聲がした。
『左樣ですか』
細君は忙いで表の方に廻つた、切無い生活を仕て居る中にも、夫は矢張夫で立てゝ、下駄でも出して遣るのであらう。
『父さま、はァいちやア、オ、坊やはお怜悧〳〵』
兒をポン〳〵と我が脊に跳らせながら、莞爾と吾が子の顏を振向きつゝ、春の光の麗かに、滿渡つた庭に細君は歸つて來た。
『さあ、坊や最う直ですよ。坊やはほんとにお怜悧ですね』
言葉やさしく賺しながら、折しも何處となく、聞える、鶯の聲諸俱に腰を折つて、バケツに絞りあげた一束の切を取り、また戸に向つて張り出した母の脊にはパラ〳〵と兒が餘念なく椿の花をむしつては散して居る。
塵塚に棄てゝも梅の薫は消えない、今は兎もあれ昔は若しや、細縁の近龍を板のやうに敷込んだ四疊半の塗緣の爐邊に近う座を占めて、花簪の紅い房を雪の額にパラリと散し、紅入友染の振袖姿美しく、白魚のやうな指に茶筅を執つて、瀟茶の一服も立てたことのありはせぬかと、見受けらるゝ細君は、俄に物おもひでもするやうに、暫時は兒にも口利かず、今や一先張り終つて、眉を寄せつゝ腰を伸し、
『さあ、坊や濟みましたよ。姉ちやんは何處に行つたでせうね』
手を後に廻して搖りながら、垣を隔てゝ無心に通りの方を眺めて居ると、一輛の立派な腕車が北

の方から來かゝつたが、何うした時の機であつたか、車上の人と圖らず顔を見交した。

『オヤ、ま、お珍しいのねヱ友子さん――力藏や一寸こゝで』

殆ど轉ぶがやうに車を下りて、垣根に近く二歩三歩、

『まあ、何うせう』

笑み溢れて、腰を低く折つたのは、目の醒めるほど美しく着飾つた、我と殆ど同年配の貴婦人であつた。

『まあ、お珍しいのねヱ安子さん――

『最う逃げるにも逃げられず、垣を隔てゝ一禮して、近く進んだ友子の顔には、サッと生血が耳まで走つた。

『こゝに居らッしやるの、まあ、何時頃から』

『つい、この一月の末あたりから――貴娘は何地へお住居ですの』

『つい、この先よ一丁ばかり』

貴婦人は北に向つて、向ふを指さし、

『彼の七面坂――御承知でせうね。彼の坂の下の新築の家なのよ。まあ、幾年目でお目にかゝつたでせうね』

折つて數ふる四本目の指には何やら燦として貧家の妻の目を射つた。

『友子さん、今年で丁度九年目よ』

『オヤ、最う、そんなに成りますかね』

『貴孃は今年五で居らッしやるのね。私は最う七よ、おほゝゝゝ――先ア何うしたら宜いでせう、齡ばかし取つて……』

『でも、まだ貴女は何時までも相變らずお美しいわ。私などは贔負目に見て下さる仁でも、今年は最う丁度かなどゝ仰しやるのですもの』

『ま、おかわいさうに……でも大層おふけ成すつてね。まるで、異つた仁のやうですわ。失禮ながら何うお見受け申しても、上方流の華美な縫模様の付いた紅いお半襟で、紫の荒い矢絣のお召で、桃色紋繻子の巻帯に、蝦茶のお袴を胸高に召して、ボタン止のお靴でポク〳〵と活潑に、玻璃の窓越に綺麗な桃や櫻の見える學校の大講堂で、歩調をピアノの音に合して、互ひに交情よく手を引合つて、唱歌を歌ひながら、廻轉〳〵と浮世を他所に廻つて居らした彼の時の友子さんとは、ほんとにお見えなさらないわ』

『おほゝゝ、彼の時分のことを思ふと、まるで夢のやうですわ』

貧家の妻は慘として笑つた。

貴婦人は昔の友の、昔に變る今の身を、心窃に憫まずには居られなんだ。

『お髪が大層薄く成つてね。學校時代は寄宿舎で互ひに髪の結合を仕て居た頃は、貴孃のは隨分どつさり有つたわね』

『彼が皆なこんなに……』

友子は情なさうに手を髪に當てながら、女心の不圖向ふのを見れば、まだ綺麗に大一の丸髷に結つて、黒鼈甲に華美な金巻繪の笄、手柄もズッと紅味の勝つた蝦茶の鹿の子、半襟もモールの入つた大模様、鼠地の風通御召の二枚重に黒縮緬の羽織、帯は吾妻コートで見えぬが、これではまだ〳〵思ひ切つた大模様の、金入繻珍丸帯であらう。

二人は暫く言はず、互ひに笑みを含みつゝ、チツと顔を見合せて居つたが、何方も次第に昔の情が燃えて來た。

『こんな酷い所ですが、ま、ちよいとお入り下さ

いな』
『有がたう、今日は少し急ぎますから――』
云つても客は別れはせぬ。
『餘り打絶えましたので、一向御様子が分りませんが、何んですか……あのう兄……彼からズッと大學に御入りでしたの』
安子は話の方面を一轉した。友子の顔は再び曇つた。
『彼から太い怪我をしましてね……それに又丁度彼の年父の方は……御承知の始末でしてね……』
『あ、機械體操とやらでね……』
『その節は又直に御手紙を頂きまして』
『あの時お手紙をあげたのが、今日までのお別れでしたわ』
『つい、彼の時は御返事もわけないで――』

十二

『でも今日では最う悉皆お治り成すつて』
『はあ、まあ、お蔭さまで、今日ではね』
『ソリヤ、まあ、何より御結構ですわ、眞個にお危いことでしたね』
貴婦人は他に慰める言葉もない。
『貴孃の御兄さんは』
『兄はいやだ〱と云ひながら、到頭醫學士に成りましてね、最う今年で丁度五年獨乙に行つて居りますの』
『あ、それは　御結構で居らッしやいますね、宅などでも、彼からズッと恙なく行きますと、最う疾くに學校を出て居たのですが――』
『眞個にさうね。宅の兄は又ね、彼から少し病つて、丁度一年休學して、次手に高等學校丈は國で濟して、それから又此方に參りましたの』
『あ、左樣でしたか』

『兄は此方に參りますと、すぐ大學一覽表を操つて見て、モウ北山君は理科の二年に居なくちや成らんが、一年にも二年にも、また他にも名前が見えない、不思議だ、不思議だト初中終お噂をして居りましたが、今度歸つて來ましたら、久振でお目にかゝつて、嘸まあ喜ぶことでせう』

貧家の妻は、また愁ひの色を帶びた。

『何うも世の中はね　おもふやうに行かないもので…………』

『それは何處の家だつて、おんなじことよ友子さん……これが善ければ、また彼がね……………

貴婦人の面に浮んだ愁ひの色は、友子に遙か勝つて見えた。折から突然耳近く、

『ホヽヽほけきよう…………』

『アレ鶯が………と云はぬばかりに二人の婦人は、齊しくその方に振向いて見ると、十二三の酒屋の小僧が、體を斜にして腰のあたりに、例の岡持をぶらつかせつゝ、片手に食べかけの蒸芋を持つて、口笛に鶯の音を眞似ながら行くのであつた。

凜々と霜に閉ぢられた寒の夜のやうに、淋しい二人の顏は見る〳〵、嫣然たる微笑を以て春の日のやうに輝いて來た。

『巧いのねエ、私眞物かと思つたわ』

『好い時候に成りましたね』

言ひ〳〵友子は竹垣根に近寄つて、

『貴孃は何方へ御緣付き遊ばして…………』

『國の藥室……　……はら、御承知でせう…………わのう…………』

『あ、左樣ですか。それは先ア御芽出たう存じます……　……何時』

『御一緒に學校を卒業した彼の年の秋よ』

友子は友の幸福を賀するが如く笑顔して、
『ぢやアたしか海軍で居らッしやるのねェ』
『はあ、少佐よ』
四五間離れて立つて居る車夫は既に待飽いて、頻りに欠伸を吐いて居る。
友子が背の幼兒は、何時の間にやら目を閉ぢて、椿の小い枝ばかりを持つた儘、さも心地よげにスヤ〳〵と眠に落ちた。
『それは、まあ、御仕合で居らッしやるのねェ』
友子は少し俯いて、我が背に熟く眠つて居る未來の樂みを搖りあげた。
花のやうに裝ふた貴婦人の面には、見る〳〵一抹の愁ひの霞が棚引いた。吻ト熱さうな息を吐いて、
『春のお庭も嵐は避けて吹かないやうに、友子さん、何處の家でも善いことばかしは無いのねエ』

我のみと思ふ貧家の妻は、今の貴婦人の言葉を信ずるには、まだ世上の經驗が足り無いらしい。
『何うして……安子さん……』
『私も眞個に切無いわ』
涼しい目から涙が光つた。
『眞にね……』
『何う成すつて……』
貴婦人は菫色の手巾に、サト血走る顏を掩ひつゝ、
『假初にも教育を受けたものゝ、口にすべきことではありませんが……結局は私が悪いのですが、實に、實に、事へにくい姑でね……』
『まあ』
『友子さんあんぞは、眞個にお浦山しいわ』
『何故』
訝る聲には力が入つた。

『でも貴孃には、怖い姑に事へた經驗などは無いでせう………一人娘で居らッしやるから』

　刳るがやうに安子は詰つた。

『それは左樣よ。だが安子さん、私この上にそんな事までわらうものなら、それこそ生命が續きませんわ』

『世の中は善くしたもので、天は一人にばかり幸福は下さらないのねえ』

　安子は面に掩ふた手巾を取つて、身に泌むばかり淋しく笑つた。

『でも良人は、定めてお優しく居らッしやるでせうね………姑の烈しい家は、自然さうなるものだと云ひますから』

『ところが全然他所の家とは違うのよ。萬事が母さまと正比例でね、一人の御機嫌を害はうものなら一人も亦………それは私の罪だとしても、私餘り酷いと思ふわ。久振でお目にかゝつて、身の耻のお浚へをするのは、實にお耻しい譯ですが、まあ、友子さん、次手に聞いて頂戴な………私は貴孃を他人とは思はないから』

　いざ去らば涙比べんと云ふやうに、二人は暖き息の相通ふまでに、内外から垣根の傍に近寄つた。

『結婚後一二年は、そりや少しは夫婦らしくも仕てくれましたが、第一不幸なことには、私には何うしても小いのがありませんの。は、まだ一度もよ。で、去年の秋から麹町の本宅には妾を入れて、それと一緒に私はこの先の家に、別に病氣でも無いものを、身体の保養と云ふ名義で、一人の老婆を付けてね、謂はゞ体の好い檻禁同樣に爲られて居るのよ』

　語る中にも聲は次第に低く成つて、鼻も詰れば、目もおろ〳〵と曇つて來た。

『まあ、隨分酷いお仕打ね………』

それに比ぶれば、我が身は未だと云ふやうに、今度は反對に此方から、貧家の妻はこの不幸なる貴婦人をば憫まずには居られなかつた。

安子は又手巾に美しき顔を掩ひつゝ、屹度齒を切んで綴泣、

『友子さん、私ほんとに口惜しくてよ………切ないわ、辛いわ、こんなことなら死んだ方が増だと思ふわ………』

『實にお察し申してよ』

長いものは、胡蝶飛ぶ春の日と女の愁ひ話、二人は中々暇を告げぬ。

車夫は用意のヒーローも盡きたやら、車の蹴込に腰かけて、惘然と一面藍爲す天を仰いで、下界の混雜をば冷笑顔に輪を畫いて居る二羽の鳶を眺めて居る。

今日は土曜日で、學校の下りが早い。折から鍛茶の袴を胸高に穿いて、白薔薇の簪を挿した十五六の、何方も善く肥つた女生徒が、片手には倶に紫の包を抱へ、片手は仲よく取交しつゝ、聲を潛めて浮世を他所に唱歌仕ながら、吾妻下駄の音カラ〳〵と日暮里の方に向つて去つた。

安子はチット見送りながら、後姿をゆびさして、

『友子さん、彼をごらんなさいな、昔を思ひ出させるぢやありませんか』

『さうね、彼んなのを見ると、ほんとに昔が戀しいわ』

『一度はお互ひさまに、彼んな無邪氣な時代もあつたのねエ』

『切ては一日でも昔に返つて見たいわねエ』

『最う散つた花ですわ、彼の人達も今の中が春だわねエ』

『眞個に左樣よ、安子さん』
『今に彼のお袴を脱いで、束髮が斯んな圓髷に成ると一緒に、私や貴孃のやうに色々辛い思ひをするのだと思ふと、何んだか彼の後姿が憫然さうに見えるのねェ』
『最う彼の二人も直ですわ、おほゝゝゝ』
『かはいさうに………』
折から地響して午砲が鳴つた。
『アレ最う十二時ですか知ら』
安子は帶の間から、何やらピカリと光らせた。
耳近く響く工場の滊笛の音に、友子が背の幼兒は、むくと小い頭をあげて、
『彼方、彼方………』
友子は持向き、
『坊や、お目がさめましたの………ほうら、他所の叔母ちやん』

我が肩より越せるやうにして、友子は幼兒を昔馴染の友に示した。
渴して休んだ夏の木影に、圖らず淸水を認めたやうに、安子は俄に生々して、
『まア何んと云ふ可愛らしい御兒でせうねェ』
振ひつくやうに差覗いて、
『まあ、母さんのお脊を花だらけに成すつて…………あれ〱笑つて居らつしやるわ』
友子は振向き、
『アレまあ、何時の間にか花をむしつて………お目さわ、坊や、その枝を放棄なさいな………を突くといけないからね』
『まあ、眞個に可愛いこと、私何うにか仕たいやうだわ、ま、友子さん、鳥渡抱して頂戴な。さ、坊ちやん、まあ鳥渡叔母ちやんにいらッちやいな』

安子は夢中に成つて、生垣の上に雪のやうな兩手を出した。

『坊や叔母ちやんに行くかい』

『アレまあ、いやだつて友子さん……』

安子は今始めてこの幼兒の目に着いたのでもあるまいが、いかに愛らしい兒にもしろ、初めは未だ全く馴染の無い幼兒よりは、九年振で圖らず會つた昔馴染の母の方に自然情が傾いたのであつたが、今は反對に幼兒の方にその情が片走した。

『友子さん、貴娘はまあ實に御仕合ねエ……私はんとうに浦山しくて堪らないわ』

折から又友子の後に愛らしい聲が響いて、

『母さん何か頂戴な』

友子は後方を顧みて、

『文ちやん、お前何處に行つてたの、まあ、一人で危いこと。さ、この叔母さんにお辭儀をなさい』

『おや、その御娘も……』

安子が訝り覗く眼前に、五ツばかりの色の白い、美しい髮を紅く肥つた頰の邊までユラ〳〵と打被つた、笑ふ目元の何んとも云へぬ可憐娘が、丁度舟にでも乘つたやうに、母の大きな駒下駄の、鼻緒の色も褪めたのに乘つて、ズツと吾が前に近寄つて、穴の開いたゴム毬を、大切に兩手に抱へた儘、髮毛ユラリと頭を低げて、ニツコリ笑つてお辭儀をした。

『オヽ、まあ、お怜悧で居らッしやること。お孃ちやんや――ま、何んと云ふ、お可憐らしいお娘でせうね。これから毎日母さんと、叔母さん所に入らして頂戴な』

『母さん、この美しい叔母さんは何處の叔母さん』

『アレ先ア――』

『これはね、母さんの、昔の、學校の、お友達の、

なし、さんのよ』

さう。この叔母さん家何處……』

『つい、この先ですわ、入らッしやいな』

『手の取れない、お人形さんがわつて』

『母ありますよ、進げませうね、是非入ら叔ッやいな』

『叔母さん、今ア――』

少女はくるりと向直つた。

母は忙しく、

『アレ文ちやんや、今ぢや無いのよ』

『まあ――叔母さんが、今日歸りにあがりませう

これから何處へ――』

友子は問ふた。

『いやだけれど……鳥渡宅まで。友子さん、これから私にそのお娘を貸して頂戴な』

安子は心から希ふた。

『おほゝゝ、一人貰つて頂戴な』

『貰ひますわ……喜んで』

『文ちやんお前は、この叔母さんのお家に行くかい』

少女は目元に笑を含んで點頭いた。

『おほゝゝ』

母は笑つた。

『ぢやア娘ちやん、後刻に叔母さんが、お迎ひにあがりませうね』

少女は又輕く點頭いた。

『まあ、何んと云ふ可愛いお子でせうね、是非叙母さんの子に成つて頂きますわ』

貧者の黄金を羨むやうに、安子はヂッと見惚れて居る。

折から突然又小さき足音の地響して、

『桃から生れた桃太郎、氣はやさしく力もち、鬼ケ島をば擊たんとて、勇んで家を出かけたり…………母さん只今………御飯、早くさ』

『オヤ、友子さん、彼のお子も矢張さうなの…………』

安子は又目を圓くした。おれは板面をするぞ、と云ひさうな逞しい尋常二年生は、黑汁だらけの鞄を下して、ドンと椽先の障子に打付ける。

『アレ先ア猛ちやん亂暴ですね。それに今日は又お前一人おそかつたのね……皆最う先刻に歸りましたよ』

『三十分殘されましたやアい』

『また、何うして――』

『學校の玻璃窓に石を三ッ打付けて。母さん御飯………』

『いゝえ、あげませんよ。さあ、この叔母さんにお辭儀をなさい』

二年生は一寸垣根の外を見て、

『馬鹿言ッてら――男が女に叩頭などして堪るもんか』

『おほゝゝ』

安子は聲を放つて笑ふ。

母は顏を眞赤にして、

『これですものね、眞個に困りますわ』

『可いわ、活潑で。お幾ッ………大層おみ大きく居らッしやるのねェ』

『八ッよ』

『おやア、ぢやア直ぐ彼の翌年ね』

『左樣よ』

『まあ』

『私丸で布袋さんのやうだわ。女は十代で子持に成つちや、眞個に可憐さうよ。氣骨の折れる姑が

無ければこれですものねェ。世の中は何うせ好いことばかしは無いわ。髪一ッ洗う暇も無いのよ』

『だつて先ア、これがお金で買へませうか。友子さん、今に罰が當つてよ……そんな贅澤なことを仰しやると。まあ貴孃は何んと言ふ好い月日の下にお生れでせうね、世の中の寶を集めて居らッしやるわ』

『さざ柿見たやうに、實ばかし多いのも困つてよ』

『母さん御飯』

二年生は嚙み付くやうに。

『ぢやア鳥渡行つて參ります』

『最う行らッしやるの』

『叔母さんは、何處ゆくの』

少女は名殘可惜さうに。

『孃ちやん、叔母さんは、すぐ歸つて參りますよ、待つて居らッしやいな』

小さ頭に點頭いた。

車夫はカラ〳〵と車を引いて來た。

『ぢや御免あそばせ』

『左樣なら――』

安子はふはりと車に乘つた。

車は早南に向つて行くのである。安子は嫣然と振向いて、

『夢のやうだわ――嬉しいわ』

友子は垣根に沿うて後向きながら、

『直と歸つて居らッしやいな』

『歸途には屹度お寄り申してよ』

『お待ち申して居りますわ』

『左樣なら――』

『御機嫌宜う――』

跡には一路の春風が、ソヨ〳〵と吹いて來た。

(をはり)

露の音

柳川春葉

（上）

『お辰はゐないかえ。』

奥方の居間で、例の甲走つた聲が爲ると、今しも臺所でお晝食の支度を手助つてゐた、子守のお辰は慄然とした體で顏を揚げた。

『お前さん又お呼びなさるよ。勘吉さんが惡戯でもなすつたのだらう。疾く行くが可い。』

年上の女中が氣をつけるのを聞きながら、お辰は返事も爲ずに熟と考へ込んでゐる。

『お辰！何處へか行つたのかえ。』

『さあ〳〵疾く行かないと又火の手が強く成るよ、何うせ出て叱られなければならないのだから、早く行つた方が可いではないか。』

『難有う。其では此處は此まゝにして行つて來ます。』

お辰は前垂の塵を拂つて起上つたが、年齢は十六の裝り盛りを、奉公人の務は辛く、うす寒い袷の肩から襷を外して、悸々と奥様のお居間へ行く。

其處には三十四五の瘦形な、疳癪持らしい細君は火鉢の前に整然と座つて、長羅宇の煙管を疊に突いたまゝ、新聞の續物を讀んでゐる。六疊の座敷の隅には、今しがた手酷しい折檻を受けたのであらう。七歳ばかりの男の子が、泣いたらば又叱られうかと、聲も立てずにホロリ〳〵と涙を流してゐるのを、一目見るよりお辰は悲しさが喞と込揚げて來るのであつた。

『アノ私をお呼びになりましたのでございますか。』

敷居の外へ手を突いて、恐々伺つたけれど、奥

方は返事も爲ずに、口の裡で新聞を讀續けてゐる。
お辰は手持無沙汰と氣味惡さに、少時は躊躇ふ體であつたが、軈て男の子の傍へ立寄つて、
『坊樣、貴方は又何かお惡戯でもなすつたのではありませんか、平常から辰が能く申上げて置きますのに、貴方は少とも言ふ事をお肯きなさらないから可けないのですよ。何をなすつたのです。』
子供は詫をいふ者が來たのに氣強くなつたか、今迄の悲しさが一時に出で、最う我慢が爲されずに喚とばかり泣き出した。
『ソレお泣きなさると又叱られますよ。泣かずにお詫を仰有いまし。』
『叔母さんが僕を………。』
『貴方が惡い事をなすつたから奥樣がお叱りなすつたのでしやう。』
『叔母さんが打つた。』
『其れは仕方がございませんよ。貴方が。』
と云ひかける時、奥方は屹と顔を揚げて、
『喧しい！お默んなさいよ。勘吉お前は叔母さんに打たれたのが其樣なに口惜しくつて泣くかえ、子供のやうでも無い執念深い奴だつちやあない。惡い事を爲るから叔母が叱るのに何の不思議がありますえ。』
とお辰の方を睨んで、
『一躰お前さん達は何だえ。皆此處の家の厄介者や奉公人ではないか、其に一寸するとやれ私が邪慳だの因却だのと………イヽエ假令私の前では言つた事は無いにしろさ、平常の所置ぶりで能く解つてゐます。叱られるのが當然の事だと思つて恐入つてゐるのならば、何故他人が來た時に叔母さんが打つたの撲いたのと怨めしさうに告げるのだよ。』

『坊樣がお惡いのでございますから、今度は何うぞ御勘辨遊ばして下さいまし。』

『否、言ふ事だけ言はなければ勘辨は出來ません。今私しの言つた事に返事がありますかえ。』

『お稚い事でございますから。』とお辰が言ひけるのを遮つて、

『其れはお辰お前に聞かないでも能く知つてゐるよ。何うせ七歳や八歳の子供は無考さね。腹には何にもありはしません。』

『ハイ。』

『だから子供といふものは人の敎やうに依つて善くも惡くも成ります。罪の無いものだからねえ。』

『然樣でございます。』底意が解りかねるので、お辰はおど〳〵しながら答へる。

『さあ其だから私が斯う口喧しく言ふのだよ。』

煙草を詰めて、悠々と一服喫み、其まゝ無言で火鉢を見詰めてゐたが、

『私は何も斯んな頑是ない者を捕えて、七面倒臭い事を言ふ譯では無いのだよ。ねえ勘吉は高が子供さ、他人の言ふなりに爲るより他に考といふものはありはしない。だから勘吉の爲る事は皆四邊近所に從いてゐる者の平常の心懸から起るのだ、然うだらうお辰。』

と氣味惡げに笑つて、

『だから子供は人の敎やうで善くも惡くも成ると言つたのだが、お前だつて然樣でございますと今返事を爲たねえ。』

『ハイ。』 殆と泣きも出さんばかりに、お辰は慄えながら言つた。

『其は可いさ。勘吉が私の姿を見ると、猫に逢つた鼠か何かのやうに、御覧なさいまあ氣味が惡いではないか、ちよい〳〵と上目遣を爲て、私が一

言いふ度に悸々して、兎角目の前を逃げやう〱とする。其癖に陰へ廻ると人一倍の悪戯を爲るのに、私のゐる前では其通りだ、だから他人樣でもおいでなすつた時には然も〱平常から私が責折檻でも爲るやうに見えて、まことに極りが惡いではないか。考へても御覽、私は勘吉の叔母ですよ。旦那樣の甥であつて見れば、私の爲にも取りも直さず一人の甥さ。今は親も何も無いから私の方から親切に引取つて行々世話をする意だ。其れは親類であれば當然な事だといふかも知れないが、何うして今の世の中で親類だからといつて斯んな世話俗りな！手のかゝる！者を是から先の長い一生涯誰が世話を爲るものかね。其上に一人の奉公人では手が足りないから可哀さうだと、高いお給金まで出して、無駄な人を一人雇つて置くのは何れ程なお慈悲か知れはしないよ。

何うせ家には子供が無いのだから一人位は賑しに置いても可からうとお言ひかも知れないが、何の此兒が大きく成つたつて私達を養つて呉れる氣遣ひは無し、一人兒で家の名蹟を立るとやら、起すとやら、其んな人間が後々家の爲に成るものか。勘吉を此位にしてやるならば、同じ緣に繫る私の甥だつて何うにか爲てやりたいけれども、然うしたら又私が親戚贔負を爲るの何のと言はれるのが辛いから、稀に來る時だつてお土產を持たせてやる位にしてゐる。其位に爲る志が十分の一も解つたらば、勘吉だつて少しは私に懷からうではないか、他人に育てられたつて子供は生の親より可懷しがるものだ。其を此の叔母さんを見れば鬼にでも逢つたやうに可恐がるのは何たる因果な性だらう。

尤も勘吉は子供さ。別に了管はありますまい。が、

傍から兎や角入智恵を爲るものが多いから自然に然ういふ氣に成るのさ。』

と喋り勞れて、ホツと、嘆息を吐きながら、又煙草を吸付ける。お辰は恐入つて手を突き、

『奧樣、まことに私が惡いのでございます。決して入智惠なんぞを爲た事はございませんけれども、私の心懸が惡いので、坊樣までが飛んだ事を……………。』

『否お前は惡くはなからうよ。お前は能く勘吉の面倒を見てくれる。だから御覽なさい、彼の子は誰よりもお前を大切に爲てゐるではないか。お前に懷くから自然彼の兒がお前の言ふ事や爲る事を眞似るやうに成るのだ。と言つたからつて何も一一お前が斯うしろ彼樣しろとお菓子の摘み食ひや何かまで指圖する譯でもなからうけれど、まあ理屈を言つて見れば其樣なものではあるまいか。』

『然樣でございます。』お辰は口惜しさに俯いて唇を嚙みしめてゐる。

『まあ今度の事は是で可いさ。然し此後とも決して惡い智惠をつけてお呉れでないよ。私の方では子供に理屈を言つたつて頭から張合もありはしないから、惡い事を見付れば自然お前に喰つてかゝるやうに成ります。其も性來が馬鹿な子を利口にしろと註文するのは無理かも知れないが、人の目を盜んで惡戯を爲るやうな根性な子だから、何うして〳〵馬鹿で濟ます事は出來ないよ。』

『此後は氣を着けるやうに致します。何うぞ御許し下さいますやうに願ひます。』

奧方は默つて横を向いてゐる。お辰は勘吉の手を取つて、

『坊樣、是れからは決して奧樣に御迷惑をお懸けなすつては可けませんよ。能く御詫を爲て、而し

て忘れあいやうになさいまし。』

『叔母さん御免なさい。』勘吉は遠くから頭を下げた。

『能く覺えておゐで！然う〳〵は私も許す事が出來ないから、此後斯樣な事があつたらば叔父樣に申し上げて、何と仰有らうが、私が家へは置きませんよ。子供だつて親が無ければ、相應に智慧も出るものだ。』

と後は口のうちで冗々言つてゐたが、軈て新聞を手に取るのを見て、お辰は毒蛇の腭を逃れた心地、秘と勘吉を抱くやうにして障子の外へ出ると、奥樣は聞えよがしに嘆息を吐いて、

『ア、ア飛んだ厄介者ばかりだねえ。』

お辰は思はず振返つたが、口惜し涙が目に溢れてゐる。

（下）

『お辰さん又考え込んでゐるね。』

女中部屋のうちに向ひ合つて夜業仕事を爲てゐる朋輩のお島といふのが、針の手を止めて問かけた。

『私？否何も考へてはゐないわ。』お辰は力の無い聲である。

『又お前さん例の事で鬱いでいるのだらう。丁と解つてゐるわね。何うしたといふのだい今朝の小言は。』

『何うしたのだか私には解らないけれども、坊樣が何か惡戯をなすつたのだつて。』

『何時もの傳だね。而して大分又諷刺が出たやうではないか。』

『ハア然うですよ。』

とお辰は淋しく笑つたが、

『私が氣が利かないのだから猶且仕方が無いのでしやう。』

『何のお前さん？』

お島は膝を進めて、

『私は臺所に居たから能くも聞えなかつたけれど、齒痒くつて〳〵堪らないのだよ、お前さんは何だつて彼樣な小言を默つて聞いてゐるのだらう私ならば直に言返してやる。何有構うものかね、先方が無闇な事を仰有るのだもの、何程奉公人だつて口もあれば了管もある、犬だつて打たれゝば噛付くではないか。』

『けれども御主人に口返答を爲る事は出來ないし其に若し其樣な事でも爲たらば、猶且坊樣の御爲にも成るまいと思ふから。』

『お前さんは何うも氣が穩當すぎるから可けないよ。其樣な事を考へて御無理御尤で通すから、癖に成つて勝手放題な難題が出るのだからね。聞いてゐたら何だつて、坊樣が可恐がるのは傍の者が智慧を附けるからだつて!? 好な事を言ふでは無いか、子供は罪が無いから傍の成り次第で何うでも成るとさ。隨分蟲の好い文句ではないか、智慧を附けるも附けないもありは爲ない。よしんば傍から何と言はうが、可恐い者は可恐がり、大事に爲てくれる者には懷くのが人情だあね。而して其が子供の正直な處さ佛樣だか、鬼だか、彼のお子の平常の爲方が曇らぬ鏡さ。』

『お島さん聞えると可けないから、最うお止しなさい。』

お辰は恐る〳〵言つて手を掉るのである。

『何有構ふものか聞えて腹が立つたらば、つまりお暇を貰ふ分の事さ。』

と言つたが、有繁に奥を憚かつて聲を秘め。

『私は何うせ斯んな處に長く居る氣は無いから、御機嫌を惡くするのは少しも可恐くは無い、萬一

暇を貰ふやうな事があつたらば、私は思ふ樣面と向つて言つてやる覺悟さ、お前さんが餘り意氣地が無いからね。』

『だか然し私も今迄方々と奉公を爲て來たが、全く此處の奥樣ほど譯の解らない、意地の惡い人は無いと思ふよ。嫌な事ではないかね。彼樣な罪の無い子供を一生懸命に折檻してさ。其ばかりか、各自にまで飛沫をかけて怨まれるなんぞは後生の可くない事だねえ。』

『坊樣がお可哀さうで………。』お辰は最う涙組んでゐる。

『眞にねえ。』

お島も同じ思ひに沈んだが、軈て一層低聲に成つて、

『然し酷い事だよ、何程自分の全くの甥で無いといつたつて、少しは旦那樣の手前もありさうなものではないか、尤も旦那の家にゐらつしやる時には猫撫聲でゐるが………私の思ふのには彼樣してお前さんまでに辛く當るのは、早くお前さんに暇を取して、從者が無いから迚も手が廻らないといふので、勘吉さんを追出さうといふ腹だらうと思はれるよ。』

『然うかも知れませんねえ。』

『私のいふ通り、丁と解つてゐる事だわね。だからお前さんだつて、何うで先の見えてゐる事で、長く辛抱すれば樂に成るといふのでは無くつて、居れば居るだけ苦しむのだから、今のうちに早く退つて了ふ方が可いよ。』

『其は私も考へない事は無いけれども。』

お辰は顏にかゝる後毛を拂つて。』

『私だつて毎日々息を吐く間は無いのだがから實を話せば今日は宿へ退らうか、明日は………

と其は毎日口惜しいにつけ、悲しいにつけ、思ふけれどね。坊様の體が氣に成つて、然うしたら後で私の居ないので嘸お困りだらうと、其があるばかりで何うも思切つて出られない。此方ばかりに日は照らない。私も家へ歸つてゐる氣なら、內職でもして働けるし、又他樣へ奉公に上るにしても、體一つの振方はつくけれど、其は御暇が出た上の事、此方から退るのは何うも私には出來ないのですよ、其に彼のお子のお身の上がお前さんのいふ通り年中責められぬいた揚句、私でも居なければ、其を好い事に便も無い處へ捨てるやうに遣つてゞも了はれやうかと、私は苦に成つて仕樣が無いのです。』

とお辰は何時か泣出したのです。

お島も更け行く秋の夜のそゞろ寒さが身に沁みて、

『成程ねえ、お前さんのやうな温和しい氣の人は然う思ふのも無理は無い。私は斯んな我武者だから、腹が立つと一概に亂暴な事も言ふので、お前さんを意氣地が無いと云つた事は何うか氣にかけずにゐて下さい。』

『何の！其樣な事を兎や角思ふどころですか、しがない私を朋輩と思つて下さればこそ、隱ながら種々心配もして下さるのですもの。其御親切も無にして、自分の强情を張るやうですが、御存知のとほり私一人を便に爲てゐらつしやる坊樣が可愛いばかりですからね。』

『わゝ能く解つてゐます。お前さんが其心がけでゐるから、坊樣も何れほど幸福だか知れはしない彼のお子の御兩親も嘸草葉の陰で喜んでおゐでなさるでしやう。』

『エ、可恐い、最う其樣な事は言つて下さるな。』

とお辰は顔の色を變へた。

『だつて其に違ひないもの、怨まれるのは可恐いが、お禮に來られるのなら何も驚く事は無いではないか。今に御覧爲さい。奥様のお寐つてゐる枕頭へすつくりと立つて。』

『眞實に止して頂戴、最う〳〵其様事は眞平ですから。』

『臆病な人だね。』

『何うせお前さんのやうに強くはありませんわ。』

『ア丶私は是でも五人力さ。盗賊や妖怪は出てくれる方が心持が可い。』

『まあ何程あんでも。』

『女だから巴御前だけれども、私を男にしたら何だらうね……然う〳〵陰辨慶だらう。』

二人は聲高く笑つたが、お辰は又眞面目に成つて、

『然しお島さん、お前さんのやうな氣の強い人に賴めば安心ですが、萬一私がお暇に成つて此處を退るやうな事があつたらば、其から後はお前さんが坊樣の面倒を見てあげて下さいましよ。』

『又お前さんは其様な事を言出したね。私は妖怪は好きだが、其様な滅入つた話は大嫌ひ出るも殘るもありはしない、何うで私の方がお前さんより先へお暇だらうよ。然も無くつて萬一お前さんの方が先口に成つたら、私だつて一緒に退らあね。』

と一向に氣も無い顏。

『然うしたらば圭角が立つて惡いわ。』

『何の圭角も突當りもあるものか、私のやうな者が従いてゐた日には反つて事壞しに成るばかりだ其に一人で後へ殘つても何の途退るに極つたものなら……年季奉公といふではなし……お前さんのやうな人と一緒に出た方が私だつて人間並み顏が出來て心持が好い。其は奉公人根性で、

何につけても愚痴をいふが、然し此方のやうに、今迄何人となく來る奉公人が一人も長年してゐないのを見ても、大概家風が解つてゐる。だから又追出されたといふ惡名を脊負つて歸るよりも、此方からお見限り申しましたと言つて出代る方がましだからねえ。』

『其でも代人の無い處をお前さんが出たらば嘸當座にお困りだらう。』

『其は此方で知つた事ではない。若し代人の無いうちは暇がやられないといふたらば、自分の包を擔いで逃る分の事さ、私も今迄少しは世の中を渡つて苦勞して來たから、人の惡い事では負けは取らない意さ。』

と一寸奥の方を振返つて笑つたが、

『然しお世辭でも何でも無いが、お前さん位素直な人は見た事がない。何うして〳〵お前さんや私達の年格向で、其様な心懸の人は澤山ありは爲ないよ。』

『難有う、譽めて下すつて。』お辰は極り惡げに笑ふ。

『眞言ですよ。なか〳〵奉公人なんといふものは人間が擦れ切つて、挺でも棒でも自由に動くものではない。然し其だつて初のうちは皆溫しいものだけれど、段々此處のやうな處へ來て揉まれるから、終には皆私のやうに成つて了ふ。まあ私達に言はして見れば主人の方が惡いのさね。だからお前さんに能く言つて置きたいのは、先の事だから解らないが、萬一又是から他へ行つて氣に入られなかつたり、此方で氣に入らなかつたり、自然其處此處と渡るやうに成つても、何うか今の心がけを忘れないやうに爲てゐて貰ひたい。お前さんのやうな人なら他へ行つたつて決して氣に入

られないといふ事は無いけれども。其處が世間で隨分此處のやうな家も無いとは言へないからね。』

と言かけたが不圖聲を低めて、

『オヤ足音がする。奥樣のお見廻りだらう。』

案の定聽て障子の外から奥方の聲で、

『お辰、お前直に橋向の煙草屋まで行つて、何時も私の喫む雲井を取つて來ておくれ。』

『畏りました。』

お辰は氣輕に立上つて、帶を直す間も心忙しく、水口の戸を明けて外へ出れば、丁度十月も二十日頃の月はさやかにありながら、ハラ〱と音して袖にかゝるは、あはれ夜寒に落る露か。

『お島さん、坊樣がお起なすつたらお頼まうしますよ。』

早口に言つて兩袖を胸に合せたまゝ、カタコトと小走に出て行くのである。（完）



天長節の由來

文學士　宮崎鳥府

けふのよき日は云はまくも畏き聖上陛下の御誕生あらせられし嘉節にして、しかも今年は第五十回の佳辰なり、天下の生民誰か祝盃を捧けて、聖壽の萬歲を絶呼せざるものあらんや、余も亦聖恩に浴するの一人、いかでか之を祝せざるべき、聊か一篇を記して君が代にかへんとす。

抑も遠く天長節の故事を尋ね奉るに、其初めは紀元千四百三十五年にして、人皇四十九代光仁天皇の寶龜六年、唐帝千秋節の故事にもとづきて、十月十三日を天長節と定め給ふ時恰も佛法隆盛を極めたる折なりければ、天恩禽獸に及ばしめ

んとて、此日は殊に殺生を禁じ、諸國の僧尼をして經をよましめ、群臣には宴を賜ひて、祝意を表せられしと云ふ、これぞ本邦天長節の起原なるが、中世このかた、平氏立ち、源氏起り、北條、足利、織田、豊臣、徳川、相つゞきて、殆ど七百年間天下の政權を掌握したりしより、皇室は大に衰微して、此儀も自からすたれ、其名をさへ知る者なきに至りしは、まことになげかはしき事にてありき。

然るに天運ふたゝびめぐり來りて、大政は遂に復古し　今上陛下の御位に即き給ふや、其年八月、下の如き布告は太政官より發布せられたりき、

九月二十二日は、聖上御誕辰相當に付、此辰を以て群臣に酺宴を賜ひ、天長節御執行に相成り、天下の刑戮被差停候、偏に衆庶と御慶福を共に被遊候思召に候間、於二庶民一も一同御嘉節を奉祝候樣、被二仰出一候事

これぞ天長節御再興の初めなり、翌二年九月は、五穀豊穣ならざりしを以て、御宴會の儀をば省略せられ、翌三年九月七日に至り、天下の庶民皆く當日の佳節を祝し奉るべき旨、更に仰せ出されたりき、是れより以後、庶民悉く旭旗を揭げて祝賀せざるものなきに至りぬ。

次て四年八月廿八日、百官賀表を式部寮に差出すべき由命せられ、翌五年には櫻田練兵塲に於て、兵隊の整列を天覽遊ばされたりき、これ今の觀兵式の起原にして、祝砲をはなつの儀も亦此時に初まりしと云ふ。

同五年十一月陰暦を廢して陽暦を用ゐらるゝに及び從來の九月廿二日を、陽暦十一月三日に改めらる、翌六年正月布告ありて、人日、上巳、端午、

七夕、重陽の五節供を廢し、更に嘗年より紀元節、天長節を二大佳節となし、國家の祝日とは定められたり。

此年よりぞ、御祭典の儀式も全く完備せる由承りぬ、今きくがまに〳〵、當日の御儀式を記るし奉るに其次第は先づ早旦賢所、皇靈殿、神殿の裝飾ありて、御扉を開かる、此間雅樂寮の官人音樂を奏し、掌典神饌を供へ了りて、掌典長は徐に祝詞を奏し、次て侍從長陛下の御代拜として御玉串を捧げ奉る、次て東宮殿下、兩后陛下の御代拜ありて、宮内省官吏の禮拜あり、之にて式を了り、神饌を撤し、御扉を閉ざゝる、此間音樂を奏すること、開扉の時に同じと云ふ。

觀兵式は二十一年以來、青山練兵場を以て、式場と定められたり、當日午前八時三十分、御出門にて、式場へ行幸あらせられ、各大臣以下各國公使等をして、陪觀せしめ給ふ、これ我邦の軍隊は天皇、大元帥として親しく統卒し給ふ處なれば、國家の爲につくさせ給ふ、御大權の一端を施さしめ給ふ思召とこそ仰がるれ。

御祝宴は、午前十一時より豐明殿に於て行はる、親王以下大臣、勅任官、各國公使等御前に於て酒饌を賜ふ、此間樂人等前庭に於て、絶えず歐洲樂を奏し、以て餘興となす、こは新らしき御儀式にはあれど、其故實は昔よりありたり、古へ朝廷にて吉事あれば群臣に宴を賜ふことあり、これをトヨノアカリの節會（トヨノアカリは豐樂とも豐明とも書したり）と云ふ、かるが故に、平安朝時代、内大裡の莊嚴ありし頃には、宴會の御殿を豐樂殿とぞ申しける、今の宮中にて豐明殿を宴會の御所におてらるゝも、全くトヨノアカリの故事を存し給ふことゝこそ推しはからるれ。

祝賀の唱歌は、明治廿一年文部省にて撰定せられたり、歌は今の大歌所長高崎正風氏作り、曲は伊澤修二、上眞行二氏の作なりと云ふ、歌は四段よりなれり、其一に曰く

あまつ日影は、かはらねど、世の浮雲の行きかひに、晴れみ曇りみ定まらで、なゝもゝとせになりぬるを、今はと起る、ときつ風、四方の村雲吹き拂ひ、豐さかのぼる、御光りを、仰ぐ御代こそ樂しけれ。

合唱

君は千代ませ、八千代ませ、君は千代ませ、
八千代ませ、

右の歌なれるを以て、この日上野公園内華族會館に於て演奏會を催され、翌年より各學校に配布して、君が代のほぎ歌と共に、合せうたふことゝ定められぬ。

ときはかきはにゆるぎなき、目出たき御代に生れ出で、又もや今日のよき日にあふうれしさに、いさゝかそのゆゑよしを書いつけ、御代萬歲を祝しまつるにぞあん。

玉のうてなも柴の戸も
　我が大君のよろづ代を
祝ふ盃とりどりに
　うたふ今日こそ樂しけれ
君は千代ませ八千代ませ



愛讀者に謝す

前號豫告に隨ひ中村春雨氏の寄稿にかゝる小說をも掲ぐべき筈の處紙面の都合に因り遺憾ながら後日に廻はすことゝなせり愛讀諸氏の御諒恕を乞ふ

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

宮中御歌所寄人　中郡秋香著

訂正三版

女子の錦

八面玲瓏の芙蓉峰、朝日に匂ふ山櫻花、是我國の精ならずや、壯烈秋霜の如き節義、高潔氷雪の如き精神、是我大和民族の華ならずや、此秀麗と高壯とを發輝せるものは實に我か國文の精華とす

本書は古學復興以來諸名家の文詞巾金玉の響あるもの無慮數百編を輯錄せるものにして、記事あり紀行あり論説あり消息あり物語體も韻文もあり之に加ふるに要語數千を載せて作習の模範と應用とに供す故に常に此書を座右にせば天下の名文を會得し一度び筆を執れば千言萬語の長編大作一氣呵成するに至らん今や訂正三版を發賣す

●和裝高尙優美本●定價三十五錢●郵税六錢

久津見蕨村著

增訂四版

家庭教育　子供のしつけ

家庭教育不完全の弊漸く喧しく世上是が適切なる參考書を要求すること頗る急にして其之を缺けるがために子女教育上大なる不便を感じつゝあるは識者の常に遺憾となせる處なり

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚、兒童、少年、青年時代の四段階に至る家庭敎育の仕方を言文一致にて十三章百六十餘條に說き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ、直に實驗に試むることを得べきやう記述したる近來稀に見るの好著なり

●初版再版三版賣盡し增訂四版發行す　新日本の父母兄姉は座右に一本を是非備られん事を

●表裝淸洒艶麗●定價廿五錢●郵税四錢

發兌元　東京日本橋箔屋町十六番地　前川文榮閣

壹袋壹錢

壜詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の擬造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居樽形の登錄商標を相印し御座候間御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黒船町

梅素亭謹製

電話（浪花貳千貳百參拾四番）

全國到る處の小間物店にて賣捌申候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●わきが

根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**すること確證す殊に本劑にて一且全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑也▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

専賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話本局二五四六番)

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

専賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

大改良最新式 時計形文具 兼用 錢入發賣



本品は圖の如く龍頭無雙ニッケル側十九形兩蓋開きにて一面は墨池肉壺檢印等**文具**を備へ一面は**錢入**銀貨金貨紙幣印紙等を入る龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の**薄形**時計と異らず

景品 披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩蓋開き九拾五錢上製八拾錢小包送料百里內八錢百里外十六錢の割にて添送の事▲切手代用必ず二割増し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒手數に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候

専賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館商店**

總裁小松大宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵令夫人

發行所　東京麹町區下二番町三七　大日本女學會

第二卷第十號發兌

毎月一回十五日發行
定價金拾五錢
全國無逓送料

(卷首)樹下美人の圖●吉祥天女の圖(論說)諸人種の衣服總說、坪井理學博士●三輪田女學校開校式祝辭、大隈伯爵●眞正の美人、山澤俊夫(學藝)和書解題(大鏡、榮華物語)喜田文學士●日本名媛批評(上毛形名妻)下田歌子●兒童の言語(五)梅澤和軒●明治維新の原動力(八)津田黄昏●音樂の話(一)森しつか●作文批評、今泉定介●作歌批評、大口鯛二(修身)西三條實條公の後室より其息女へ遺されし文の解釋、下田歌子(齊家)點茶松浦伯爵●割烹、石井泰次郎●家計收支の實況(世務)法制談(地方自治體)岡戸法學士●經濟談(會社)伊藤秋南●各地產業の實況(二十五)「伊勢の紙煙草入」、伊勢守治、會員某(譚叢)小間使、稚松生(詞藻)本月六日宮中月次御歌會詠進●田邊和氣子日記●みやび會詞藻(雜錄)刺繡(承前)木村仲子●婦人論梗概(彙報)內外要報十數件

大賣捌

神田表神保町三　東京堂
京橋區銀座四丁目　東海堂
神田一ツ橋通町七　有斐閣
京橋區鎗屋町六一三　北隆館

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

鐵道分割時間表

第三種郵便物認可
各編毎月一回
定期發行

一 中央部 東海、北陸畿内各線
一 西南部 近畿中國四國九州各線
一 東北部 東北各線北海道各線
一 全國各線

（一部定價）
金五錢 金五錢 金五錢 金十錢

携帶便利、表裝優美紙質上等、印刷鮮明毎編色刷の地圖を添ゆ一目通覽に最も便あり

營業披露。年頭、地方得意先への贈物等に用ふるには表紙も意匠優美なる特製の御注文に應ず、見本は郵券七錢を要す

株式會社 國光社發行
東京築地二 電話新橋八八番全二六九三番

發賣元 國光書房
東京本鄉一丁目（電話本局三一四五）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



露の音

柳川春葉

（上）

『お辰はゐないかえ。』

奥方の居間で、例の甲走つた聲が爲ると、今しも臺所でお晝食の支度を手助つてゐた、子守のお辰は慄然とした體で顏を揚げた。

『お前さん又お呼びなさるよ。勘吉さんが惡闘でもなすつたのだらう。疾く行くが可い。』

年上の女中が氣をつけるのを聞きながら、お辰は返事も爲ずに熟と考へ込んでゐる。

『お辰！何處へか行つたのかえ。』

『さあ〳〵疾く行かないと又火の手が強く成るよ、何うせ出て叱られなければならないのだから、早く行つた方が可いではないか。』

『難有う。其では此處は此まゝにして行つて來ます。』

お辰は前垂の塵を拂つて起上つたが、年齢は十六の裝り盛りを、奉公人の務は辛く、うす寒い袷の肩から襷を外して、悸々と奥樣のお居間へ行く。

其處には三十四五の瘦形な、癇癪持らしい細君は火鉢の前に整然と座つて、長羅宇の煙管を盆に突いたまゝ、新聞の續物を讀んでゐる。六疊の座敷の隅には、今しがた手酷しい折檻を受けたのであらう。七歳ばかりの男の子が、泣いたらば又叱られうかと、聲も立てずにホロリ〳〵と涙を流してゐるのを、一目見るよりお辰は悲しさが啣と込揚げて來るのであつた。

『アノ私をお呼びになりましたのでございますか。』

敷居の外へ手を突いて、恐々伺つたけれど、奥

方は返事も爲ずに、口の裡で新聞を讀續けてゐる。
お辰は手持無沙汰と氣味悪さに、少時は躊躇ふ體であつたが、軈て男の子の傍へ立寄つて、
『坊樣、貴方は又何かお悪戯でもなすつたのではありませんか、平常から辰が能く申上げて置きますのに、貴方は少とも言ふ事をお肯きなさらないから可けないのですよ。何をなすつたのです。』
子供は詫をいふ者が來たのに氣強くなつたか、今迄の悲しさが一時に出で、最う我慢が爲されずに喚とばかり泣き出した。
『ソレお泣きなさると又叱られますよ。泣かずにお詫を仰有いまし。』
『叔母さんが僕を………。』
『貴方が悪い事をなすつたから奥樣がお叱りなすつたのでしやう。』
『叔母さんが打つた。』
『其れは仕方がございませんよ。貴方が。』
と云ひかける時、奥方は屹と顔を揚げて、
『喧しい！お默んなさいよ。勘吉お前は叔母さんに打たれたのが其樣なに口惜しくつて泣くかえ、子供のやうでも無い執念深い奴だつちやあない。悪い事を爲るから叔母が叱るのに何の不思議がありますえ。』
とお辰の方を睨んで、
『一躰お前さん達は何だえ。皆此處の家の厄介者や奉公人ではないか、其に一寸するとやれ私が邪慳だの因却だのと………イ・エ縱令私の前では言つた事は無いにしろさ、平常の所置ぶりで能く解つてゐます。叱られるのが當然の事だと思つて恐入つてゐるのならば、何故他人が來た時に叔母さんが打つたの撲いたのと怨めしさうに告げるのだよ。』

『坊様がお惡いのでございますから、今度は何うぞ御勘辨遊ばして下さいまし。』

『否、言ふ事だけ言はなければ勘辨は出來ません。今私しの言つた事に返事がありますかえ。』

『お稚い事でございますから。』とお辰が言ひけるのを遮つて、

『其れはお辰お前に聞かないでも能く知つてゐるよ。何うせ七歳や八歳の子供は無考さね。腹には何にもありはしません。』

『ハイ。』

『だから子供といふものは人の敎やうに依つて善くも惡くも成ります。罪の無いものだからねえ。』

『然樣でございます。』底意が解りかねるので、お辰はおど〳〵しながら答へる。

『さあ其だから私が斯う口喧しく言ふのだよ。』煙草を詰めて、悠々と一服喫み、其まゝ無言で

火鉢を見詰めてゐたが、

『私は何も斯んな頑是ない者を捕えて、七面倒臭い事を言ふ譯では無いのだよ。ねえ勘吉は高が子供さ、他人の言ふなりに爲るより他に考といふものはありはしない。だから勘吉の爲る事は皆四邊近所に從いてゐる者の平常の心懸から起るのだ、然うだらうお辰。』

と氣味惡げに笑つて、

『だから子供は人の敎やうで善くも惡くも成ると言つたのだが、お前だつて然樣でございますと今返事を爲たねえ。』

『ハイ。』殆と泣きも出さんばかりに、お辰は慄えながら言つた。

『其は可いさ。勘吉が私の姿を見ると、猫に逢つた鼠か何かのやうに、御覽なさいまあ氣味が惡いではないか、ちよい〳〵と上目遣を爲て、私が一

言いふ度に悸々して、兎角目の前を逃げやう〳〵とする。其癖に陰へ廻ると人一倍の惡戲を爲るのに、私のゐる前では其通りだ、だから他人樣でもおいでなすつた時には然も〳〵平常から私が責折檻でも爲るやうに見えて、まことに極りが惡いではないか。考えても御覽、私は勘吉の叔母ですよ。旦那樣の甥であつて見れば、私の爲にも取りも直さず一人の甥さ。今は親も何も無いから私の方から親切に引取つて行々世話をする意だ。其れは親類であれば當然な事だといふかも知れないが、何うして今の世の中で親類だからといつて斯んな世話燄りな！手のかゝる！者を是から先の長い一生涯誰が世話を爲るものかね。其上に一人の奉公人では手が足りないから可哀さうだと、高いお給金まで出して、無駄な人を一人雇つて置くのは何れ程なお慈悲か知れはしないよ。

何うせ家には子供が無いのだから一人位は賑しに置いても可からうとお言ひかも知れないが、何の此兒が大きく成つたつて私達を養つて吳れる氣遣ひは無し、一人兒で家の名蹟を立るとやら、起すとやら、其んな人間が後々家の爲に成るものか。勘吉を此位にしてやるならば、同じ緣に繫る私の甥だつて何うにか爲てやりたいけれども、然うしたら又私が親戚贔負を爲るの何のと言はれるのが辛いから、稀に來る時だつてお土產を持たせてやる位にしてゐる。其位に爲る志が十分の一も解つたらば、勘吉だつて少しは私に懷かうではないか、他人に育てられたつて子供は生の親より可懷しがるものだ。其を此の叔母さんを見れば鬼にでも逢つたやうに可恐がるのは何たる因果な性だらう。

尤も勘吉は子供さ。別に了簡はありますまい。が、

傍から兎や角入智惠を爲るものが多いから自然に然ういふ氣に成るのさ。』

と喋り勞れて、ホッと、嘆息を吐きながら、又煙草を吸付ける。お辰は恐入つて手を突き、

『奥樣、まことに私が惡いのでございます。決して入智惠なんぞを爲た事はございませんけれども、私の心懸が惡いので、坊樣までが飛んだ事を………。』

『否お前は惡くはなからうよ。お前は能く勘吉の面倒を見てくれる。だから御覽なさい、彼の子は誰よりもお前を大切に爲てゐるではないか。お前に懷くから自然彼の兒がお前の言ふ事や爲る事を眞似るやうに成るのだ。と言つたからつて何も一一お前が斯うしろ彼樣しろとお菓子の摘み食ひや何かまで指圖する譯でもなからうけれど、まア理屈を言つて見れば其樣なものではあるまいか。』

『然樣でございます。』お辰は口惜しさに俯いて唇を嚙みしめてゐる。

『まア今度の事は是で可いさ。然し此後とも決して惡い智惠をつけてお呉れでないよ。私の方では子供に理屈を言つたつて頭から張合もありはしないから、惡い事を見付ければ自然お前に喰つてかゝるやうに成ります。其も性來が馬鹿な子を利口にしろと註文するのは無理かも知れないが、人の目を盜んで惡戯を爲るやうな根性な子だから、何うして〳〵馬鹿で濟ます事は出來ないよ。』

『此後は氣を着けるやうに致します。何うぞ御許し下さいますやうに願ひます。』

奥方は默つて横を向いてゐる。お辰は勘吉の手を取つて、

『坊樣、是れからは決して奥樣に御迷惑をお懸けなすつては可けませんよ。能く御詫を爲て、而し

て忘れないやうになさいまし。』
『叔母さん御免なさい。』勘吉は遠くから頭を下げた。
『能く覺えておゐで！然う〳〵は私も許す事が出來ないから、此後斯樣な事があつたらば叔父樣に申し上げて、何と仰有らうが、私が家へは置きませんよ。子供だつて親が無ければ、相應に智慧も出るものだ。』
と後は口のうちで冗々言つてゐたが、軈て新聞を手に取るのを見て、お辰は毒蛇の腭を逃れた心地、秘と勘吉を抱くやうにして障子の外へ出ると、奥樣は聞えよがしに嘆息を吐いて、
『アヽア飛んだ厄介者ばかりだねえ。』
お辰は思はず振返つたが、口惜し涙が目に溢れてゐる。

（下）

『お辰さん又考え込んでゐるね。』
女中部屋のうちに向ひ合つて夜業仕事を爲てゐる朋輩のお島といふのが、針の手を止めて問かけた。
『私？ 否何も考へてはゐないわ。』お辰は力の無い聲である。
『又お前さん例の事で鬱いでいるのだらう。丁と解つてゐるわね。何うしたといふのだい今朝の小言は。』
『何うしたのだか私には解らないけれども、坊樣が何か惡戯をなすつたのだつて。』
『何時もの傳だね。而して大分又諷刺が出たやうではないか。』
『ハア然うですよ。』
とお辰は淋しく笑つたが、
『私が氣が利かないのだから猶且仕方が無いのでしやう。』

『何のお前さん?』

お島は膝を進めて、

『私は臺所に居たから能くも聞えなかつたけれど、齒痒くつて〳〵堪らないのだよ、お前さんは何だつて彼樣な小言を默つて聞いてゐるのだらう私ならば直に言返してやる。何有構うものかね、先方が無闇な事を仰有るのだもの、何程奉公人だつて口もあれば了簡もある、犬だつて打たれゝば噛付くではないか。』

『けれども御主人に口返答を爲る事は出來ないし其に若し其樣な事でも爲たらば、猶且坊樣の御爲にも成るまいと思ふから。』

『お前さんは何うも氣が穩當すぎるから可けないよ。其樣な事を考へて御無理御尤で通すから、癖に成つて勝手放題な難題が出るのだからね。聞いてゐたら何だつて、坊樣が可恐がるのは傍の者が智慧を附けるからだつて!? 好な事を言ふでは無いか、子供は罪が無いから傍の成り次第で何うでも成るとさ。隨分蟲の好い文句ではないか、智慧を附けるも附けないもありは爲ない。よしんば傍から何と言はうが、可恐い者は可恐がり、大事に爲てくれる者には懷くのが人情だわね。而して其が子供の正直な處さ佛樣だか、鬼だか、彼のお子の平常の爲方が曇らぬ鏡さ。』

『お島さん聞えると可けないから、最うお止しなさい。』

お辰は恐る〳〵言つて手を掉るのである。

『何有構ふものか聞えて腹が立つたらば、つまりお暇を貰ふ分の事さ。』

と言つたが、有繁に奥を憚かつて聲を秘め。

『私は何うせ斯んな處に長く居る氣は無いから、御機嫌を惡くするのは少しも可恐くは無い、萬一

暇を貰ふやうな事があつたらば、私は思ふ様面と向つて言つてやる覺悟さ、お前さんが餘り意氣地が無いからね。』

『だが然し私も今迄方々と奉公を爲て來たが、全く此處の奥樣ほど譯の解らない、意地の惡い人は無いと思ふよ。嫌な事ではないかね。彼樣な罪の無い子供を一生懸命に折檻してさ。其ばかりか、各自にまで飛沫をかけて怨まれるなんぞは後生の可くない事だねえ。』

『坊樣がお可哀さうで………。』お辰は最う涙組んでゐる。

『眞にねえ。』

お島も同じ思ひに沈んだが、軈て一層低聲に成つて、

『然し酷い事だよ、何程自分の全くの甥で無いといつたつて、少しは旦那樣の手前もありさうなものではないか、尤も旦那の家にゐらつしやる時には猫撫聲でゐるが………私の思ふのには彼樣してお前さんまでに辛く當るのは、早くお前さんに暇を取して、從者が無いから迚も手が廻らないといふので、勘吉さんを追出さうといふ腹だらうと思はれるよ。』

『然うかも知れませんねえ。』

『私のいふ通り、丁と解つてゐる事だわね。だからお前さんだつて、何うで先の見えてゐる事で、長く辛抱すれば樂に成るといふのでは無くつて、居れば居るだけ苦しむのだから、今のうちに早く退つて了ふ方が可いよ。』

『其は私も考へない事は無いけれども。』

お辰は顔にかゝる後毛を拂つて。』

『私だつて毎日々息を吐く間は無いのだがから實を話せば今日は宿へ退らうか、明日は………

と其は毎日口惜しいにつけ、悲しいにつけ、思ふけれどね。坊樣の體が氣に成つて、然うしたら後で私の居ないので嘸お困りだらうと、其があるばかりで何うも思切つて出られない。

此方ばかりに日は照らない。私も家へ歸つてゐる氣なら、內職でもして働けるし、又他樣へ奉公に上るにしても、躰一つの振方はつくけれど、其は御暇が出た上の事、此方から退るのは何うも私には出來ないのですよ、其に彼のお子のお身の上がお前さんのいふ通り年中責められぬいた揚句、私でも居なければ、其を好い事に便も無い處へ捨てるやうに遣つてゞも了はれやうかと、私は苦に成つて仕樣が無いのです。』

とお辰は何時か泣出したのです。

お島も更け行く秋の夜のそゞろ寒さが身に泌みて、

『成程ねえ、お前さんのやうな溫和しい氣の人は然う思ふのも無理は無い。私は斯んな我武者だから、腹が立つと一概に亂暴な事も言ふので、お前さんを意氣地が無いと云つた事は何うか氣にかけずにゐて下さい。』

『何の！其樣な事を兎や角思ふどころですか、しがない私を朋輩と思つて下さればこそ、隱なから種々心配もして下さるのですもの。其御親切も無にして、自分の强情を張るやうですが、御存知のとほり私一人を便に爲てゐらつしやる坊樣が可愛いばかりですからね。』

『あゝ能く解つてゐます。お前さんが其心がけでゐるから、坊樣も何れほど幸福だか知れはしない彼のお子の御兩親も嘸草葉の陰で喜んでおゐでなさるでしやう。』

『エ、可恐い、最う其樣な事は言つて下さるな。』

とお辰は顔の色を變へた。

『だつて其に違ひないもの、怨まれるのは可恐いが、お禮に來られるのなら何も驚く事は無いではないか。今に御覧爲さい。奥様のお寐つてゐる枕頭へすつくりと立つて。』

『眞實に止して頂戴、最う／＼其様事は眞平ですから。』

『臆病な人だね。』

『何うせお前さんのやうに強くはありませんわ。』

『ア、私は是でも五人力さ。盗賊や妖怪は出てくれる方が心持が可い。』

『まあ何程あんでも。』

『女だから巴御前だけれども、私を男にしたら何だらうね……然う／＼陰辨慶だらう。』

二人は聲高く笑つたが、お辰は又眞面目に成つて、

『然しお島さん、お前さんのやうな氣の強い人に頼めば安心ですが、萬一私がお暇に成つて此處を退るやうな事があつたらば、其から後はお前さんが坊様の面倒を見てあげて下さいましよ。』

『又お前さんは其様な事を言出したね。私は妖怪は好きだが、其様な滅入つた話は大嫌ひ出るも殘るもありはしない、何うで私の方がお前さんより先へお暇だらうよ。然も無くつて萬一お前さんの方が先口に成つたら、私だつて一緒に退らあね。』

と一向に氣も無い顔。

『然うしたらば圭角が立つて惡いわ。』

『何の圭角も突當りもあるものか、私のやうな者が從いてゐた日には反つて事壞しに成るばかりだ其に一人で後へ殘つても何の途退るに極つたものなら……年季奉公といふではなし……お前さんのやうな人と一緒に出た方が私だつて人間並み顔が出來て心持が好い。其は奉公人根性で、

何につけても愚痴をいふが、然し此方のやうに、今迄何人となく來る奉公人が一人も長年してゐないのを見ても、大概家風が解つてゐる。だから又追出されたといふ惡名を脊負つて歸るよりも、此方からお見限り申しましたと言つて出代る方がましだからねえ。』

『其でも代人の無い處をお前さんが出たらば嘸當座にお困りだらう。』

『其は此方で知つた事ではない。若し代人の無いうちは暇がやられないといふたらば、自分の包を擔いで逃る分の事さ、私も今迄少しは世の中を渡つて苦勞して來たから、人の惡い事では負けは取らない意さ。』

と一寸奥の方を振返つて笑つたが、

『然しお世辭でも何でも無いが、お前さん位素直な人は見た事がない。何うして〳〵お前さんや私

達の年格向で、其樣な心懸の人は澤山ありは爲ないよ。』

『難有う、讃めて下すつて。』お辰は極り惡げに笑ふ。

『眞言ですよ。なか〳〵奉公人なんといふものは人間が擦れ切つて、梃でも棒でも自由に動くものではない。然し其だつて初のうちは皆温しいものだけれど、段々此處のやうな處へ來て揉まれるから、終には皆私のやうに成つて了ふ。まあ私達に言はして見れば主人の方が惡いのさね。

だからお前さんに能く言つて置きたいのは、先の事だから解らないが、萬一又是から他へ行つて氣に入られなかつたり、此方で氣に入らなかつたり、自然其處此處と渡るやうに成つても、何うか今の心がけを忘れないやうに爲てゐて貰ひたい。お前さんのやうな人なら他へ行つたつて決して氣に入

られないといふ事は無いけれども。其處が世間で隨分此處のやうなお家も無いとは言へないからね。』

と言かけたが不圖聲を低めて、

『オヤ足音がする。奥樣のお見廻りだらう。』

案の定聽て障子の外から奥方の聲で、

『お辰、お前直に橋向の煙草屋まで行つて、何時も私の喫む雲井を取つて來ておくれ。』

『畏りました。』

お辰は氣輕に立上つて、帯を直す間も心忙しく、水口の戸を明けて外へ出れば、丁度十月も二十日頃の月はさやかにありながら、ハラ〳〵と音して袖にかゝるは、あはれ夜寒に落る露か。

『お嶋さん、坊樣がお起なすつたらお頼まうしますよ。』

早口に言つて兩袖を胸に合せたまゝ、カタコトと小走に出て行くのである。

（完）



天長節の由來

文學士　宮崎鳥府

けふのよき日は云はまくも畏き聖上陛下の御誕生あらせられし嘉節にして、しかも今年は第五十回の佳辰なり、天下の生民誰か祝盃を捧けて、聖壽の萬歳を絶呼せざるものあらんや、余も亦聖恩に浴するの一人、いかでか之を祝せざるべき、聊か一篇を記して君が代にかへんとす。

抑も遠く天長節の故事を尋ね奉るに、其初めは紀元千四百三十五年にして、人皇四十九代光仁天皇の寶龜六年、唐帝千秋節の故事にもとづきて、十月十三日を天長節と定め給ふ時恰も佛法隆盛を極めたる折なりければ、天恩禽獸に及ばしめ

んとて、此日は殊に殺生を禁じ、諸國の僧尼をして經をよましめ、群臣には宴を賜ひて、祝意を表せられしと云ふ、これぞ本邦天長節の起原なるが、中世このかた、平氏立ち、源氏起り、北條、足利、織田、豊臣、徳川、相つぎて、殆ど七百年間天下の政權を掌握したりしより、皇室は大に衰微して、此儀も自からすたれ、其名をさへ知る者なきに至りしは、まことになげかはしき事にてありき。

然るに天運ふたゝびめぐり來りて、大政は遂に復古し　今上陛下の御位に即き給ふや、其年八月、下の如き布告は太政官より發布せられたりき、

九月二十二日は、聖上御誕辰相當に付、此辰を以て群臣に酺宴を賜ひ、天長節御執行に相成り、天下の刑戮被差停候、偏に衆庶と御慶福を共に被遊候思召に候間、於庶民も一同御嘉節を奉祝候樣、被仰出候事

これぞ天長節御再興の初めなり、翌二年九月は、五穀豊穰ならざりしを以て、御宴會の儀をば省略せられ、翌三年九月七日に至り、天下の庶民皆く當日の佳節を祝し奉るべき旨、更に仰せ出されたりき、是れより以後、庶民悉く旭旗を掲げて祝賀せざるものなきに至りぬ。

次て四年八月廿八日、百官賀表を式部寮に差出すべき由命せられ、翌五年には櫻田練兵塲に於て、兵隊の整列を天覽遊ばされたりき、これ今の觀兵式の起原にして、祝砲をはなつの儀も亦此時に初まりしと云ふ。

同五年十一月陰暦を廢して陽暦を用ゐらるゝに及び從來の九月廿二日を、陽暦十一月三日に改めらる、翌六年正月布告ありて、人日、上巳、端午、

七夕、重陽の五節供を廢し、更に當年より紀元節、天長節を二大佳節となし、國家の祝日とは定められたり。

此年よりぞ、御盛典の儀式も全く完備せる由承りぬ、今さくがまに〳〵、當日の御儀式を記るし奉るに其次第は先づ早旦賢所、皇靈殿、神殿の装飾ありて、御扉を開かる、此間雅樂寮の官人音樂を奏し、掌典神饌を供へ了りて、掌典長は徐に祝詞を奏し、次て侍從長陛下の御代拜として御玉串を捧げ奉る、次て東宮殿下、兩后陛下の御代拜ありて、宮内省官吏の禮拜あり、之にて式を了り、神饌を撤し、御扉を閉ざゝる、此間音樂を奏すること、開扉の時に同じと云ふ。

觀兵式は二十一年以來、青山練兵場を以て、式場と定められたり、當日午前八時三十分、御出門にて、式場へ行幸あらせられ、各大臣以下各國公使等をして、陪觀せしめ給ふ、これ我邦の軍隊は天皇、大元帥として親しく統卒し給ふ處なれば、國家の爲につくさせ給ふ、御大權の一端を施さしめ給ふ思召とこそ仰がるれ。

御祝宴は、午前十一時より豐明殿に於て行はる、親王以下大臣、勅任官、各國公使等御前に於て酒饌を賜ふ、此間樂人等前庭に於て、絶えず歐洲樂を奏し、以て餘興となす、こは新らしき御儀式にはあれど、其故實は昔よりありたり、古へ朝廷にて吉事あれば群臣に宴を賜ふことあり、これをトヨノアカリの節會(トヨノアカリは豐樂とも豐明とも書したり)と云ふ、かるが故に、平安朝時代、内大裡の莊嚴ありし頃には、宴會の御殿を豐樂殿とぞ申しける、今の宮中にて豐明殿を宴會の御所にあてらるゝも、全くトヨノアカリの故事を存し給ふことゝこそ推しはからるれ。

祝賀の唱歌は、明治廿一年文部省にて撰定せられたり、歌は今の大歌所長高崎正風氏作り、曲は伊澤修二、上眞行二氏の作なりと云ふ、歌は四段よりなれり、其一に曰く

あまつ日影は、かはらねど、世の浮雲の行きかひに、晴れみ曇りみ定まらで、なゝもゝとせになりぬるを、今はと起る、ときつ風、四方の村雲吹き拂ひ、豊さかのぼる、御光りを、仰ぐ御代こそ樂しけれ。

合唱

君は千代ませ、八千代ませ、君は千代ませ、
八千代ませ、

右の歌なれるを以て、この日上野公園内華族會館に於て演奏會を催され、翌年より各學校に配布して、君が代のほぎ歌と共に、合せうたふことゝ定められぬ。

ときはかきはにゆるぎなき、目出たき御代に生れ出で、又もや今日のよき日にあふうれしさに、いさゝかそのゆゑよしを書いつけ、御代萬歳を祝しまつるにぞあん。

玉のうてなも柴の戸も
我が大君のよろづ代を
祝ふ盃とりどりに
うたふ今日こそ樂しけれ
君は千代ませ八千代ませ



愛讀者に謝す

前號豫告に隨ひ中村春雨氏の寄稿にかゝる小說をも掲ぐべき筈の處紙面の都合に因り遺憾ながら後日に廻はすことゝなせり愛讀諸氏の御諒恕を乞ふ

わきが 根治確證 新發見藥

從來腋臭藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓つて根治**することを確證す殊に本劑にて一且全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑也▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

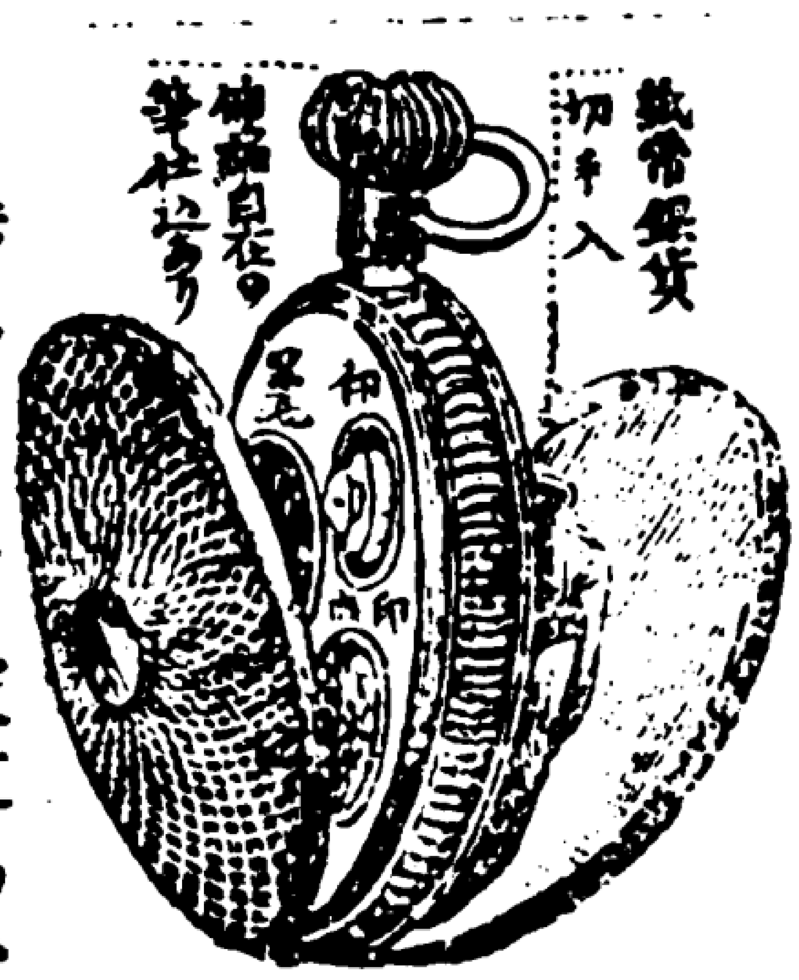
專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

大改良 最新式 時計形文具兼用錢入發賣



本品は圖の如く龍頭無雙ニッケル側十九形兩蓋開きにて一面は墨池肉壺檢印等**文具**を備へ一面は**錢入**銀貨金貨紙幣印紙等を入る龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の**薄形**時計と異らず**景品**披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩蓋開き九拾五錢▲上製八拾錢小包送料百里內八錢百里外十六錢の割にて添送の事▲切手代用必ず二割增し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候

專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館商店**

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

總裁小松大宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵令夫人

發行所　東京麴町區下二番町三七　大日本女學會

毎月一回十五日發行
定價金拾五錢
全國無遞送料

をんな

第二卷第十號發兌

（卷首）樹下美人の圖●吉祥天女の圖（論說）諸人種の衣服總說、坪井理學博士●三輪田女學校開校式祝辭、大隈伯爵●眞正の美人、山澤俊夫（學藝）和書解題（大鏡、榮華物語）喜田文學士●日本名媛批評（上毛形名妻）下田歌子●兒童の言語（五）梅澤和軒●明治維新の原動力（八）津田黄昏●音樂の話（一）森しつか●作文批評、今泉定介●作歌批評、大口鯛二（修身）西三條實條公の後室より其息女へ遺されし文の解釋、下田歌子（齊家）點茶松浦伯爵●割烹、石井泰次郎●家計收支の實況（世務）法制談（地方自治體）岡戸法學士●經濟談（會社）伊藤秋南●各地產業の實況（二十五）「伊勢の紙煙草入」、伊勢守治、會員某（譚卿）小間使、稚松生（詞藻）本月六日宮中月次御歌會詠進●川邊和氣子日記●みやび會詞藻（雜錄）刺繡（承前）木村仲子●婦人論梗概（彙報）內外要報十數件

大賣捌

東京堂　神田表神保町二
東海堂　京橋區銀座四丁目
有斐閣　神田一ツ橋通町七
北隆館　京橋鎗屋町六一三

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



明治三十五年十一月三日發行
每月二回五日廿日發行
第貳百六拾四號
明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

東京市京橋區築地二丁目株式會社國光社印刷